

---

# ひぐらしのなく頃に

泉海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に

### 【Nコード】

N6172M

### 【作者名】

泉海斗

### 【あらすじ】

昭和58年、雛身沢村を舞台に惨劇が起こる。

転校生前原圭一を中心に惨劇に挑む。

誰が悪魔の脚本の主人公になるのか……。

## 神隠し編 1 (前書き)

転校生前原圭一は、東京からここ雛見沢村に引っ越してきた。  
ここは惨劇の舞台でしかなかった。

圭一たちはこれを打ち破れるのだろうか……。

## 神隠し編 1

0、プロローグ

私は井の中の蛙……。井戸の外の世界を見たいとずっと思っている。

それでも何度上ろうとしても途中で落ちてしまう……。一体どうすればいいの？

教えてください……。私はもう飽きました……。この狭く、暗い世界に……。

フレデリカ＝ベルンカス

テル

1、楽しい日々

「おはよー、圭一君。2日ぶりだね。だね」

「おつす、レナおはよう」

俺は前原圭一。ここ雛見沢に引っ越してきて1週間。ここ2日は東京にいる親戚の葬式にいていて学校を休んでいたんだよな。俺の隣にいるのは竜宮レナ。かあいものには目がなく、かあいものドのレナを止められるのはほとんどいない。俺も止められない。

「……おはよう圭一！（おつす、圭一！）」

「おつす、ミサキ、涼子、祐樹」

今挨拶してきたのは俺の仲間の小野ミサキ、泉涼子、大葉祐樹。ミサキは俺と同じ中学2年生。御三家の古手家と親戚関係にある。泉涼子は俺より1つ年上の中学3年生。小さいときに東京から父親の仕事の都合で引っ越してきたらしい。つまりここで生まれたわけではない。もう1人、大葉祐樹。こいつも涼子と同じ中学3年生。御三家候補の大葉家に長男だ。

「いやー圭がいなかったから、勉強が大変だったよ」

「おいおい、俺がいなくてもそれくらいはできるだろうが。やれやれ」

「ぶー。仕方ないじゃないか。私そんなに勉強得意じゃないんだから……」

あれあれ、ミサキの奴落ち込んだしまったかな？

「ハウ。ミサキちゃんは圭一君がいなかったから、寂しかったんだよね。よね」

「おいおい。朝からお暑いですねーお2人さん。見せつけかな？ま、俺は沙都子一筋だからな。あはははは」  
相変わらずだな……。

「うふふ。祐樹、朝から俺はロリコンだー、なんて恥ずかしいこと大声でいえるんだ??」

ごもつともです。それにしてもここは空気がおいしい。それに信頼のできる仲間もたくさんいる。小さな村だけどみんな一生懸命に生きてるんだよな。そこへ……。

「おーい。みんなおはよう!!」

元気な女の声がしてきた。

「おはよう魅音。2日ぶりだな」

「おはよう圭ちゃん。何年ぶりかな??」

「あはは、魅いちちゃん大げさだよ。だよ」

「魅いも圭がいなくて寂しかったもんなー」

「え?え?ちつちがうよー、まっまあ心配だったのは本当だけだよ……」

「なんだなんだ??魅音、朝から顔が赤いぞ??まさか??くっくく」

「だー、違う違う!!もうみんな行くよ」

「そうだな。みんな行くぞ」

こんな他愛もない会話をしつつ俺達は学校へ向かった。

「とうとう今日も来てしまったか……」

俺の目の前には教室の入り口のドアがある。しかしここを無事に通

ることは難しい。なんでかって??

「おーほっほっほ。どうしましたの圭一さん。早くお入りになっ  
てはどうですか??もしかして怖いのでありますか??」

「なんだとー沙都子。ああいいぜ。もうここをちゃちゃつとクリ  
アしてやるぜー」

そういつて俺は中に突撃したのだが・・・。

「ぎゃー！！！」

見事に引つかかちまったな・・・。

「おーほっほっほ。朝から何を騒いでますの??圭一さん」

「ハウ。圭一君大丈夫かな?かな?」

「あはは、圭ちゃんいつもどおり気持ちいい位の引つかかりよう  
だねー」

くそー。俺だった引つかかりたくて引つかかかってるんじゃないんだ  
よ。

「みー 圭一はかわいいそかわいそなのです」

「ありがとう梨花ちゃん」

この子は古手梨花ちゃん。御三家の1つ古手家の頭首だ。今は両親  
が居らず、同じ状態の沙都子と一緒に生活している。なんでもオヤ  
シロ様の生まれ変わりと言われているらしいな。

「それよりも沙都子。今日もでこピンの刑にしてやるぜ!!覚悟  
しろー！！！！」

「いやー。来ないでくださいまし。このケダモノー」

「誤解の生むようなことを言うなー!!」

は!!??この感覚はまさか・・・。

「ハーウー、泣いてる沙都子ちゃんかあいいよー」

ドカ バキ バコ

「うーうー痛い・・・」

相変わらずレナパンはかなりの威力を誇ってるぜ・・・。

「うふふ、圭大丈夫かな??レナパンを止められる人はいないよ」  
悪いなミサキ。しかしいつものことだけど痛いな・・・。

「はいはい。皆さん早く席についてください」

「……はあーい」

こうして俺達の1日が始まった。

離見沢分校は全校で20人程度しかいないため1つのクラスに全員が入って勉強する。

先生は知恵先生1人しかいないため、俺が他の生徒の勉強を教えている。なんだって俺は都会にいるとき常に全国模試で1位を取っていたからな。これくらいは朝飯前だった。

「ハウ。圭一君はホント教えるのが上手だね。だね」

「そうだねー。まあ長所は勉強ができるくらいだとおじさんは思うよー」

「そいつはひどいな。俺だって色々できることだってあるんだぜ」

「うふふ。それは何かな??」

「そんなに言うなら放課後の部活に参加させてみればいいじゃないか魅音」

「そうだね。圭も入れればもっとにぎやかになるかもしれないよ」

「部活??」

「ハウ。ええつとね、放課後に毎日魅いちちゃんが持つてるゲームをみんなでもやる部活なんだよ。だよ」

「どうだい圭ちゃん。入ってみる気はないかな??」

「よし!!その話乗った。この前原圭一、お前らをぎったんぎったんにしてやるぜー」

「うふふ。そんなに簡単にいくかな??しかも負ければ恐ろしいことが待ってるからねー」

「まあ、入ったばかりの圭一が罰ゲームを受けるだろうなー」

「なんだと??やってみなきゃわからないだろ??」

「こら!!あなたたちまだ授業中です!!部活の話は休み時間にしなさい!!!」

「……はい!!!」

こうして昼飯の時間……。この時間はお互いのおかずを奪い合う

という恐ろしい戦いが始まる時間でもあった。

「おらー、そのミートボールは俺様がもらったー」

「おほほほ。圭一さんが食べるミートボールはありませんですこ  
とよ」

「ハウー。レナは何食べようかな??」

「あははは、圭ちゃんがんばれ。おじさんはつと……」

「おらおらみんなの俺様が全部食べちまうぞー」

「祐樹落ち着きなよ。そんなに急ぐ必要はないよ」

「みー ぼくはみんなと違うものをいただくのです。にぱー」

「やれやれ。ここは毎日戦場だな……」

こうして午後の授業も終わって放課後……

「はい注目 。前原圭一君を我が部活に参加させたいのだが  
みんなはどうだろうか」

「ハウ、レナはいいよ」

「しょうがありませんわね。特別に入れて差し上げてもよろしい  
ですこと」

「みー ぼくも賛成なのです。にぱー」

「私もいいよ」

「まあにぎやかになるからな」

「うふふ。いいんじゃないか?? 賛成するよ」

「ということで満場一致で圭ちゃんの部活参加は認められました。

よかったねー圭ちゃん」

「みんなありがとう。よっしゃーやるからには1位になってやるぜ  
ー」

「みー 魅い今日は何をやるのですか??」

「そうだね……。よし。今日はシンプルにジジ抜きをやるうか  
ね」

「よっしゃー俺が1位だー」

「おーほっほっほ。圭一さんはびり確定ですは。なんたってこのト  
ランプは……」

「ハウーーーーー。沙都子ちゃんこれはまだいつちゃだめだよ。だよ」

「ん??レナどうしたんだ??」

「ハウ。なんでもないんだよ。だよ」

「そうか??トランプがどうのって聞こえた気がするのだが・・・」

「「「「「ぎく「「「「」」

「あははは、なんでもないんだよ圭ちゃん気にしない気にしない」  
「んーーーー。なんか違和感があるんだよなー。まあいいか。さっさとはじめようぜ」

そうして結果は・・・

「うわーーーーまた負けたーーーー。なんでだーーーー」

「あははは、圭ちゃんどうしたのかな??最初の威勢はどこへやら」  
「ハウ。圭一君ガンバだよ。だよ」

「やれやれ。圭はまだ気付かないのか??」

「うーーーーん。ん??まつまさかこの傷物トランプって・・・」

「みーみんな傷で番号が分かるのです。にぱー」

「うがーーーー。やられたーーーー」

「おーほっほっほ。やはり圭一さんは都会の人ですわ」

「圭ードンマイ!」

「くそー・・・で??罰ゲームってのはなんなんだ??」

「うふふふ。圭覚悟を決めたほうがいいよ」

怖いんですけど、ミサキさん・・・てみんな怖い怖い目が尋常でない。

「あはは。圭ちゃんの罰ゲームはこれだよ」

魅音の手にあるのは・・・

「メイド服　??」

「ぶははは。圭ードンマイだな。これを着て村1周するんだぜ」

「な、なんですとーーーー。嫌だーーーー。こんなの着れるかーーーー」

「圭一君。覚悟はできてるよね。よね」

「あはは。よっしゃー。みんなで圭ちゃんの着替えをてつだおー」  
「おー」  
「やめてー」

断末魔の悲鳴が村中に響き渡った・・・そう、ひぐらしが鳴くのと  
ともに・・・。

「うう・・・しくしく。もうお婿にいけない」

「やれやれ大袈裟なんだよ圭は」

「ハウーメイドの圭一君かぁいいかったんだよー」

「うふふ。確かに似合ってたね」

「まったくこっちのみにもなってくれよ。さっきだってレナにお持ち  
帰りされそうだったんだからな」

「あはは。明日はどうなるのかな??また明日も圭ちゃんだったり  
して」

「なにおー。明日はお前らに恥ずかしい格好にさせてやるぜー  
ー」

こうして俺の最初の部活が終わった。

そして数日後部活・・・。

「うがー。また負けたー」

「ハウ。レナが1位なんだよ」

「あちゃーおじさんもう少しかったんだけどなー」

「うは。俺なんか僅差でビリ回避だぜ」

「やれやれ今日も圭が罰ゲームかな」

「うふふ。圭がんばー!!」

「応援されてもちっとも嬉しくないんだけどな」

「みー。今日はスク水に猫耳なんですか??」

「ハウ・・・。今日はね圭一君にレナのお手伝いをしてもらいた  
いんだけどいいかな。かな」

「ああ、別にいいぜ。罰ゲームよりだったらまだましだからな。帰  
っても勉強ぐらいしかしないからな」

そうして俺とレナは一緒にある場所に移動した。

「こつこつは??」

「ハウ。ここはねレナにとって宝の山なんだよ。だよ」

「たつ宝の山ね・・・」

「圭一君ちよつと来てくれないかな」

「なんだろうとばかりにレナの近くの行ってみると・・・」

「ハウ。ケンタくんだよ。かあいねー」

レナがほしがってるのはケンタ君人形だった。

「しかし力なら奥に埋もれてるんだな。これは今日中には難しいぞ。それに何か切れるものがないとな・・・」

「ハウ。じゃあレナが何か切れるものを探してくるよ」

「わかったそれまでにできるところまでやってみるよ」

そうして一時俺達は別行動を始めた。

何時間たったのだろうか。辺りは夕日に染まっていた。

ぱしゃ ぱしゃ カメラのシャッター音 俺はすぐに音のしたほうを見た。そこにいたのは1人の男性。

「なんなんですか??いきなり許可なく写真を撮るだなんて」

「いやーごめんごめん。あまりに夕日と君がマッチしていたもんだからね。思わずシャッターを押してしまったんだ」

「あなたは??」

「ぼくの名前は富竹ジロウ。フリーカメラマンだよ。君は??」

「俺は前原圭一です。今月からここに引っ越してきました。どうぞよろしく」

「ああ。こちらこそよろしく前原君。ところでこんなところで何をしていたんだい??」

「友達がここで宝探しをしたいと言ったのでその手伝いをしに来たんです。その友達は今ものを切れるものを取りに行っていないせん」

「圭一君。持ってきたよー」

「あの子ですよ。俺が手伝いをしているのは」

「ハウ。富竹さんこんにちは。お久しぶりですね」

「やあ、礼奈ちゃん去年の綿流し以来だね」

ここで圭一は疑問を感じていた。なんでレナが礼奈って呼ばれているのかと……。

「なあレナ……。お前の名前って礼奈なのか??」

「違うよ」

急に空気が変わった。

「え??だつてこちらの富竹さんはレナのこと礼奈って呼んでるだろ??」

「違うよ。レナの名前はレナだよ。礼奈なんて名前知らないな」

怜奈が言ってることが全く分からない2人。

「ごめんごめん。レナちゃんだったね。圭一君、僕がレナちゃんと似ていること間違えたようだ。あはは」

「そっそうなんですか。悪かったなレナ、変な事を言つて……」

「気にしてないんだよ。だよ。其れより圭一君早くケンタ君をとりだそうよ」

空気がまたさつきと同じになった。いったいなんだつたのだろうかと不安に思いつつも作業に向かう圭一だった。

「それじゃあ僕はそろそろ帰るかな。2人ともあまり遅くならないようにね」

「「はーい」」

富竹が帰った後も2人は宝物を探すのに没頭していた。

「圭一君、レナはあっちのほうを探してくるね。圭一君は少し休んでていいよ」

「わかったよ。あんまり奥に行くなよ。あと何かあったら教えてくれよ」

「うん。わかったよ。ハウー！。かあいいものはどこかな??かな??」

レナがいなくなった後しばらく休んでいた圭一はあたりを散策していた。

「しかしいろいろなゴミがあるもんだな。怜奈は何かあいいのかな??おれにはさっぱりわからんぞ」

そんなことを口ずさみながらしばらくして……。

カサ カサ カサ

「ん？なんだこれは??」

よく見てみるとそれは古新聞だった。

「なにになに??」

難見沢連続怖死事件また起こる??

4年連続で1人がなくなり、1人が鬼隠しに遭う。

死亡者 北条……

行方不明者 北条悟史

「え??」

圭一はその記事にくぎ付けとなった。まさかこんな物騒なことが起きているなんて。

そんなとき……。

「圭一君そろそろ帰らない??暗くなってきたから」

「ああ……、そうだな」

「ハウ???どうしたのかな??かな??元気ないようだけど」

「あっああ。なあレナ」

「ん???何かな圭一君」

「ここでさ……殺人事件なんて……」

「なかった」

圭一は一步後ずさり押してしまった。レナの目がいつもと違ったからだ。

(なんだあの目……。なんか心を読まれているような)

「そっそうなのか……。あはは……。おれの見間違いだったのかな?」

「そうだよ……。圭一君の見間違い。勘違い。ここではそんなことは起きていない」

この後二人は一言もしゃべることなく帰宅したのだった。

カナ カナ カナ ひぐらしが鳴いている

## 神隠し編 1 (後書き)

次回から開かれる惨劇への扉。  
意見感想をお待ちしています。

神隠し編 2 (前書き)

前原圭一に近づく魔の手……………。

## 神隠し編 2

### 2、 暗転

この日もいつもどおりに部活が開かれていた。圭一も事件に記事のことを忘れた如くはしゃいでいた。

(こんな楽しい日々がいつまでも続けばいいな)

そんな圭一の淡い願いは一人の男によつてもろくも崩れ去ることになる……。

「前原君。お客様がいらつしやいましたよ」

「なんだ??俺にお客??」

「なんだ??圭ちゃん何かやらかしたのかな??」

「ハウ。魅いちちゃん圭一君は何もしてないよ」

「うふふ。圭早く行つてきなよ。そんなに待たせちゃうと相手にも失礼だよ」

「わくてるよ。今行つてくら〜」

そうして圭一を待っていたのは……。

「んふつふつふ。お待ちしていましたたよ前原圭一さん。私興宮警察署の大石と申します。以後よろしく願ひします」

「こんにちは。前原です。ところで今日はどんなご用件で??俺は別に何もしてませんけど……」

「んつふつふつふ。立ち話もなんですからクーラーのきいた車の中でお話ししましょう」

大石の誘いに無言で圭一は従う。

「ふー。それでは今日あなたに来ていただいた理由をお話しします。あなたは四年連続で起きている事件を知っていますか??」

(事件??四年連続??まつまさか)

「やっぱり有つたんですか??殺人事件……。俺はこの前ゴミ捨て場で友達の手伝いをしているときに古新聞でそのことを知ったんですけども、友達に聞いても無かつたの一点張りで……。今日大

石さんが言うまでは確信していませんでした」

「そうですか。私はねその連続事件は村ぐるみで行われていると思うんですよ」

「村ぐるみですか??」

「はい。殺されているのは……」

・一年目 ダム建設責任者二人

・二年目 北条家両親

・三年目 古手家両親

・四年目 北条…… 北条悟史

なんですよ。全くつながりが分からない。だからあなたが何か握ってるんじゃないかって思ったんですよ。最近引っ越してきたあなたなら何か知っているんじゃないかと」

「すいません大石さん。これにつきまして俺も今日初めて確信したわけなので……何もいうことはありません」

「そうですか……。ああすいませんでしたね。わざわざ時間をもらってしまって」

「いいですよ。おれも何も知らないままじゃ……。嫌でしたから仲間外れになりたくない……。圭一は必死になって仲間との絆をつなぎとめようとしていた。それはとてももろく、切れやすい糸のようなもので……」

「何かあったらここに連絡してくださいすぐに駆けつけますので。」

それでも気お付けてくださいよ。なぜあなたに隠していたのか……まだ理由がはつきりしていないんですからね」

それを聞いて圭一は何か胸の奥で生まれたのを感じていた。

「あはは。俺に気を使ってくれたんじゃないですかね」

「まあ気を付けてくださいね。それでは」

そうして大石は帰って行った。圭一の心に疑心暗鬼という花の種をまいたまま。そうして圭一は教室に帰った。

3、 仲間

「圭一誰と話してたんだ??」

真つ先に聞いてきたのは祐樹だった。

「ああ、警察の人だったよ。なんでも殺人事件について調査してるらしくってさ。俺に何か知ってないかって聞いてきたわけ。何も知らないのにな。あはは」

「……………そうだね(そうだな)(そうですわね)……………」

「……………」

(なんだ??みんなして……………それにみんなの表情がおかしい……………なんか……………前にレナににらまれた時のような……………おれの心をのぞくって感じの……………おれだけ仲間はズレなのか?)

ズキンツ ズキンツ 胸のあたりが痛み出した。

ペタ ペタ ペタ 何かが歩いている足音。 振り返ってみても何

もない……………。

「なんなんだ??」

「どうしたのかな??圭一君」

まだあの表情のままレナが効いてくる。正直圭一は耐えられなかった……………自分だけがよ者扱いされることに……………。

「なんでもない……………。なんでもないんだ……………。俺……………もう帰るわ」

そう言っつて一人圭一は帰宅したのであった。

ズキンツ ズキンツ まだ胸が痛んだ……………。

(そう……………なんでもないんだ……………。俺はいつたい何なんだ? ?ただのよ者か??)

不安になりながらも圭一は帰宅して眠りについた。

今日は土曜日休日だった。しかしそんな日でも部活はある。しかし圭一は図書館で事件について調べるために今日は体調が悪いと魅音に嘘の連絡をした。

自転車を飛ばしてついたのは興宮の図書館。圭一は連続事件について昔の新聞をあさっていた。

数時間後……

「あつたあつた。やつぱりあつたんだな。确实だ」

コツ コツ コツ

「あら前原君じゃない。どうしたのかしら。いつもなら部活に行ってるんじゃないかしら」

そういつてくるのは入江診療所の看護婦鷹野三四だった。

「こんにちは鷹野さん。今日はちよつと調べものがあつたので……」

「調べものつて何かしら??」

「ええつと……、連続殺人事件についてです」

その時鷹野の表情が一瞬強張った。しかし……

「くすくす。いいわね。好奇心があるつてのは。私もいろいろ調べているの……オヤシロ様について」

圭一は最初何を言っているのかわからなかった。

「あの……鷹野さん。オヤシロ様つて何ですか??」

「くすくす。オヤシロ様つていうのは雛見沢の守り神みたいな存在ね。そのオヤシロ様は拷問などの恐怖によつて人々に信仰を強制してじたの……。村のお年寄りはおヤシロ様の盲信者つてところから。まだオヤシロ様の祟りを恐れているからね」

「オヤシロ様の祟り??」

「そう……。ここから別のところに行くとな人体に何らかの症状が出てしまうらしいの……。雛見沢に長くいる人はね……。だからあなたも気をつけたほうがいいかもしれないわよ」

そういつて鷹野は帰って行った。圭一の花に不安という肥料をまいて……。

その次の日……

「おはようレナ、涼子、ミサキ、祐樹」

圭一はいつもどおりに挨拶をする。

「おはよう圭一君。もう体調はいいのかな??かな??」

「ああもう大丈夫だよ。心配掛けちまったかな??」

「うふふ。もうみんな心配してたんだからね」

「やれやれ。中学二年になっても体調管理を徹底できないなんてな  
」

「まっただくだ……。少しは俺様を見習ったらどうなんだ。圭一よ  
ウルサイナ

「ああ 悪かったって。早く行くうせ、魅音が待ってるからさ」  
そう言ってみんなで魅音のもとに行き、いつもどおりの一日を過  
せるはずだった……

現在は放課後……部活の時間……

「ねえ圭ちゃん……。ちよつと話があるんだけど……。いい  
かな??」

魅音が珍しく圭一を誘ってきた。

「ああ。別にかまわないぞ。みんなちよつと待っていてくれ」

そう言つて二人は裏庭にきた……。なぜかレナもついてきて……

「ねえ圭ちゃん土曜日はどこ行つてたのかな??」

「え??どこにも行つてないぜ。ずっと家で寝てたけどな」

「嘘だ!!!」

いきなりレナが叫んだ。

「な何をいきなり叫ぶんだよレナ」

「圭ちゃん……。本当のことを言つてよ……」

「本当に家にいたんだって……」

「ふ〜ん。そうなんだ……」

「まあいいや……。圭ちゃんがそこまで言つんだからね……。  
そうしてあげるよ」

何を言ってるんだ二人は??と思う圭一がいた。

「でもね圭ちゃん・・・それが嘘だったら私たちとっても悲しいな・・・。仲間ってもんは隠し事無したもんね・・・。」

「そうだね・・・。だね。レナは信じてるよ・・・。圭一君が嘘はつかないってこと」

二人はそう言っただけで帰って行った・・・。しかし圭一はただ愕然とするしかなかった・・・。

(俺はもう一人ぼっちなのか??)

ナカマナンテサイシヨカライナカッタ

(でもあいつらは俺のことえお信じている)

デモオレハウソヲツイテシマッタ トリカエシノツカナイウソヲ  
ツミヨ

ただ立ち尽くすしかできなかった・・・。

神隠し編 2 (後書き)

感想よろしくお願いします。

神隠し編 3 (前書き)

圭一に降りかかる惨劇。



そういつてレナにぬいぐるみを渡す。

「ハウ。圭一君いいのかな??かな??」

「ああいいよ。あげたかったからあげるんだし……」

圭一は顔を真っ赤にしながらもごもごもごとしゃべった。

「あはは。圭ちゃん顔真っ赤だよ」

「みー 圭一は照れているのです。にはー」

「やるじゃねえか圭一よ。見直したぞ」

「よし。僕がみんなを写真に撮ってあげるよ」

「~~~~~やつた~~~~~」

富竹に何枚か写真を撮ってもらった部活メンバー。しかし圭一以外彼と会うのはこれが最後だったとはだれも知る由もなかった。

そのあとみんなで梨花の演舞を見てお開きとなった。しかし圭一は富竹と鷹野が待つ祭具殿に向かっていた。綿流しの前日にオヤシロ様の恐ろしさを見せてやると言われていたからだ。

「すいません富竹さん、鷹野さん。お待たせしました」

「やあ圭一君。そんなに遅れてないから大丈夫だよ」

「くすくす。それじゃあ入りましょうか」

そういつて三人は祭具殿の中に入った。

「うわー何なんですかこれ等の物は??」

「くすくす。これらの物はね全部オヤシロ様を進行させるための拷問の道具なの。信仰を破った者を殺すのに使ったらしいわよ」

「いやーこんな素晴らしく、恐ろしいものを撮れるなんてついでるんだ」

ペタ ペタ ペタ 何か歩いている音を圭一は聞いていた。

「2人とも誰かが歩いている音がしたんですけど……」

「そうなのかい??もしかすると誰かが来たのかもしれないな」

「そうね……そろそろ出ましようか」

そういつて三人はそれぞれの家に帰って行った。

カナ カナ カナ ひぐらしが鳴いていた……何かを伝えようと……。

次の日の朝圭一はひどい頭痛に悩んでいた。

「やばいな……。本格的に痛くなってきた」

それでも熱はないので無理をしても行くのであった。

「「「おはよー圭一君（圭）（圭一）」

「おつす、おはよう」

いつもど通りの1日のはずだった……。

「ねえねえ圭一君……。昨日は解散した後どこに行ってたのかな？？かな？？」

いきなりレナが質問してきた……。あの疑うような目をしながら……。

「昨日は家の帰ったよ。ああ、少し高台で村を見てからだけどな」

「うふふ。圭……。それは本当かな？？」

「何言ってるんだよ涼子、嘘じゃないって」

「やれやれ圭今なら訂正おっけいだよ……」

「ミサキまで……。何で信じてくれないんだよ……。なあ祐樹……。なんか言ってくれよ……。何で俺が疑われなきゃいけないんだよ……」

「お前がよそ者だからだろ？？」

圭一はその言葉に愕然とするしかなかった……。

（俺にはやはり仲間なんていなかったんだ……。一人ぼつちなんだ……。結局ここも都会とおなじ……。不便さと静けさがあるだけ……。何で俺はここに来たんだ？？俺には何にも価値はないのか？？）

コイツラハナカマジヤナイ コイツラハテキダ コイツラハオレヲ

ケソウトシテイル

シンヨウスルナ マズハウタガエ コロシテモイインダ オレハヨ

ソモノダカラ

「ハウ。圭一君。顔色が悪いよ？？大丈夫かな？？かな？？」

コイツハシンパイナンテシテイナイ オレガイツシヌカカンサツシ  
テイルンダ

「ああ・・・別にどうってことはない・・・」

「やっぱり圭。今日はおかしいよ・・・。何かあったのか??何か力になれることがあったら相談してね」

「そうだよ圭私たち仲間だもん」

オマエラハナカマナンカジャナイ

「おはよゝみんなってどうしたのかな??みんなして暗いかをしちやって。何かあったの??あったらおじさんにも教えてよ」

コイツハイツモノウテンキダナ

その時圭一は自分ではわからなかっただろう・・・。自分の目が異常に鬼気迫る感じを出していることに・・・、目の前の仲間をにらみつけていることに・・・。

「ねえ・・・ところで知ってるかな??昨日富竹さんと鷹野さんが殺されたって話・・・」

聞いたみんなは驚きを隠せなかった。圭一も言うまでもない。むしろ一番ショックを受けていたのかもしれない・・・。

(富竹さんたちが殺された??また村ぐるみで??)

ツギニコロサレルノハサイグデンニハイッタオレダ

(い 嫌だ 死にたくない)

コロセバイイ メノマエニイルヤツラヲコロセバイイ

「・・・ブツブツ・・・」

「圭一??どうしたんだ??一人でブツブツ言っちゃってさ」

「・・・さい」

「やれやれ圭。ちゃんとしゃべろよ」

「う・・・さい・・・」

「はう・・・。圭一君??大丈夫かな??・・・かな??」

「うるさいって言ってんだよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その場が梱りついた瞬間だった。叫んだあと圭一は一人で学校へ行ってしまった。

カナ カナ カナ ひぐらしが鳴いている



いのか……。まったく分からなかったのである……。

「ちよつと圭ちゃん何言ってるのさ！！誰が圭ちゃんを殺すんだって??？」

「シラナイ！！　ワカラナイカラオレハゴシンヨウヲモツテイルンダ！！」

もう俺にかかわるなと言うかのように冷たく言い放った。

「おい！！圭ー！！みんなお前のことを心配してやっているんだぞ！！それを無にするかのような発言は止めやがれ！！俺はお前を殴らなきゃいけない……。」

「アハハハハハハハ　シンパイ??　ンナワカアルカ！！　ドウセオマエラヒナミザワガグルニナツテオレヲコロソウトケイカクシテルンダロ??　ダマサレナイゾ！！　オレハ……オレハイキテココヲデテツテヤル！！」

そう言い残してそう言い残して圭一は走り去った。残ったのは絶望感と屈辱感だった……。なぜ信じてもらえないのか……。残った全員が思っていたことだ……。

カナ　カナ　カナ　ひぐらしが鳴いている

神隠し編 3 (後書き)

感想をお願いします。

鬼隠し編 1 (前書き)

新たな世界で惨劇が起きる・・・。  
今回はオリキャラは出ません。(すいません)

少年はある少女を愛しその少女もその少年を愛しました。  
2人は恋をしました。仲間は祝福。

しかし失恋の悲しみは時として嫉妬に変わりそして惨劇を呼び起  
す。

別の少女はただ彼がほしかった・・・独占したかった。  
だから起こった・・・あの惨劇が・・・。

フレデリカ＝ベルンカ

ステル

ちゅん ちゅん ここは雛見沢村 小さな村で人口は2000人  
ぐらいだ。

コンビニも、レストランもない田舎の村。しかし今日も楽しい1日  
が始まるうとしていた。

「ううーん。今日もいい天気だな。だな」

私は竜宮レナ。ここ雛見沢村には生まれた頃からいる。まあ、その  
後都会に行つて色々あつてここに戻つてきたのだ。私はいつもの待  
ち合わせ場所である少年を待っている。私が大好きな人。時々いじ  
わるで、時々おばかさんで、時々かっこいい。そんな彼を待ってい  
るときが私は好きだ。何をしゃべろうかとまだ来ていないのにどき  
どきしている。

「おおーいレナ。おはよー。ごめんな待たせて」

この人が私の大好きな人転校生の前原圭一君。都会にいたらしいん  
だけど色々あつて自分のやり直しのために来たらしい。色々を聞き  
たい人もいたけれど、そのときの彼の顔がなんだか悲しそうだった  
ので聞かなかつた。

「おはよう圭一君。そんなに待つてないから大丈夫だよ。だよ」

「はは。そうかそれはよかつた」

「でも時々早く来てほしいかな。かな」

「はは。いいぜ。でもそんな時は置いていく」

「ハウ。なんでかな??かな??」

「さくさく置いてく きりきり置いてく」

「ハウー……。何でそんなにいじわるなのかな??かな??」

「うそだよ!!置いてかないって。だってレナだもん。俺がレナを置いていくなんてことはしないよ」

「ハウ!!それはどういう意味かな??かな??」

「はは。それは自分で気づくんだな」

「こうゆう風にときどきいじわるしてくる。でもそれは私にとって嬉しいときもある。」

「あるれー???圭ちゃん朝からレナとお暑いねー。おじさん 妬いちゃうよ」

「おはよう魅音。残念ながら俺とレナはそんな関係ではない」

「おはよう魅いちゃん。圭一君そんな関係って何かな??かな??」

「そんなことより早く行かなきゃ遅れちゃうよ」

「お???やばい急げー」

「そうして私たちは学校へ走った。今日も幸せな1日になってほしいな……。だって幸せって有限だから……。学校に到着して……。」

「今日も着てしまったぜ……。おい沙都子!!今日こそお前のトラップを破ってやるぜー」

「恵一君はそういうと元気よく突撃していった。結果は……。」

「びん バタ

「いて!」

「ひゅー がん

「ぐあ!」

「びしゅ ばん

「ぐぶ」

「おーほっほっほ。圭一さん今日もすばらしいほどの引っかかりぶ

りですわね」

そう 圭一君は転校初日から沙都子ちゃんのトラップに引っかかっているのである。

「沙都子。今日は許さんぞー!!でこピンの刑にしてやる  
ー」

「いやー こないでくださいましー このケダモノー  
ー」

「誤解されることを言うなー」  
ぷる ぷる ぷる

「まさか・・・この感覚は・・・」

さっ 沙都子ちゃん・・・

「泣いてる沙都子ちゃん かあいよー お持ち帰りー」

「いやー レナさん痛いです 放してくださいましー」

私はかあいいものはお持ち帰りしたくなる体質がある。

「みー 圭一はかあいそかあいそなのです。にぱー」

梨花ちゃんはなぜか倒れている圭一君の頭を撫でていた。

これはいつもの風景。今日も幸せだ。

「みんな早く席つこう。先生が来ちゃうよー」

魅いちちゃんの言葉にみんな自分の席につく。

「はいはい。皆さんおはようございます」

先生の言葉で今日の楽しい学校が始まった。

「ふふーん これはこう あれはこう ふふーん」

圭一君は私たちが今やってる内容とはまったく違うところをやっている。前に見てみたけれどもまったく分からなかった。魅いちちゃんなんて呪文にしか見えないって言ってたっけ。それだけ圭一君は勉強ができて頭がいい。うらやましいよ。ハウー。

「うへー まったく分からないよー」

魅いちちゃんがまた手がとまっちゃった。

「圭ちゃん ここんとこ分からないから教えてー」

分からないときは知恵先生にたいてい聞くけど知恵先生は1人で2

0人を見ているから難しいときがある。そんな時助けになるのが圭一君だ。知恵先生の代わりに私たちに勉強を教えてくれるのだ。本当に分かりやすく頼りになる。魅いちちゃんは頼りすぎだけど・・・。

「まったくしょうがないな」

「えへへ ごめんね」 おじさんインドアじゃなくてアウトドアだからね」

「魅いちちゃん部活じゃないんだから」

「まったく。それにこれは前に説明した公式を使えば簡単じゃないか」

「あるえー ホントだー ありがとね圭ちゃん」

「まったく来年は受験なんだからしっかりしてくれよな」

「はいはい がんばります」

「魅いちちゃんそれこの前も言ってたよ」

こんな感じで授業が淡々と進んでいった。

現在はお昼

「よっしゃー 今日もみんなの弁当を食ってやるぜー」

「おーほっほっほ 圭一さんに上げるものは何もありませんことよ」

「なにをー沙都子 お前に食わせるものはないんだよー」

「きーー 圭一さんそこまで言うのなら勝負ですわー」

「おっし その勝負乗った」

「みー 沙都子は楽しそうなのです。にばー」

「おじさんも負けないよー」

「ハウ・・ レナも負けられないな。ないな」

「」

そうして壮絶なバトルが始まった。

そして放課後

私たち5人は放課後ゲーム部という部活をしています。色々なゲームをしてびりには恐ろしい罰ゲームが待ってるんだよーーハウーー。

「えへへ。圭ちゃん右からハートの4 8 9 スペードの9 だね」

「なに?? くそー 何でみんな傷だけで分かるんだよ!! 俺なんてまだ2枚ぐらいしかわからんぞ!!」

「ハウ 圭一君それババだよ。だよ」

「な なにー ちまつたー」

「おーほっほっほ。圭一さん無様に敗北しなさいですわ」

「みー 圭一はかわいいそかわいそなのです」

「はい おじさんあがりー」

「何?? くそー レナのやつどつちだ??」

「な?? ぜんぜん違うじゃねえかよ」

「ハウ あがりなんだよー。だよ」

「私もあがりですわ」

「みー 圭一右がハートの9ですね。みー」

「や やめて梨花ちゃん」

「みー にはー 圭一は今日も罰ゲームなのです。かわいそかわいそなのです」

「うがー また負けたー」

「うふふふ。圭ちゃん今日の罰ゲームが決まったようだね」

「ハウ 今日は何かな?? かな??」

「今日はこれですわー」

「なにー スク水だとー??」

「にはー 猫耳つきなのですよ」

「嫌だー」

「さてさて圭ちゃんそろそろお着替えの時間ですよ」

「まっまで魅音。話せば分かる」

「ハウー 圭一君 覚悟はいいね?? いいね??」

「圭一さんとつとを着替えてくださいましー」

「いーやー」

断末魔の悲鳴が村に響き渡った。そうひぐらしがなく声とともに。

カナ カナ カナ カナ

帰り道

「う う う もうお婿にいけない・・・」

「あはは 圭ちゃん大げさなんだよ」

「ハウ 圭一君のお肌きれいだね。だね」

「みー ぼくたちよりもきれいかもしれないのです」

「圭一さんの癖にー」

「なんだ??沙都子??悔しいのか??お前だっっていい肌してるじやねえか」

「な な 何を言ってますの??」

「あはは 圭ちゃんストレートだねー」

「ハウ 恥ずかしがっている沙都子ちゃんかあいよいよー」

「いやーー レナさんみたいですー」

「みー みんな元気なのです」

「はあ はあ 私たちはここで失礼しますわ 皆さんまた明日」

「みー また明日なのです」

「ああ また明日な」

「バイバイ また明日」

「ハウ バイバイ」

ここで私と魅いちちゃんと圭一君は沙都子ちゃんと梨花ちゃんと別れた。

「しかし 圭ちゃんなんでも似合うんだねー」

「褒めてんのか??それとも面白がつてるのか??」

「ハウ 圭一君かあいよいよー」

「おい レナやめるー」

「あはは いつも仲がいいねーお2人さん」

「ハウ・・・ そうかな??かな??」

「そうなんじゃないか?? 俺はレナとしゃべってるときは楽しいぞ。レナはどうなんだ??」

「ハウ レナも恵一君とお話してるときは楽しいよ」

「あるえー おじさんだけのけ者かな??寂しいなー」

「あはは 魅音としゃべっているとときも楽しいよ。からかいがいがあるからな」

「何よそれー ぶーぶー」

ほんと魅いちちゃんと圭一君はお似合いだな〜って思うときがあるんだよね・・・。私だって圭一君のことが好きなのにな〜。

「じゃあねまた明日」

「おう また明日」

「ハウ また明日 バイバイ」

ここで魅いちちゃんと別れた。ここからは圭一君と2人つきり。いつものことだけれども胸がどきどきするよ〜。

「なっなあレナ」

「ん??何かな圭一君」

「レナは付き合ってる人つっているのか??」

「はっハウ??」

「いっいやなんでもないんだ・・・」

「何かな圭一君??隠さないでいってみてよ」

「うう ええつと・・・」

「・・・」

「レナ・・・お 俺・・・レナのこと好きなんだ!! 転校してきたときから一目惚れっていうかな・・・なんだか胸が苦しくつてさ・・・これは恋なんだって最近になって気づいたんだ。最近まともにレナのことが見れなかったからな」

そうだったんだ。てつきり嫌われてしまったのかとっていた。よかった。

「ハウ・・・言ってくれてありがとう。レナも最近圭一君が目をあわせてくれなかったから嫌われたのかと思って・・・う・・・ううう・・・不安で・・・悲しくて・・・それでも私も圭一君のことが好きだったから・・・うう・・・我慢してきたんだけど・・・ううう・・・そろそろ限界だったんだよ。だよ・・・うう・・・」

でもうれしかった。いつてくれて・・・」

「返事をもらってもいいかな?」

「うん。私も圭一君が好きです」

「よかった〜 不安だったんだよな〜 レナはかわいいからな。でも本当によかった。こんな俺だけどこれからよろしく願います」

「ハウ こちらこそよろしく願います」

ハウー 今日は本当に幸せな日だな。圭一君と恋人同士。明日からまた楽しくなるな〜。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

## 鬼隠し編 1 (後書き)

少しずつ投稿していきます。  
よろしく願います。  
後感想ありがとうございます。  
頑張ります。

## 鬼隠し編 2 (前書き)

恋人同士になつた2人。

そんな2人に降りかかる惨劇とは・・・。

今日は土曜日、圭一君と恋人同士になって初めてのデート。でででデート?? ハウーイー緊張するよ〜。私たちはいつも集合する場所に集まりそこから自転車でごみ処理所に向かった。圭一君は興宮に行つてデートしようつて言つてくれたけど、今日はレナのがままを聞いてもらつて宝探しのお手伝いしてもらおうと思つたの。「ハウ〜 かあいいものがたくさんあるよ〜。 おもちかえり

〜〜〜」

「おいレナそんなにはしゃがなくてもかあいいものは逃げていかないぜ。もし逃げて俺が捕まえてやるよ」

「ハウ お願いします」

「はは そんなに恥ずかしがらなくてもいいんだぜ。俺達穂恋人同士なんだから。もつと楽しもうぜ」

「そうだね 楽しまなきゃね」

「ああ そうだぜ 幸せなときはとことん楽しむ。つらいときはお互いに協力してまた幸せをつかむ。その繰り返しなんだと思うぜ」

「ハウ そうだね!!」

本当に楽しかった。いつも1里じゃ取れないのも圭一君のおかげで取れたり。珍しいかあいいものもたくさん見つかった。

お昼ごろ・・・

「腹減つた〜 飯にしないか? レナ」

「ハウ そうだね お腹すいちゃったね」

「今日はレナの手作り弁当か?? うまそ〜」

「うふふ たくさん作つたからたくさん食べてね」

「よっしゃ〜 いただきます〜」

「うふふ おあがりください」

お昼は本当に楽しかった。圭一君は全部食べてくれて嬉しかったな。午後と同じく宝探しをして夕方になつたので帰ることにした。

ぱしゃ ぱしゃ

なんだろ??カメラのシャッター音。

「誰ですかあなたは??」

圭一君は少し怒ってるようだった。

「あはは ごめんごめん2人があまりに夕日をバックに似合ってたからね。ぼくの名前は富竹ジロウ。フリーカメラマンさ」

「そうですか。俺は前原圭一です」

「こんにちは富竹のおじさん」

「おおレナちゃんじゃないか。久しぶりだね〜去年の綿流し以来かな??」

「おいレナ。お前この人知ってるのか??」

「うん 去年もここに来て写真を撮ってたからね。毎年綿流しの日は来てるらしいよ」

「綿流しはすばらしいお祭りだからね」

「綿流し??」

「ハウ 圭一君は来たばかりだから分からないんだよね。綿流しって言うのは使わなくなった布団の綿を川に流して感謝するお祭りなの」

「へー そんなお祭りがあるんだ〜 もうすぐなんだよな」

「そうだよ 今年も部活が熱くなるよ」

「ははは 今年は何もなければいいね・・・」

「へ??」

「あ・・・圭一君にはいつてなかったけど4年連続で殺人事件が起きてるの・・・」

「まっまじかよ・・・」

「ほんと 今年は何事もなければいいんだけどね・・・」

その後は富竹のおじさんと別れて帰宅した。最後にあの話が出たのはまずかったけど・・・楽しかったな。また明日も楽しくなればいいな・・・。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ



鬼隠し編 2 (後書き)

感想&評価お待ちしております。

鬼隠し編 3 (前書き)

惨劇への引き金はおろされた・・・。  
踊れ駒たちよ・・・。

数日後・・・

「おはようレナ。今日も迎えに来たぜ」

「ハウ おはよう圭一君。レナは嬉しいな。圭一君が迎えに来てくれるの」

「当たり前だろ。レナはおれの彼女だからな」

「ハウ〜〜〜 うれしいかな。かな」

「さて今日の弁当は何かな??」

「ハウ 今日もおいしくできたと思うよ。思うよ」

「レナの弁当はいつもおいしいさ。レナも一緒に食べちゃおうかな??」

「ハウ〜〜〜 圭一君朝からエッチなんだよ。だよ」

「あはは それより行こうか」

私は幸せだ。大好きな圭一君が毎日迎えに来てくれる。それだけでもうれしかった。それに毎日2人分のお弁当を作るのも大変だけど圭一君がおいしいって言うてくれるだけでうれしかった。歩いている時も私たちは次の休みに何をしようかとかいろいろ楽しい会話をするの。その時の私の笑顔はどうなんだろ。圭一君は楽しそうに笑ってくれる。そんな圭一君を見ると私も楽しくなる。ああ、私は本当に圭一君のことが好きなんだな〜〜〜って思っちゃう。あ、魅力ちゃんがいる。

「あるえ〜〜 2人とも最近仲がいいね〜〜 もしかして付き合い始めたのかな??」

「おはよう魅音。おれたちはまだ付き合いってないぞ」

「ハウ おはよう魅いちゃん。まだ私たちはそんな関係じゃないんだよ。だよ・・・」

私たちは付き合っていることをまだみんなに報告していないのだ。綿流しの日にみんなにサプライズとして報告しようって圭一君と相

談して決めていたの。ハウ〜 当日が楽しみなんだよ。だよ。でもそれがあんな惨劇を生むなんてことはまだ私たちは知らなかった……。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

最近圭ちゃんとレナの仲が深まっているように見える。梨花ちゃんも沙都子も薄々感じているだろう。まるで2人は恋人同士に見えるのだ。勉強のときお互い笑顔で勉強している。私たちには見せてくれない笑顔……。なんだか圭ちゃんとレナが遠くに行ってしまった感じがする。登校のとき付き合っているのか聞いてみたけれど2人とも否定してきた。でもなんだか腑に落ちない。お昼のときも部活のときも……。2人はなんだか一心同体って感じがする。圭ちゃんのお弁当もなんだかレナの味がしてもしかしたらって考えちゃう。私も圭ちゃんが好きだ。私も1人の女として圭ちゃんに見てもらいたい。でも圭ちゃんはいつもレナのほうばかり見ている。レナも圭ちゃんばかり見ている。2人はアイコンタクトで何かを伝えあっている。そんなこともできるまでの仲って……。やっぱり付き合っているのかな……。

そんなことを考えていたらもう放課後。部活は梨花ちゃんが演舞の練習のためなしになっていた。私たちも帰ろうとしていた。

「あ 悪い おれまだ残ってやることがあった」

「え？ そうなの??」

「ああ 悪いな……」

「私は先帰ってるよ。レナのことよろしくね」

「ああ わかつてる また明日な」

ああ……。なんだか胸のあたりが苦しく感じる。なんだか圭ちゃんが手の届かない所に行ってしまう感じがして……。私も圭ちゃんの後を気付かれないように追っていた。

学校では……

「ハウ ようやく日記ができた」

そう私は今日日直だったのだ。圭一君と魅いちゃんは先に帰っちゃ

ったけど、また明日会えるからいいかな。かな……。でも私も圭一君と帰りたかったな……。ハウ 恋って難しいな……。バタ バタ バタ

何だろう?? 廊下を走る音がしてきた。

「はあ はあ レナ仕事終わったか??」

圭一君だった。どうして??先に帰ったはずの圭一君がまた学校に戻ったきたのだ。

「ハウ 圭一君どうしたのかな??かな??私は仕事終わったからもう帰ろうとしてただけど」

「はは 俺はレナを迎えに来たんだ。やっぱりお前がいないと俺も寂しんだよ……」

なんだ そうだったのか 本当に圭一君はレナのが大好きなんだ。うれしい……。

「ごめんね もう終わったから帰ろうか」

「ああ 行こうぜ」

私たちは夕日をバツクに帰宅していた。きれいな夕日。何度見ても飽きない夕日。だって隣には私の大好きな人がいるから。ふとその時……

「なあ レナ……」

「何かな圭一君??」

「きつキキ キスしてもいいかな??」

「ハウ?? ええつと……」

「嫌ならいいんだ……無理矢理やつても意味ないしな」

「いいよ……圭一君ならいいよ」

「ほんとうか??ありがと……レナ愛してる……」

「私も圭一君のことを愛してる……」

夕日をバツクに私たちはファーストキスをした。その時はこれほど幸せなことはないと思ったほど幸せだった。しかし後ろに魅いちゃんがいなことを私たちは知らなかった……。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

まるで失恋して泣いているように……

私は見てはいけないものを見てしまい、そして聞きたくなかったことも聞いてしまった。やはり2人は付き合っていたのだ。でも何で嘘なんてついたの??あの時嘘つかなければこんなにもつらくはなかったのに……。胸がひどく傷む……。これが失恋の痛みか……。なんで??何で嘘をついたの??私だつて圭ちゃんのことが好きだったのに……。レナに奪われた……。私の大好きな人が奪われた……。でも2人は愛し合っている。もう私の入り込む隙はない……。この痛みを一生持つていかなければいけない……。つらい……。悲しい……。悔しい……。憎い……。だめ!!そんな事を考えちゃ……。私はレナに嫉妬しているのだ……。どうすればこの痛みから解放されますか??

ペタ ペタ ペタ ペタ

なに??誰かの足音が聞こえた。見てみても何も無い。なんだったのか。私は内心恐怖しながらも床についた……。明日からもうつもどおり付き合おう……。そうして深い眠りについた……。

鬼隠し編 3 (後書き)

感想お待ちしております。

鬼隠し編 4 (前書き)

幸せな圭一とレナ。

それとは逆の魅音。

引き起こされる惨劇とは……。

朝起きてみると世界が変わっていた。灰色ばかり……。なんなの??これはいったい……。

不安を抱きつついつもどおり2人と合流して学校へ。その間2人の会話は切れることがなかった。

ウラヤマシイ ワタシダツテケイチャントカイワヲシタイ

「おい魅音元気ないぞ」

圭ちゃんが話しかけてきた。嬉しい。

「あはは ちょっと寝不足でね」

「魅音らしいな、夜中までテレビでも見てるんだろ??」

「まあ そんな感じかな」

もつと会話をしたかった、でも……。レナが私のことを睨んでいた。

「レナ??どうしたのかな??」

「別に何でもないよ魅いちゃん、気にしないで」

そんなこと言われてもにらんでいたのは確かなのに……。

疲れが取れないという理由で私は診療所に行った。薬をもらって、帰ろうとしたら……。

「あら魅音ちゃんこんにちは」

「あ 鷹野さんこんにちは」

「疲れが取れないって何か悩んでるのかしら。相談に乗るから言うてね」

私は何とかしてこのつらさから解放されたかったので思い切って相談してみた。

鷹野さんは笑ったりせずに真剣に相談に乗ってくれた。本当にうれしかった。少しつらさが癒えたかな。

「なるほどね」 失恋は確かにつらいわ。でも新しい出会いがあることは確かよね。あなたはほかの人が体験できないことを体験した

のよ。それを今後の恋愛に生かせばいいのよ。私だってまだ独身だしね」

確かに次の恋で彼氏ができればいい……。しかしまだ圭ちゃんへの未練が断ち切れない。

「くすくす。その嫉妬を利用すればいいんじゃないかしら」

「え??嫉妬を利用する??」

「くすくす。ええ、略奪愛よ。レナちゃんから圭一君を奪えばいいのよ」

「たっ確かに……。うまくいけば圭ちゃんと私は恋人同士……。レナさえいなければ……」

「くすくす。女の嫉妬は大きな武器にもなる。それを使うかはあなた次第よ」

私は相談に乗ってくれたことに感謝して家に帰った。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

何かを警告しているかのように……

私は次の日からどうやって圭ちゃんを奪うか考えていた。みんな元気がないと心配していたが大丈夫とあしらっておいた。特にレナから心配された時はかなりムカついたけど我慢した。圭ちゃんに嫌われなくなかったから。

考えること数日……。とうとう完璧な計画を思いついた。

『鬼隠し』

レナを『鬼隠し』にあつたように監禁すれば簡単だという計画。誰かが死ななければいけないが別にそれはどうでもいいと思った。決行は明日……。明日を最後に私は悲しみから解放され幸せをつかむことができる。

鬼隠し編 4 (後書き)

感想&評価はしばしお待ちしています。

鬼隠し編 5 (前書き)

レナに近づく魔の手・・・。  
魅音の計画はどうなるのか・・・。

今日は綿流し当日 計画執行に日だった・・・

「おーいみんな待たせてすまない」

圭一君がいつものごとく遅刻してきた。まあみんないつものことだからあまり気にしてなかった。でもレナとのデートの時はいつも先に来てくれて待っていてくれる。今日はデートじゃないからかな???

「まったく 圭一さん少しは学習してくださいまし。レディーを待たせるなんてどういう神経しているのですか??」

「すみません。あなたの言う通りでございます」

圭一君が棒読みで沙都子ちゃんに謝っている。まあいつものことなら喧嘩を始めるんだけどね。

「きー 圭一さんのくせに ちゃんと反省しなさいですわ」

「みー 沙都子は圭一と喧嘩してるるとき本当に楽しそうなのです。にばー」

うふふ 梨花ちゃんも沙都子ちゃんもかあいよいよ おもちかえり~~~~

「おいレナ後でおれのことをお持ち帰りしてもいいからここは我慢してくれ」

「ハウ?? わかったよ、我慢する」

「圭一さん?? どういうことですか?? ちゃんと説明してくださいまし」

「みー ちゃんと説明しなさい圭一」

「梨花ちゃんこわいよ・・・」

「みー?? なんのことですか?? にばー」

「ええとだな・・・俺とレナは結構前から付き合ってるんだ。

隠すつもりはなく今日のサプライズのつもりだったんだ。なあレナ」

「ハウ そうなんだよ。だよ」

「え〜〜〜〜？？？」

うふふ2人ともびっくりしてる。あれ？？魅いちゃんはあるに驚いてないな。何かあったのかな？？かな？？

ドウセカクシテタンダロ　ワタシヲワライモノニスルタメニ  
ゼツタイニケイチャンヲウバツテミセル

「魅音？？大丈夫か？？顔色悪いぞ」

「え？？大丈夫大丈夫。それにしてもいつの間にか付き合ってたのかな？？おじさんびっくりしたよ〜」

「ごめんね魅いちゃん隠すつもりはなかったんだけどね」

モウソナコトハドウデモイイ　キヨウヲサイゴニオマエノシアワ  
セハオワルンダ

「あはは　まあ圭ちゃん幸せが長く続くように頑張ってるね」

「言われなくてもレナのためならたとえ火の中水の中だぜ」

「みー　いずれも圭ーは死んでしまうのです。ぼつぼつ　ぶくぶく  
なのです」

「梨花ちゃんそんなこと言わないでくれよ」

「おーほっほっほ。確かに圭ーさんならもしかすると生きていますか  
もしませんか」

「ハウ　圭ー君無理しないでね」

「大丈夫だよ。つらい時が来たも2人で乗り越えるんだろ？？レナ  
がピンチの時は俺の名前を呼ぶんだぜ必ず助けに行くからな」

「ハウ　うれしいな」

そんな後私たちはいろいろな屋台を見て回った。圭ちゃんは射的の  
景品のクマのぬいぐるみをレナにあげていた。その時のレナのはじ  
けるような笑顔は気に食わなかった。

ドウセキヨウデオウルシアワセダ　ギリギリマダタノシマセテヤロウ  
そうして私たちは梨花ちゃんの演舞を見たあと解散した。しかし私  
の1日はまだ終わってなかった。。。レナを殺すことだ。。。。

ぴんぼーん

誰だろう??こんな夜遅くに。

「はい」

「やあ レナこんばんは」

「あれ??魅いちちゃんこんばんは。どうしたのかな??かな??」

「うん・・・ちょっとレナに相談したいことがあったからね・・・」

「

「わかったあがってあがって」

「おじゃまします」

そのあといろいろ綿流しの感想を話し合った。罰ゲームは圭一君だった。メイドの圭一君オジサンたちに人気だったな。ハウ~~~~かあいかつた~~~~。

「あれ??もう飲み物なくなっちゃったかな??かな??」

「そうそう私飲み物もって来てたんだよ。レナ飲んでみる??」

「ハウ 飲みたいな。たいな」

魅音はレナのコップに透明な液体を注いだ。

「魅いちちゃんこれは何なのかな??かな??」

「ああこれはサイダーだよ・・・」

「そうなのかな??いいただきます~~~~」

ノンダノンダ スイミンヤクイリノサイダー ノンダ

数分後レナは急激な眠気に襲われた。

「ハウ~~~~ 眠いよ~~~~・・・」

パターン レナはその場に倒れてしまった。

コレデ『鬼隠し』ガセイリツスル・・・

鬼隠し編 5 (後書き)

皆さんからの感想&評価お待ちしております。

鬼隠し編 6 (前書き)

レナの身に何が???

次の日いくら待ってもレナは来なかった。学校にも連絡が来ていないらしく。放課後部活メンバーでレナの家に行っても誰もいなかった。

「どこ行っちゃったんだ??」

「きつとお父さんと出かけてるんだよ」

「でもそれなら学校やらに連絡があるはずだろ??」

「でも言いたくないこともあるんじゃないかな??」

「言いたくないこと??レナに昔何かあったのか??」

「ないよ」

魅音はそっけなく返事をする。

「そっそうなんだ・・・。悪かったなへんなこと聞いちゃまって」

「ううん いいんだよ 圭ちゃんも知らない私たちだっているんだからね・・・」

「ふーん まあな 俺の昔もお前らは知らないからな」

「園崎家にかかれば全部分かつちゃうよ・・・」

「・・・なんでそんなことを??」

「村に変なやつが入ってこないようにだよ。まあ圭ちゃんはまともな人だったから許されたんじゃないかな??」

「そんなものか??」

「そんなものだよ・・・」

結局レナの行方は分からずじまいだった。

・・・

・・・

・・・

「う・・・う・・・魅いちゃんもうやめてよ・・・」

「だめだよレナ・・・圭ちゃんがレナのことをあきらめるまではそのままだよ・・・」

「どうしてこんなことをするの?? 私が何か悪いことしたのかな・  
・かな・・・」

「ふざけるな!! お前は私から勝手に圭ちゃんを奪っていった。私  
が最初に圭ちゃんを好きになったのに・・・あんたが告白したから  
・・・私は・・・こんなにものつらい気持ちでいるんだよ!!」

「そっそんな・・・私たちは両思いだったから・・・」

「うるさい!!」

がん がん がん・・・

魅音はレナの愛用の鉈で殴り続けた。

がん がん がん・・・

嫌な音が園崎家地下室に響き渡る・・・。

「あはははははは、もうすぐ圭ちゃんはあるを見捨てる・・・  
・そうして私がその心の傷に寄り添ってあげる・・・。そうすれ  
ばお前のことはもう関係なくなる・・・。私は幸せをつかむこと  
ができる・・・。あはははははは・・・。早く死ね死ね  
死んでしまえ!!!」

魅音はレナを殴り続ける・・・。殴りつかれたのか、いや、レナ  
が気を失ったのだ・・・。

(圭一君助けて・・・)

玲奈は失われる意識で首筋のネックレスを握った・・・。監禁さ  
れる前に圭一とともに興宮にデートに行った時に買ってもらったも  
のだ・・・。青い宝石のついた少し大人の感じのネックレス・・・。  
(つけて行った時のみんなの反応にはびっくりしたな・・・。ハウ・  
・)

レナが翌日つけて行った時、圭一にプレゼントされたことを言うと、  
魅いちちゃんは少し悲しそうな感じの笑顔、沙都子ちゃんは圭一君に  
してはセンスのいいものを選んだと顔を真っ赤にして珍しく褒めて  
いて、梨花ちゃんは何だか悔しそうだった。

・・・  
・・・  
・・・

・・・

「なあレナ、今度はあの店に行かないか?」

「ハウ??いいよ行こう」

私たちはアクセサリー店に入った。

「ハウーーーーー かあいいものがたくさんあるよーーーー 全部

レナがおもちかえり~~~~」

「こらレナ!!あんまり騒ぐんじゃない」

「ハウ・・・ごめんなさい・・・」

「いや~~~~しかしいろんなものがあるんだな~~~~」

圭一君はいろいろ手にとって私と合わせたり自分と合わせたりしていた。

うろつろしている結構高そうな所に来ていた。

(こんなものが将来はもらえるといいな・・・)

私は1人宝石たちとにらめっこをしていた。

「ごうけいは3,5000円です。ありがとうございます」  
結構なお買い物をしている人がいた。

ザッ ザッ ザッ

誰かが近付いてきた。

「レナ・・・俺もう買い物終わったから店でないか??」

買い物を終えた圭一君がそこに立っていた。なんだか顔が赤くて・・・でも瞳は何か覚悟を決めているような感じだった。

「うん。ごめんね」

私たちはそのまま店を出た。そのまま自転車で古手神社に向かっていた。なんだか圭一君が渡したいものがあるらしかった。

高台から見る夕日はいつ見てもきれいだ。

「レナ・・・俺たち付き合って結構経ったけどさ、俺まだお前に何もプレゼントしてないよな・・・だから今日は・・・ププププレゼントをあああげようかなって思ってたさ・・・今日のためにいろいろとバイトしてたんだよ・・・親には内緒だったけどさ」

私はどんな表情をしていたのだろうか・・・嬉しさのあまり涙を流していた・・・。

「ありがとう。圭一君。でもあんまり無理しないでね」

「ああ、わかってるよ」

そつと渡された小さなラッピングされた箱。私はそれをそつと開けてみた。中には今も私を励まし続ける青い宝石のついたネックレスが入っていた。

「うわ〜 きれいだね。だね」

「ほんとだな。これはサファイアなんだ。まあそんなに高くはないからな。もつといいやつは大人になったら買うからさ・・・。ははこれじゃあプロポーズみたいだな」

「はっはう・・・プロポーズ・・・」

「ごっごめん。まだ俺達には早いよな・・・。でもこれはレナに絶対合うと思って買ったんだ。雛見沢の大空みたいに透通った青色・・・まさしくレナって感じだったから・・・この宝石に決めたんだ・・・」

「はう・・・圭一君ありがとうね。大事にするよ」

「おお。そういつてくれるとプレゼントした甲斐があるな」

私たちはその後他愛もない話をした。本当に幸せなときだった。

・・・

これで圭ちゃん私のもの・・・レナがいなくなって1週間圭ちゃんもそろそろ諦めがつく頃かな。

「あはは、レナもうあきらめたほうがいいよ。圭ちゃんももうレナが生きてるとは思わないよ」

「そ そんなことない。圭一君はきつと来てくれる。約束したもん。レナがいなくなったら必ず見つけてくれるって」

「うるさいうるさい！！黙ってそこにいろ」

はき捨てるようにしゃべった魅音はそのまま外へ出て行った。また

1人ぼつちのレナ・・・。

(圭一君はきつと来てくれる・・・来てくれる・・・来てくれる・・・)

・・・

・・・

・・・

鬼隠し編 6 (後書き)

感想&評価お待ちしております。

鬼隠し編 7 (前書き)

決死の捜索、そしてレナの身に・・・。



「あははははははははは。笑える〜。まだ圭ちゃんがレナの本性を知らないからそんなことが言えるんだよ」

「本性??」

私は食事を終えたレナを再び手錠で身動きができなくする。

「そう本性……。例えば一昨年茨城にいたときに他の生徒をバツトで殴つて大怪我させたおつかない女の子つて言うのは??」

「え??ちよつとまつて。それは言っちゃだめ!!」

「それにその頃はリストカットの常習者だったつてこと。おつかない〜いつ殺されてもおかしくない子が彼女なんて……。圭ちゃんもかわいそ〜」

「魅いちゃんお願いだからそれだけは言わないで……。恵一君に嫌われたくない……。うう……。」

「あはははははは。さらには体の中に蛆虫がいるんだつて??やば〜。圭ちゃんどんな反応するかな??」

「魅いちゃんお願いだよ……。それは言わないで……。何??痒いよ……。痒い痒い痒い……」

「痒いよ〜。魅いちゃん手錠をはずしてよ〜。痒いんだよ〜。蛆が蛆が〜。やめて〜」

「あはははははあはははは。ずっとそこで苦しんでな!!」

私は足元で苦しんでるレナを無視して外へ出た。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

鬼隠し編 7 (後書き)

感想&評価どうかよろしくお願いします。

鬼隠し編 8 (前書き)

レナの運命は??主一は間に合うのか??魅音はどうなる??

次の日は休みだった。私はいつもどおり朝食をレナのいる地下室に持っていった。

そこにはいつもどりのレナがいた。でももう気力は無いようで目が死んでいるようだった。

「圭ちゃんは来てくれなかったね……。もう私がもらってもいいよね」

「……。来てくれる……」

「まだそんなことが言えるの??もう圭ちゃんはあることなんて気にしちゃいないよ!!」

「そんなことは……。ない……」

「ああ、わかつたよあんたが圭ちゃんが来ると信じてる理由が!!そのネットワークスだろ??これがあるからあんたはなかなか死なないんだ!!」

そう言っただけはそれを奪おうとする。しかしレナは抵抗してなかなか奪うことができない。

「いい加減にしろ!!もう圭ちゃんは来ない!!あんたのところには来ないんだ!!もういいや……。あんたはもう死んでいいよ……」

魅いちゃんは私の錠を振りかぶっている……。ああ殺されちゃうのかな……。圭一君はまだ私のことを探してるのかな……。でもここであるとはなかなか分からないよね……。圭一君はここに来たばかりだから……。それでも信じてる……。

「圭一君もう1度会いたいよ……」

「死ね……」

振り下ろされる錠……。しかし。

ガキン!!

ものすごい金属音が地下室に響き渡る。



「魅いちちゃんやめてよ……圭一君も傷ついちゃったし……私もう……」

「あはははははははは。私から宝物を奪ったあんたは地獄にでも言つてオヤシロ様と仲良くしていれば……」

私に向かつて魅いちちゃんの振り下ろしてくる鉈が近づく……私死じゃうんだ……でも最後に圭一君に会えたから……さようなら私の大好きな圭一君……

突然私の目の前が真つ暗になった。はじめは死んだのかと思つてけれど生きていた……何で??

目の前の魅いちちゃんも驚愕の表情……。え??私のことを抱きしめている人がいる……

圭一君だった……

「けっ圭一君??」

「れ……レナ……大丈夫か??」

「私はなんとも無いけど圭一君が!!」

「ごめんな……もつと早く築いていればもつと長く一緒に入れたのに……やべえ……目が霞んできやがった……レナの顔が見えない……どこなんだレナ……俺をおいていくのか……??」

「圭一君!!私はこちらにいるよ!!」

「ああ……よかつた……ごめんもう眠いだ……」

「だめだよ今監督呼んでくるから!!」

「レナ……」

「何??圭一君」

「最後に……キスしていいか??」

私は愕然とした……圭一君がいなくなる……私の前からいなくなる……私のよりどころが又なくなってしまう……恵一君を彼氏として……理想のお父さんとしてみていた私……

彼氏とお父さんを一気に失う感覚だった。

「レナ．．．もう．．．俺．．．」

覚悟を決めるしかなかった．．．。悲しい悲しい決断だった．．．。

「レナはね．．．圭一君と出会えて本当によかったと思うよ。こんな私の彼氏になってくれてありがとう」

「えへへ．．．こちらこそありがとう．．．。また宝探ししような．．．。約束だ．．．。」

私たちはキスをした．．．。最後のキスはしよっぱかった．．．。

「あ．．．りが．．．と．．．う．．．」

圭一君はそれつきり目を開けることは無かった。それに私のネックレスもいつの間にか真っ二つに切れていて、サファイアだけが残っていた．．．。

「圭一君．．．。」

「うわ．．．．．。なんで??なんで??なんでレナじゃなくて圭ちゃんが死ななきゃいけないの??わたしが??私が圭ちゃんを殺した．．．。うわ．．．」

私は急いで外へ出た．．．。しかしそこには圭ちゃんが呼んでいたのか警察が大勢．．．。それに梨花ちゃんよ沙都子もいた。お父さんお母さん．．．。ばっちゃんも．．．。ああ詩音もいた．．．。

みんな悲しそうな眼をしていた．．．。なかに数人突入してレナを解放していた。圭ちゃんもぐったりとしたまま運ばれていた。レナはレナのお父さんと抱き合っつて泣いていた。梨花ちゃんと沙都子は死んでいる圭ちゃんに何度も泣きながら名前を呼びかけていた．．．。

わたしはそのまま興宮警察署に搬送された。

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

わたしは気づいていた．．．。わたしの牛絵鬼は何かがいるということ．．．。

ペタ ペタ ペタ ペタ

何かの足跡が聞こえてくる……。

『……さ』

何か言っている。もっとはっきりといえいいのに……。

『……さ』

何???

『ごめんなさい ごめんなさい ごめんなさい』

……

……

……

その日のあと、信じられないことに雛見沢で大災害が起きた……。生き残ったのはわたしと興宮に住んでいたわたしの妹詩音。住民が全滅したそうだ……。レナも梨花ちゃんも沙都子も……。みんな……。

「何でこんなことになっちゃったんだろ……」

「ごめんなさい ごめんなさい ごめんなさい」

ペタ ペタ ペタ ペタ

わたしの耳から足音が消えません……。

……

……

・

鬼隠し編 8 (後書き)

感想&評価お待ちしております。

鬼隠し編 9 (前書き)

数年後・・・。

平成15年雛見沢。数年ぶりに村の中に入ることが許可された。わたしは数少ない生き残りとして今回の出来事の真相究明に協力している。

「んっふっふっふ。いや〜久しぶりですな〜」

「そうですね・・・ぼくがもつと梨花ちゃんの言葉に耳を傾けてあげたら・・・」

そう梨花ちゃんだけなぜか腹を割かれて殺されていたのだ・・・。それを大石と赤坂が疑問を抱き真相究明に尽力しているのだ。

いったいわたしがいなかった1日で何がここで起きたのか・・・。誰かこのなぞを解いてください。それだけがわたしの願いです。

平成15年 某月某日 園崎 魅音

ひぐらしが鳴いている カナ カナ カナ カナ

ペタ ペタ ペタ ペタ

また足音が1つ増えた・・・。

友殺し編 1 (前書き)

大切な人とのつながり・・・。  
まぶしすぎる人・・・。  
愛する人のため・・・。  
私は変わってしまった・・・。

## 友殺し編 1

人はいつか恋をします。彼女も恋をした。

しかし彼はいなくなつた。1つのバトンを残して……。  
勘違いに気づいたときには手遅れ……。さあ見せておくれ新  
たなる惨劇を……。

フレデリカ＝ベルンカステル

ぱっぱー。ここは 県興宮市。私の名前は園崎詩音。雛見沢村  
を治めている園崎家の娘だ。とは言うものの私は双子の妹なので頭  
首に離れなかつた。本当は私になるはずだつたのに……。  
私の姉魅音が奪つたのだ……。

……  
……  
それは10年前……。

「ねえねえお姉……」

「なに?? 詩音」

「今日の集まりにはタイのお刺身が出るでしょ……。いつもお  
姉ばかり食べてずるいよ……。私も食べたい!!」

「しょうがないな……。今日は特別だぞ!!」

「やった……。ありがとうお姉!!」

私はまだそのときは知らなかつた……。その日の集まりが園崎  
家の次期頭首を決める大切な日だつてことを……。

その日の夕方私たちはお互いを交換するために鉢合わせをしていた。  
しかし詩音は元気が無い……。むしろ悲しそうだつた……。

「どうしたの?? 詩音」

「ううう ううう う……。ごめんね。」 詩音

は??? 何を言ってるんだこの子は?? 詩音はあんたで、魅音は

わたし。それは変わらないはず……。

「今日のね集まりはね……。園崎家の次期頭首を決める集まりだったの……。だから私の背中には鬼の刺青があるの……。うう……。うう……。ごめんね『詩音』」

何を言ってるんだこの子は??

「これからは私が『魅音』であんたが『詩音』。あんたは興宮にでも行っちゃえば??」

ひどい　ひどい　ひどい　わたしから園崎の権力を奪った……。でも子供だった私は仕方なく引越すしかなかった……。親もいない……。頼れるのはボディガードの葛西だけだった……。

## 友殺し編 1 (後書き)

長い鬼隠しが完結し、さらに長い友殺しが始まります。  
温かく見守ってください。

感想&評価お待ちしております。  
では!!

友殺し編 2 (前書き)

出会いとは偶然か・・・それとも必然か・・・。

## 友殺し編 2

あれから10年・・・私は中学生になっていた。聖ルチ ア学園での毎日つまらない授業・・・みんなお嬢様って感じの奴しかいなかった。そしてついに痺れを切らしたわたしは学園を飛び出して市内に来ていた。お金は園崎のほうから毎月大金をもらっていたのでそんなにも困ることは無かった。

「帰りに葛西にお土産かって行かなきゃな・・・。色々心配してるかも・・・」

いろんな店に入っているんな物を購入して久しぶりに羽を伸ばせた気がする。夕方になったのでそろそろ帰ろうかとしていたら・・・。

どん がたがたがた

不法注射していたバイクを倒してしまったのだ・・・。

「やば」

その場から逃げようとしたら・・・。

「おい女！！俺達のバイクを倒していきながら何も言わずに帰ろうとするとはいい度胸じゃないか！！ちよつと痛い目にあわなきゃいけないかな」

数人の不良たちがやってきた。

「ごめんなさい、私よく前を見てなかったから」

うそ泣きをしながら謝ってみる。

「おいおい、そんなことしちゃったら俺達がいじめてるようなものじゃないか??」

「姉ちゃんよ、ちよつと俺達に付き合えよ。そうすれば痛い目にはあわせないからよ」

じりじりと近づいてくる不良たち。詩音は必死に謝るが止まる気配はない。

(ここで1発殴ってもいいけどちよつと人数が多すぎるわね)

タイミングを計って逃げようと構える。回りでは見てみぬ振りをする人たち。

(何でこんなにも困ってるのにこいつらはまったく行動しようとしネイのかしら)

回りの人たちにイライラを募らせ始めた詩音。そこへ……。

「おい!! やめろ!!」

男の子の声が聞こえた。振り返るとそこには黄色い髪をした中学生が立っていた。自分と同じ年だろうか。その少年は不良たちに向かって殴りかかるもすぐに捕まって袋叩きにされてしまう。

「なんだ?? こいつは?? よわっちっくな」

「アハハハ、女の子を守りたきゃ俺達みたいに強くなきゃな」

「お前の力じゃ無理に決まってるんだよ!!」

ぼこぼこにされる少年。見ているしかできない詩音。しかしそこへ……。

「おい、何をしているんだ!! 警察だ!! おとなしくしろ」

警察が数人やってきた。おそらく今殴られている中学生が先に呼んでおいたのだろう。自らが囷になって時間を稼いでいたとしか考えられない。

「くっそ〜。逃げるぞ!!」

急いで逃げ出す不良たち。それをどんどん増えていく警察が追っていた。「イタタタ」

殴られていた少年が起き上がったようだ。

「ところで大丈夫?? もう不良たちに関しては大丈夫だとは思ってどさ」

にっこりと笑いながら話しかけてくる少年、思わず顔が赤くなってしまう詩音。

「あああああの、ありがとうございます」

お礼の言葉をあわてて言う詩音。

「いやいや、女の子が困っていたからね、ほっとけなかったんだよ。それにしても1人に何人もたかって襲ってくるなんて……不良

は何を考えているんだか」

ため息交じりで話す少年。顔は整っていて美形の少年。細身で、髪の毛は黄色。

「僕の名前は北条悟史。悟史って呼んでね。今は雛見沢に住んでるんだ」

「私は園崎詩音」

「園崎??園崎って魅音と関係あるの??」

いきなり姉のことを聞かれてあせる詩音。

「うん……。私は妹で魅音は姉。本当は園崎では双子の片割れは殺されるはずなんだけどさ……。母さんが無理を言っ私を生かしてくれたんだ……。その代わり園崎からは勧請されているけどね……。消えそうな声で話す詩音。

「ごめんね。そこまで聞きたかったわけじゃないんだ」

「ううん、いいの、こうして私は今を生きれているから嬉しいし、幸せなの。でも最近はとても退屈。何か面白いことないかなってさつきもぼんやりしてたってわけ」

「アハハ、詩音って面白いんだね」

そう言っ詩音の頭を優しくなでてくれる。

「フェ??」

思わず間抜けな声を出してしまう。

「ごめんそろそろ部活の時間だから」

そう言っ悟史は去っていった。

「悟史くんか……」

詩音の胸はまだどきどきしていた。

それから数日後、詩音は雛見沢ファイターズの監督入江京介に相談し、マネージャーをやりたいと相談した。すぐに承諾が折り、試合のある日は欠かさず参加し、手作りのお弁当をみんなに振舞うというすっかりしたマネージャーを務めていた。何よりも初恋の相手である悟史のそばにいたかったのだ。悟史はなかなかブロッコリーとカリフラワーの区別ができなく、毎回詩音と特別をするという作業

を繰り返していた。

「いや〜、いつもすいませんね〜詩音さん」

監督がいつものお礼を言いに来た。

「いいんですよ。こういうのは大好きですから。それよりも悟史くんと一緒にいられるから私幸せです」

そう言つて悟史に抱きつく詩音。それにまんざらでもなさそうな悟史。

「いや〜、ここにカップル誕生でしょうか??」

監督が冷やかしを入れる。

「監督、茶化さないでくださいよ」

真つ赤になつた悟史があわてて反論する。

「い〜じゃないですか悟史くん」詩音は幸せそうだった。

「ぼくは何よりも沙都子さんを愛していますからね。悟史さん、今度沙都子さんもここに連れてきてくださいね」

眼鏡をきらりと光らせる監督。

「悟史君に妹さんかお姉さんがいますの??」

詩音が質問する。

「うん、妹がね。沙都子つて言うんだ。少しトラップ好きでね、いつもひどい目に合わされるんだよ」

「アハハ、面白い妹さんですね、私もあつてみたいです」

「きつと詩音だったらすぐに仲良くなれると思うよ」

にっこりと笑いながら詩音の頭を優しくなでてくれる悟史。このときの詩音は幸せそうな顔をしていた。

そんな風にあうことが何回か続いた。しかし、詩おとは実際に学校での悟史の様子を知りたくなつた。そこで姉である魅音に相談することにした。

ぶるるるるる がちゃ

「はい、園崎ですけども」

「魅音??私、詩音」

「詩音??どうしたの??」

突然の妹からの電話に驚く魅音。

「そつちに北条悟史って男の子がいるでしょ?? 私恋しちゃったかもしれないの!!!」

「え~~~~~。それ本気??」

「私は本気!! だからお願いがあるの」

「何??」

「それはね.....」

## 友殺し編 2 (後書き)

感想&評価・コメントお願いします。  
では!!!

友殺し編 3 (前書き)

詩音がとる行動とは???

### 友殺し編 3

数日後……

詩音は魅音に化けて雛見沢分校に来ていた。もともと髪結び方が違っていただけだったので、後はしぐさに気をつければよかった。早速学校に行ってみると、最近部活をアルバイトで休んでいた悟史が素振りをしていた。

「おっはよー、悟史くん今日も素振りかい??おじさん感心しちゃうよ〜」

いつもの魅音らしくしたつもりだった。完璧だった。しかし……。

「うるさいな!!あっち行ってくれないか??」

いきなり拒絶されてしまった。

「どうしたのさ悟史くん。そんなに怖い顔しちゃって、何かあったらおじさんに言ってるね、なんでもするから」

そう言っつて詩音は中に入った。すぐ目の前にはややオレンジがかつた髪の少女が立っていた。

「おはよう魅いちゃん」

竜宮レナだった。最近引越してきた転校生で、以前も雛見沢にいたのだが、仕事の都合で茨城に引越していたのだった。しかしまた何らかの原因で戻ってきたのだった。

「おはようレナ。今日もいい天気だね〜。今日は外で部活しようか」

いつもど通りの魅音を演じる。完璧だった。しかし……。

「あなた……魅いちゃん??」

「!?!?!」

(まさか……ばれた??)

そう、レナはとても洞察力が鋭かったのである。だからすぐにうそも見破ってしまうし、その後の豹変が異常だったのだ。

「何言ってるのさレナ。おじさんはおじさんだよ。園崎魅音」

「うん……そうだよ。よね。ごめんねへんなこと言っちゃって」

この子は無駄に勘が鋭いというか、洞察力がいいというか……。なんか敵には回したくないって感じがするわ……。

「いってさ、そんなこと。それより悟史くん様がおかしいと思うんだけど」

そうだ。あんなに鬼気迫る表情をする悟史くんなんて見たことがない。

「うん……。なんだか以前とは違うよね……。とても怖い……。何かにおびえてるって感じだよね……」

「何があつたのか分からないけど、わたしたちにできることはやってあげたいよね」

そう言つてわたしたちは教室に入った。中にはすでに涼子、ミサキ、祐樹、紗都子、梨花ちゃんまがいた。

「おはようみんな。今日もいい天気だね」

「おはよう、みんな。今日も楽しくなりそうだね。だね」

私とレナが挨拶すると・・・。

「おつす、レナ、魅音。今日も元気だね。俺なんて連日夜中まで習い事、勉強で体力限界だつていうのに」

「あはは、御三家候補は大変だね。虎視眈々と割り込みを狙ってるんだからね」

「ふふふ、根のつめすぎは体に毒ですよ祐樹」

「み、祐樹は頑張りやさんなのです。えらい、えらいなのです」

「り、梨花ちゃん!!」

そんな梨花ちゃんに飛び掛るロリ好き中学生祐樹。簡単にかわされて、ミサキたちにリンチを受けている。それにしても・・・相変わらず紗都子は隅でくずついている。あんな調子だから悟史くんも疲れちゃうんだよ。少し説教しなきゃいけないかな・・・。

「紗〱都〱子。何したのさ今日も隅でぐずつちゃって。何か困ったことあったらおじさんに言っただよ。おじさんだけじゃなくてレナたちもみんな紗都子の味方だからね」

「そうだよ紗都子ちゃん。レナたちは紗都子ちゃんや悟史くんの力になりたいんだよ」

それでもだんまりを決め込む紗都子。いい加減いらいらしてきた。それでも何とか我慢する私。

「紗都子〱〱、困ったことがあったら俺様に何でも相談するがいい。手取り足取り教えて〱〱〱ってぐえ〱」

調子に乗り始めた祐樹に再び涼子の竹刀とミサキのこぶしが炸裂する。ぼろぼろの状態で転がる祐樹を無視して梨花ちゃまが紗都子に話しかける。

「紗都子〱〱あなたの周りにはこうして多くの仲間たちがいるのです。悩むよりだったら相談して欲しいのです。何も言わずに辛そうな紗都子はもうみんな見たくないのです」

「大丈夫ですわ〱〱〱。特に変わったことはありません〱〱〱」

今にも消えてしまいそうな声だった。どうしてわたしたちがこんなにも手を差し伸べてるのにあなたは簡単にあしらうことができるの？意味分らない！

「〱〱〱意味わかんないよ〱〱〱」

「魅いちちゃん（魅音・魅い）？」

「意味わかんないって言うてんだよ！」

私にはもう我慢ができなかった。悟史君が苦しんでいるのに、自分は隅でぐずってただただ悟史君が来てくれることを待ってるだけのこの紗都子に、私は怒りを感じた！

「あんたがそうやって悟史君に甘えてばかりいるのがいけないんだ  
！」

「魅いちゃん、やめてよ」

レナが私を止めに入る。涼子たちもだった。でもみんなを蹴散らして私は紗都子の目の前に仁王立ちした。紗都子を見下すようにして立っていた。

「あんたがそうやっていつももぐずもぐずしているから悟史くんはおかしくなっていたんだ！全部あんたのせいだ！あんたがいるから悟史くんは疲れてしまっただ！」

今まで下ばかり見ていた紗都子は私の言葉を恐怖を目に見せながら聞いていた。すると徐々に目には涙が浮かび、さらには何かにおびえるような表情に変わった。

「わー。にーにー。にーにー」

突然悟史君を呼び始めた。まるで迷子になった子供のようになっ。私にはその声がうざったくて仕方がなかった。

「うるさい、うるさい、うるさい！あんたがそうだから悟史くんは・

・・悟史くんはおかしくなったんだ！あんななんていなければよかったんだ！」

今の私の言葉が決定打になったのか、紗都子はもうすでおかしくなっていた。

「にーにー、にーにー、にーにー……」

悟史くんのことを呼ぶばかり……。ああ、うざったい……。するとどかどかと廊下を走る音が聞こえた。ガラガラとドアが開かれるとそこには……。

## 友殺し編 3 (後書き)

感想・評価・コメント待っています。

## 友殺し編 4 (前書き)

かなり長いこの友殺し編……。一体どこまで書けばいいのやら)  
笑) そんなこんなで友殺し編 4です。お楽しみに。では  
!!

現れるのは誰??

## 友殺し編 4

「悟史くん」

私の大好きな悟史くん。でもそこにいる悟史くんには怒りしか浮かんでいなかった。

「ねえ・・・これってどういうこと？みんなはぼくたちをいじめて楽しいの？やっぱりダム戦争があったから？ぼくらが北条だから？いい加減にしてくれ！」

ここまで怒りを面に出す悟史くんは初めて見た。妹をかばうように私の前に立つ悟史くん。

「魅音がそんな奴だったとは思わなかったよ・・・」

チガウノ・・・ソナハズジャナイノ・・・

「結局君もまたここにいる奴らと同じだったわけか・・・」

チガウ、チガウ、ワタシハチガウ・・・

「園崎家だからみんなをうまく利用してぼくたちを追い出そうとしてるんだろ？」

「悟史くん、魅いちちゃんはそんなつもりじゃないの。ただ紗都子ちゃんが心配だっただけなの」

「そうだぜ悟史。俺達が見てたんだからそうだぜ」

「落ち着きなよ悟史……」

「……、まあ、そういうこと」

みんなが私に味方してくれた。

「そんなの悟史くん。ちょっと私も感情的になりすぎちゃった、ごめんね紗都子」

謝ったつもりだった……。謝ったのに……。

「もういい……。家にもおじさんたちにいじめられ、学校に来てもしじめられる……。ぼくたちは一体どこにいればいいんだ……」

そう言って悟史君は紗都子を席に座らせ、自分は席で深い眠りについていった……。

## 友殺し編 4 (後書き)

感想・評価・コメントお待ちしております!!

友殺し編 5 (前書き)

間をおかずに続き投稿!!  
友殺し編 5 お楽しみに!!  
は!!  
で

悟史と詩音の約束・・・。

## 友殺し編 5

時間は流れ、今日は綿流しの日。雛見沢村の伝統行事。興宮からも多くの人たちがきていた。もちろん部活メンバーも当然だった。悟史と紗都子を抜かした魅音・レナ・梨花の3人だけでできていた。誘ったものの、時間がないことや、用事があることで断られたのだ。関係者は今年は何も起こらないことを祈っていた。もちろん警察も動員され、厳戒態勢のもとで行われた。滞りなく祭りは終わり、関係じゃ、警察は何も起こらなかったことに安堵していた。

仕官は祭りの最中。詩音は魅音に変装し、園崎家の家に侵入していたのだ。そこへ電話がかかってきた。

「はい、もしもし園崎ですけれども」

「こんばんは、その声は魅音かな？悟史だけ今ちょっといいかな？」

「うん。いいよ。それよりこの前はごめんなさい。何度も謝りたかったんだけど・・・」

「あれ？この前謝られたような気がするんだけど」

「へ？そうだったけ？ああ、そうだったそうだった。ごめんごめん」

この前謝ったのは、悟史に怒られたことを素直に魅音に告白した詩音をかわいそうに思った魅音が謝っておいたのだった。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど・・・。いいかな？」

「うん……。悟史さんの頼みごとなら何でも……」

「ありがとう……。ぼくはきつとこれから鬼隠しに遭うと思う……。そしたら紗都子のことをよろしくお願いしたい。魅音だからこそお願いできるんだ！本当によろしく頼むよ」

突然鬼隠しに遭うといわれて何がなんだか分からなかった。鬼隠し？オニカクシ？おにかくし？

サトシクンガイナクナル！

「どうしていなくなるだなんて言い出すの？意味が分からないよ」

「ごめんね……。今説明してる暇がないんだ……。本当にごめん……。でもぼくは魅音のことが好きだったよ。こんなときに言うのもただけどさ……。よろしく頼むよ……」

「悟史くん……！」

「おねがいね」

それっきり何度名前を読んでも返事は返ってこなかった。電話が切れていることに気がついたのは10分後だった。そしてその日の翌日。悟史と紗都子の叔母が殺され、悟史が失踪……。鬼隠しにあったことが伝えられた……。

泣き止まない紗都子を見た詩音は……。

「お姉……」

「何？詩音」

「私も分校に転校するよ」

「へ？何急に言ってるの？？」

「私は悟史君から紗都子にことを任せられた……。だから私も分校に行く」

「家はどつするの？こっちはさすがにいられないでしょ」

「興宮からバイクで来れば何とかなるでしょ」

「まったくあなたは……」

「サトコハワタシガマモラナキヤイケナイ」

はあつとため息をつく魅音。そうして惨劇の舞台は整った。

かな　かな　かな　ひぐらしが鳴いている

友殺し編 5 (後書き)

感想・評価・コメント待っています。

友殺し編 6 (前書き)

詩音のもとに現れるのは???

## 友殺し編 6

私の名前は園崎詩音。次期頭首園崎魅音の妹だ。私は悟史君との約束を果たすためにこの分校に転校してきた。

転校してきてはや1年。紗都子もすっかり元気になり、おじが出て行ったことから梨花ちゃまと2人で暮らしている。

私も一緒に暮らそうかと思っただが、雛見沢にいとあの鬼婆から何されるか分からないから一緒に住めなかったのだ。

興宮に誘ったりも下が、やはり以前住んでいた家を残してはいけなというのでそれはあきらめた。転校してきてから和足はすぐに悟史君との約束を紗都子に話し、自分は味方だということを伝えた。

その日を境に紗都子のおじはここを離れて言ったし、紗都子自身もおじがいなくなったことから元氣を取り戻していった。

私は常に紗都子の傍にいて、紗都子に何があってもすぐに対処できるようにした。さすがにべったりは困ると紗都子に言われたので少し距離を置いたところから眺めていることにした。

そのおかげで聡子はいじめられることもなく、みんなと元氣に過ごしている。まあ、買い物で白い目で見られたときには私がいきてあたりをめちゃめちゃにしたのは数え切れないほどだ。

その甲斐あって周りの対応も変わってきた。裏ではどうなのかは知らないが……。東京から転校生が来るそうだ。

レナの家に近いところに大きな屋敷が立ったのだ。相当なお金持ちだということは聞いている。どんな奴なのか、みんな楽しみに待っていた。

現在は夕方。興宮で私はアルバイトのエンジェルモートに仕事を終え、アパートに戻ろうとしていた。

どん がたがたがた

不法駐車していたバイクを倒してしまったのだ……。

「やば

その場から逃げようとしたら……。

「おい女！！俺達のバイクを倒していきながら何も言わずに帰ろうとするとはいい度胸じゃないか！！  
ちよっと痛い目にあわなきゃいけないかな」

数人の不良たちがやってきた。

「ごめんなさい、私よく前を見てなかったから」

うそ泣きをしながら謝ってみる。

「おいおい、そんなことしちゃったら俺達がいじめてるようなものじゃないか??」

「姉ちゃんよ、ちよっと俺達に付き合えよ。そうすれば痛い目にはあわせないからよ」

じりじりと近づいてくる不良たち。詩音は必死に謝るが止まる気配はない。

(ここで1発殴ってもいいけどちょっと人数が多すぎるわね)

タイミングを計って逃げようと構える。回りでは見てみぬ振りをする人たち。

(何でこんなにも困ってるのにこいつらはまったく行動しようとなないのかしら)

回りの人たちにイライラを募らせ始めた詩音。そこへ・・・。

「おい!! やめる!!」

男の子の声が聞こえた。

友殺し編 6 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 7 (前書き)

寝不足で眠い今日。皆さんからのコメントが私の力の源です。

少年は誰なのか???

友殺し編 7

(悟史くん?)

思わず悟史のことを思い出す詩音。昔同じようなことがあったことを思い出したのだ。

「なんだ？オメガは？」

「ええつと〜、ちよつとここを通りかかったものです」

「そんな奴が俺達になんか用か？」

「ええつと〜、ですね〜」

中学生だろうか。半そで短パン、茶髪の少年が立っていた。しかし少年は不良たちにビビッてなかなか答ええない。

(こんな奴よりも悟史くんの方が数段上よね)

悟史のときに用になかなか助けてくれない少年にイラついている詩音。

「用がないならとつとと帰りな」

「早々、俺達これからこのこと楽しいことするからな」

強引に詩音の腕を引っ張る不良。

「ちょっとまってよ」

抵抗むなしくされるがまま。少年はただおどおどしているだけだった。

「それじゃあな」

「とつとママのところに帰りな」

「ひやははは、どうしようかな」

不良が詩音をつれて立ち去ろうとしたとき……。

「お巡りさん！こつちです！」

突然少年が叫んだのだ。すると向こうから……いや前から後ろから警察がぞろぞろとやってきたのだ。

「警察だ！その子を話して、速やかに署のほうへ来るんだ」

「くそ、はめられた」

「くそがきが！なめたまねを」

「へへ〜ん、別に俺が直接手を下さなくても助けを呼べば何とかなるものだな」

そう、少年は詩おとがっ不良に絡まれているのを見たらすぐに警察へ連絡して、来るまでの時間稼ぎを

していたのだった。変に騒ぎを起こさなかったのはただ自分が傷つきたくなかったからだだった。そうして不良たちはつかまり、詩音は無事に解放されたのだった。

「怪我はないかな？」

先ほどの少年がニコニコ顔で聞いてきた。

「別になんともない。それにしても女の子を自分の手で助けようとは思わないの？はつきり言って私あなたのこともすごく恨んだわ」

「ははは、まあ助けたかったのは山々だけれども、最も効率がよかつたからかな。お互い傷ついたらいやじゃん」

「・・・まあそうだけど」

なかなか納得できなかった。助けってくれたことは感謝しているが悟史のようにかっこよく助けしてくれることを期待していたのだった。しかし少年はおどおどしてばかりで最後は警察頼み。

「ところであなたはここの住民？見たことない顔だけれども」

「ああ、俺は前原圭一って言うんだ。雛見沢村に今日引越してきたんだ。東京からきたから、あそこ

何もなかったからここに買い物にきたわけ。ここは色々売ってるかさ正直助かつた」

「私は園崎詩音、園崎家は分かるかな？雛見沢の全権を握ってる・・・」

「ああ、知ってるよ。今日挨拶言ってきたからな。それにしても大きな屋敷だったな。後詩音によく似た女の子がいたんだけどどんな関係？」

「たぶん私の姉の魅音だよ。次期頭首なんだ」

「それじゃあお前たちは双子なんだ。なるほどどつりで似ているわけだ」

少年は1人でうんうんうなずいていた。目をそらせて下を見つめていたらぽんと頭に何か置かれた。それは少年・・・前原圭一の手ひらだった。

「なんか思いつめてるようだけど、何かあったら相談に乗るぜ」

わしゃわしゃと悟史とは違って強引に頭を撫でる。違ってるとはねども、暖かい気持ちになるのは同じだった。

「それじゃあ、俺は後帰らなきゃ親がうるさいから。またどこかでそう言っただけで近くに立ってかけてあった自転車に乗り込むと、少年はものすごい速さで帰っていった。

「前原・・・圭一か」

詩音はしばらく少年の姿を見ていた。

かな　かな　かな　ひぐらしが鳴いている。

友殺し編 7 (後書き)

コメント待ってます!!

## 友殺し編 8 (前書き)

執筆中の友殺し編もクライマックスに突入しています。定期的に投稿できると思うのでお楽しみに。途中分岐編もありますので、そのときおっってお知らせします。それでは友殺し編お楽しみに！！では！！

転校生現る！！

## 友殺し編 8

そして翌朝分校には転校生が来た。

がらがら

知恵先生が転校生を連れて入ってきた。詩音は少年の姿を見て驚きを隠せなかった。

「今日から新しいお友達を紹介します。前原圭一君です」

「はじめまして、前原圭一です。親の都合で東京から来ました。趣味とかは余りありませんが、ここで楽しい生活ができればいいと思います。よろしくお願いします」

「それでは前原君の席は竜宮さんの隣でいいですね」

「はい、ここだよー」

圭一は自分の席を教えてくれたレナにお礼を言って座った……。

「いってー」（涙）

突然圭一が尻を抑えて床に転がっていた。どうやらトラップにかかったようだった。

「北条さん！転校生になんてことしてるのですかー！」

「い、ごめんなさいですわ」

「先生、これは紗都子なりのコミュニケーションのとり方なんですよ」

「こんなとり方あってたまるかー（怒）」

「あーら、引つかかっておいてそれはないんじゃないのですの？」

「ほーじょーさん？」

「は・・・はいですわ」

「後でたっぷりとお説教させてもらいます」

「せんせー。私が後で言っておきます」

「詩音さん、毎回あなたが説教しているようですがまったく改善されていません。ここは1度私がやるべきだと思います」

「せんせい・・・。あーもー分かりました」

変更がないことを理解したのか、さっさとあきらめてしまった。

「なあ、竜宮さん。あの紗都子っていうやつ、毎回こんなトラップしかけるのか？」

「ハウ、レナでいいよ。私も圭一君って呼ぶからさ。あと、毎回ってわけじゃないの。今まで引っ掛け

る相手がいなかったから1人でやってたらしいけど、転校生が来るからって張り切ってるのかもね」

「俺・・・無事にここを卒業できるか不安になってきた」

「ハウ、大丈夫だよ。いくら紗都子ちゃんのトラップだからって死ぬ用のものはないよ」

「瀕死に近い状態にはなるのかよ！」

「あははは、転校生、もやしっ子のくせに面白いね」

「お前は？」

「おじさんは園崎魅音、学級委員長をしてるよ」

「園崎？ああ、園崎家の次期頭首の！そういうはこの前挨拶に行つたときにいたな」

「そうだったね、突然引越してくるんだからこっちは大変だったよ」

「すまないな、こっちにも色々事情があったから・・・」

「ん？何かあったのかな？」

「いや・・・なんでもない」

「ハウ、何か困ったことがあったらなんでも言っただけだよ。できることならしてあげられると思うから」

「そうだね、圭ちゃん、何かあったらこの園崎魅音に言っておくれ」

「あ、ああ。ありがとう」

「はるろーん、この前はありがとうね」

突然圭一の前に現れたのは詩音だった。

「お前はこの前の・・・園崎詩音だったっけ？」

「そうですね、圭ちゃん。今日からわたしたちは仲間ですから楽しく行きましようね」

そして圭一以外には聞こえない声でつぶやく。

「サトコニナニカシタラワタシガコロス」

それは誰にも聞こえない声だった。

「ちょっと詩音それは私のせりふでしょ！」

「お姉がなかなか言わないからですよ」

「みー。圭一、ぼくは古手梨花というのです。よろしくなのです。  
にばー」

「ああよろしく、梨花ちゃん」

「おーほっほっほ、もやしっ子の圭一さん、先ほどのトラップはいかがでしたか？どれほど自分がのろ

いのかお分かりになりましたのです?」

「おまえかー! さっきはよくも痛い目にあわせてくれたな!」

「あんなの初歩中の初歩ですわよ」

「あんなの聞いたことねえ!」

「それはもやしっ子ですから、教科書しか見てない圭ーさんでは仕方ないですわね」

「くっそー! なんかもかついてきた! 俺のでこピンは岩をも砕く! 覚悟しろー紗都子」

「いやー、来ないでくださいましーこのケダモノー」

「誤解を生む発言はするなー」

「おおつとそこまでだぜ転校生。紗都子に手を上げるとは俺がゆるさね」

「お前は?」

「俺の名前は大葉祐樹。お前と同じ中2だ。紗都子がよくやることだから今回は見逃してくれ。今回と限らず今後ともだ」

「ばかいつてんじゃないねー、こんなの毎日繰り返されたらいじめって思っちまうだろ。不登校になっちまうよ。2日目から不登校なんて俺嫌だぞ」

「まあまあ、落ち着いて二人とも。紗都子ちゃんもやりすぐはだめだよ。め！だよ」

「お前は？」

「私は小野ミサキ。梨花ちゃんとは親戚関係なんだ。転校初日からお疲れだね。でもここは楽しいところだからきつと気に入ってくれると思うよ」

「そうだいいな。よろしく」

「俺とはよろしくしないのかよ！おい！」

「はいはい、よろしくな、ええつと……」

「大葉祐樹だ！」

「そうそう大葉祐樹。祐樹って呼んでいいか？お前も圭一でいいから」

「ふふふ、君も東京から来たんだね」

「おわつと、びっくりした。ええつと……お前は？」

「私は泉涼子。私も東京からここに去年引っ越してきたの。レナも去年ここに引っ越してきたんだよ」

「うん。そうだよ。だよ」

「はいはい、それでは紹介も終わったところで授業に入りたいと思

います」

圭一は自分の席に戻ろうとした。そこに詩音が近づいてきて……。

「サトコニナニカシタラワタシガユルサナイ」

「!?!」

詩音の目が一瞬変わったからだ。思わず圭一は後ろに数歩下がってしまふ。でももう1度見てみるとさつきと同じ目だった。

「前原君も早く席について。あと、前原君にはほかの中学生の子たちに勉強教えてもらいたいんだけど」

「せんせい、何で圭ちゃんに教えてもらわなければいけないんですか？」

「私1人じゃみんなに教えられないでしょ。前原君は全国模試で毎回1位を取ってる生徒さんだから。みんなに教えて欲しいの」

「俺でよければいいですよ」

「圭一君すごいね」

「あはは、おじさんはアウトドアはだからね」

「魅音はただ単に勉強が嫌いなだけでしょ」

「ふふふ、私も負けられないわね」

「わかんないところだらけだから教えてくれー」

「祐樹！あなたはただめんどくさがってるだけでしょ」

「もやしっ子でも1つぐらい強みがなければいけませんわね」

「みー。ぼくも教えてもらいたいです」

「よっしゃー。俺前原圭一に任せろー」

## 友殺し編 8 (後書き)

コメントお待ちしております。

コメントが執筆の全動力になりますんで。

## 友殺し編 9 (前書き)

いよいよ友殺し編の面白みの1つが出てくるかも???  
コメント待ってます。

## 友殺し編 9

圭一が転校してきて1週間。もうすぐ6月に入ろうとしていた。

今日も圭一はレナと魅音、詩音、ミサキ、祐樹、涼子と一緒に学校に来ていた。目の前のは教室のドア。よく見ると上には黒板けしがあつた。

「毎回毎回おんなじ手に引つかかる俺ではないぞ紗都子」

「おーほっほっほ、それはどうでしょうが圭一さん。今日まで1度もこれを突破したためしはありませんのよ」

「だから今日こそ突破してみせる」

「圭一君頑張つて」

「あははは、圭ちゃん私は紗都子に軍配だと思つよ」

「そうですね、圭ちゃん、サトコニナニカシタラワタシガユルシマセンカナネ」

「あ・・・ああ」

恐怖におののきながら・・・。

「いざ出陣!」

圭一は元気よく今日室内へ飛びこみ・・・。

まはー

上からたらいに入っていた水が圭一に降りかかった。

「つべてー。何しやがる紗都子」

「イヤー、ケダモノー」

「毎回誤解を生む発言は……」

圭一は毎度のように紗都子を追いかけてでこピンでも食らわせようとしていたのだが……。途中で圭一の声が途切れたのは詩音が圭一の胸倉をつかんでいたからだ。

「お・・おい、詩音。これはいったいどういふことだ？」

「詩音さん……。何を？」

驚きを隠せない圭一と詩音の行動におびえる紗都子。それを見て魅音たちは。

「詩音！圭ちゃんを早く放しなさい！」

「詩いちゃん！」

「詩音！圭一は別にちよつと紗都子にいたずらしようとしただけだる？別にちよつとぐらい……」

「ワタシハサトシクンカラサトコヲマカサレテルノ！サトコガナク  
スガタハミタクナイ！」

「だからってこんなことしていいはずは……」

「……分かったわよ」

そう言ってようやく圭一は解放された。

「ごほ……ごほ……何だって言うんだ……。俺は別に……」

「今度やったら何するか分かりませんよ……」

「「「「「……」」」」」

突然の豹変に誰もが驚いていた。ただ1人を除いて……。

その日の放課後、詩音が急用でかえると言うことで部活は無しとなった。詩音は鐘がなると同時にバイクにまたがり興宮に向かってとばした。アパートにつくや否やバイトの準備とともに電話を始めた。相手は葛西だった。

「モシモシカサイ?? シオンダケドサ…… タノマレテクレナイカナ」

『詩音さん?? 何でしょうか』

詩音の声がいつもとは違うことを葛西は感じていた。声に殺気がこもっている感じを……。長年裏社会とつながりを持つ彼だからこそ声だけで感じられたのだろう。しかし、詩音からの以来となると園崎が関係しているためにうかつに断ることができなかった。

「マエバラケイイチノカコニツイテアライザライシラベテホシイノ」

『前原さんのですか??それは一体なぜ??』

「アナタハナニモシラナクテモイイ!!アナタハタダワタシニチカラヲカシテクレテイレバイイノ!!」

『!!分かりました。くれぐれも悪用などはしないでください。それでは・・・』

そう言い残し電話は切れた。

友殺し編 9 (後書き)

コメントお願いします!!--!!

友殺し編 10 (前書き)

順調に投稿できてる、よかった。

コメント待ってます!!では!!

詩音の行動はいかに・・・。

その頃学校では、詩音の圭一に対する態度について話し合われていた。みんな詩音の態度に対して不快感を持っていたのだ。

紗都子に対する過保護。確かに悟史から紗都子を任されたのかも知れない。しかしあれは生きすぎだという満場一致の考えだった。

圭一には先に帰ってもらい。詩音と圭一以外の部活メンバーで話し合われていた。

「詩音には困ったもんだよ。いくら紗都子が大切だからってあれはやりすぎだと思っね、おじさんは」

「詩いちゃん・・・悟史くんから任されたんだもんね・・・」

「にーにーからは何も言われてませんわ。確かにかまってもらえるのはうれしいですが、あそこまで邪魔されるといいますか、楽しみを取られてしまうと逆に困りますわ」

「みー・・・。紗都子は圭一が好きですからね・・・」

「ちよちよちよつと梨花！！何で私があんなけだもののような圭一さんを好きにならなければいけないのですの??」

「みー???違うのですか??」

「違いますわ！！まったく、梨花の早とちりには困りますわ」

「まあまあ紗都子ちゃん、梨花ちゃんは紗都子ちゃんがまるで圭と恋人同士みたいに楽しそうだって言いたかったんだよ。そうだよ梨花ちゃん」

「みー ミサキの言うとおりなのです。早とちりは紗都子なのですよ。こぼー」

「あはははは、圭ーが紗都子を狙うだと??断じて許せん!!紗都子は俺のつてぶへ!!」

何か言おうとしていた祐樹が涼子に殴られた。涼子は長い髪を払って、祐樹を殴るのに使った本を再び読み始めた。

「涼子ちゃん・・・やりすぎなんじゃ・・・」

「大丈夫よミサキ。これくらいじゃあこいつは死なないよ。それよりも詩音になんていうの??普通に言っても何にもならないと思うけどさ」

「そこなんでよね・・・。今頃何か手を打ってるかもね・・・」

「ハウ〜、詩いちゃん怖かったよ〜」

「ふはははは、レナ大丈夫だ!!この俺がつてぶこは!!」  
また殴られた・・・。今度はレナパン・・・。

「ハウ〜、祐樹くん、レナに何しようとしたのかな??かな??」

「レナ、ちょっと落ち着こうね」

興奮するレナを落ち着かせようとする魅音。結局今日は詩音に対する対策はまったく決まらなかった。

そしてその夜……。ピンポーン 詩音の部屋のインターホンが鳴った。穴越しに見てみると葛西だった。どうやら夕方頼んでいたものがそろったようだった。

「詩音さん……。一応前原さんの東京にいたときのものは全て揃えましたけども何に使うのですか??」

不安そうに聞く葛西……。しかし答えを簡単に言う詩音ではない。それがたとえ味方している葛西であってもだった。

「えーとね、圭ちゃんは最近引越してきたばかりだからいろいろ知りたくてね。別にいやらしいことは考えてないから心配しなくてもいいよ」

「そうですか……。それなら何も心配することはないのですが……。くれぐれも悪用しないように。それでは」

そう言い残して葛西はアパートを後にした。渡した資料がとんでもないことに使われるとも知らずに……。

封筒には……。

#### 前原圭一に関する資料

前原圭一は有名進学校また進学塾のトップクラスに所属していた全国でもしでは常にトップを維持。

・学力は上の上。

・運動は普通。

- ・仲間関係は不良。
- ・親子関係もギクシャクしていた様子。
- ・現在は改善されているもよう。また、ここに引っ越した理由として挙げられるものは……。

「コレハツカエル……」

詩音は不敵な笑みをこぼしていた。

友殺し編 10 (後書き)

コメント待ってます!!!

友殺し編 11 (前書き)

圭一に降りかかる事件とは???

次の日に朝。紗都子はいつものように梨花と一緒に分校へ来ていた。圭一に対するトラップを仕掛けるためだった。圭一たちが来るのはいつもぎりぎりの8時。紗都子たちは7時に学校へ来ていた。

「おほほほほ、今日も腕が鳴りますわ」

「みー……。あまりひどいのはよしたほうがいいですよ。また圭一が追いかけて詩音が圭一につかみかかるのがオチなのです」

「分かってますわ……。それでも私はこれだけは止められないのですわ」

忠告むなしく紗都子はいつもどりの過激なトラップを完成させる……。後ろでは梨花が悲しそうな顔をしていた……。まるでこれから起きる最初の悲劇を知ってるかのように……。

現在は7時55分。そろそろ圭一たちがやってくる頃。紗都子は今か今かと楽しみにしていた。そして……。

どか どか どか

廊下を走る音が響く。

「遅刻する〜」

「大丈夫だよ圭一君。後はここを突破すればいいんだよ!!!だよ!

「！」

「って俺が突っ込まなきゃいけないのかよ!!」

「圭ちゃんまさかおじさんたち女の子にトラップに引っかかれとでも言いたいわけ??」

「圭はそんなにひどい男だったの??」

「ふふふ、幻滅」

「ひどいぞ圭ー!!」

「ってお前も男たる祐樹!!お前が行け!!」

「何を言う圭ー。紗都子はお前に引っかかって欲しいのさ。そしてお前にかまって欲しいのだ」

「あんなのがスキシップの媒体にはなって欲しくない」

「さっさといけばいいじゃないですか圭ちゃん。まさか私から何かされるんじゃないかと不安なんです」

「か??それでも男の子なんですかね圭ちゃんは」

「あーあー、分かったよ!!俺が行けばいいんだろ!!」

圭ーは怒りながらも教室のドアを開ける。上からは黒板消し。それを難なくかわす。次にたらいが連続で……。

がん がん がん

痛そうなお音が響く……。そして倒れたところにはすみが入った硯が……。

ばっしゅーん

顔から落ちた圭一。しばらくぴくぴくしていた。

「おーほっほっほ、どうですの圭一さん。今日もわたくしの勝ちですわね」

「さーとーこー!! 今日と言う今日は絶対に許さん!!」

いらいらしているところにさらに墨攻撃と繰れば怒り爆発だった。顔を真っ黒にした圭一がすばやく紗都子の元に行くところでこピンを食らわせる。

「うわーっーん、圭一さんがいじめるーっー」

それほど痛かったのか紗都子は泣き出した。

「ああ……。ええつと……。紗都子??」

泣き止まない紗都子を見てあわてる圭一。周りからは冷たい視線……。そして……。

「ケイチャン……。カクゴハイイデスネ??」

「待て詩音!! これは紗都子にも非があるだろ!!」

「サトコハカンケイナイ！！サトコガキズツイタナラキズツケタヤツガワルイ！！」

「そんな理不尽な！！」

「ケイチャンニハキツイセイシンコウゲキガイイデスカ？ソウデスネイマミタイニチイサナコライジメテイタコロノムカシバナシデモシマスカ？？」

「な！！」

「ワタシハシツテルンデスヨ・・・ヒトガヨサソウナケイチャンガジツハココニクルマエニハンザイヲオカシテイタトイウコトヲ」

「やめる・・・」

圭一は自分の真実を言われることを何とかやめてもらおうと必死だ。しかし詩音はやめない。

「ヒトニムケテハイケナイエアガンデシヨウガクセイノオンナノコノメヲウツテオオケガサセタンデスヨネ！！カワイデスヨネー！！コンナハンザイシャガココニイルダナンテ！！ミンナアイツニハチカヅカナイホウガイイヨ！！ナニサレルカワカラナイカラネ！！トクニオンナノコ。オネエタチモキヲツケテクダサイ。コイツイツナニヲスルカワカラナイデスカラ」

詩音ははき捨てるかのように言い放つ。すでにがっくりとひざを追った圭一は大粒の涙を流していた。それでも泣き声はあげない。精一杯の反抗だった。

「ソレニココニハオマエヲシンヨウスルナカマハモウイナインダヨ  
!」

それが決定打になった……。

「…………ぶつ…………ぶつ…………ぶつ…………ぶつ…………」

圭一はうな垂れながら聞き取れない声で何かを唱えていた。

「圭一君??」

レナが心配そうに近づく。詩音はそれを静止しようとしたが魅音に止められた。紗都子も梨花も。ミサキも涼子も祐樹も圭一の近くに行った。けして軽蔑するためではなく、仲間として心配していたからだ。

「圭一??大丈夫ですか??」

梨花が先に話しかける……。ようやく顔を上げたその表情はすでに生きているとは思えないほど顔面蒼白、目は虚ろ……。口から出ていたのは……。

「いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさい」

壊れた録音機の如くくりかえしていた。そこにいた誰もが愕然とした。

カナ カナ カナ ひぐらしが鳴いている

## 友殺し編 11（後書き）

コメント待ってます！！

ここで皆さんにお願いがあります。

ひぐらしのなく頃に 光の第6巻として執筆しようと思っています  
過去殺し編で登場する圭一の幼馴染の女の子を募集しています。彼  
女と圭一は過去に付き合ったこともあり、圭一が起こした事件によ  
り別れることになった仲です。圭一はあきらめていたが、彼女のほ  
うはまだあきらめていなかったという設定でいきます。

性格は何かと世話を焼きたくなる女の子。中学2年生という設定で  
す。

皆さんからのたくさんアイデア待ってます。

では！！

友殺し編 12 (前書き)

2日ぶりの投稿??読んでみて下さい。  
それと募集待ってます。

事件の後・・・。

すぐに知恵先生に圭一の異常な状態を報告し、入江に連絡するよううに梨花は行動した。数分後にやってきた入江に圭一は保健室で検診を受けそのまま病院に搬送された。

そのとき誰もが困惑した表情をしていた。小学生の子供たちの中には泣いている子もいた。その子達を必死にあやしている魅音たち。詩音はそれをなんとも思っていない表情で圭一が運ばれていくのを見ていた。

パシン！！

詩音は魅音に思いつきりほほをたたかれた。いきなりだったので何がおきたのかを理解するのに数分必要だった。

理解するとなぜたたかれたのかがわからず、怒りがこみ上げてくる。

「お姉！！何でたたくんですか??」

パシン！！

次はレナだった。目には涙をためている。今にも泣きそうだった。

「詩いちゃん！！圭一君はただ紗都子ちゃんにお返ししたただけなんだよ！！いつものことでしょ??何であんなことするの??圭一君の過去に何があったかは知らないけれども！！私たちにっては関係ないことだよね！！」

「そつだよ詩音。私たちにとって過去の圭じゃなくて今の圭でしょ??」

泣きながら訴えるのはミサキ。

「・・・今の彼で十分」

必要最低限のことだけを伝える涼子。

「紗都子と圭一のやり取りは1つのコミュニケーションなんだよ。それくらい誰でもわかるだろ??お前は馬鹿か??」

祐樹は顔を真っ赤にして怒りをこらえている。

「詩音さん・・・私から1に1だけでなく圭一さんまで取り上げるのです??」

紗都子が涙を流しながら詰め寄る。詩音は近づくと紗都子から離れようと後ずさりする。彼女の表情は何でそんなことを言うの??というものだった。

「紗都子??私はあなたのことを思って・・・」

「私が圭一さんごときのことでピンでなくと思いますの??あれはうそ泣きですわ!!圭一さんのあわてる姿が見たかっただけです」

まさかの告白に詩音は愕然とする。

「じゃじゃあ・・・私が悟史くんから紗都子のことを託されたのってどついついこと??」

「詩音・・・あなたは悟史からの言葉を履き違えています・・・。  
悟史はただ紗都子がほかの子供たちと仲良く生活できるようにして  
欲しいと言いたかったのではないですか??もう1度考え直すので  
す・・・」

梨花にはっさりといわれた詩音は誰もいなくなった教室で1人立っ  
ていた。

「ワタシガマチガツテイルハズガナイ・・・。ワタシハサトシクン  
カラサトコノコトヲタクサレタンダ・・・。アレダケツクシテヤッ  
タノニ・・・。ダレモカレモワタシガマチガツテイルトイウ・・・。  
ダレモサトシクンヲタスケラレナカッタノニ・・・。サトシクンガ  
イテクレタラワタシノミカタニナツテクレルカナ・・・?サトシク  
ン・・・ドコニイルノ??」

詩音は涙を流してひざ付いて泣いた。

友殺し編 12 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 13 (前書き)

コメント待ってます。

圭一と詩音の状態は・・・。

気を失った圭一は入江診療所に搬送された。すでに電話で聞かされてきていたのか、圭一の両親は2人ともうなだれて治療室のソファーに座っていた。

知恵先生が圭一の両親と話をしている間、梨花は入江に呼ばれて診療室に入った。

「僕を呼んだということは例のことについてなのですか??入江」

「ええ・・・、まず前原さんですが難見沢症候群レベル1ですね。まだ軽い段階なので心配入りませんが・・・これ以上の強い刺激は彼の症状を加速させます」

「やはり今回もなの・・・??」

梨花はうつむいてぼそつとつぶやく。

「梨花ちゃん??何かいいましたか??」

入江は心配そうに聞いてくる。

「なんでもないのでですよ。心配いらないのです。にぱー」

「それでは次に詩音さんですが、彼女はきわめて危険な状態です。原因はわかりませんが、極度のストレスとプレッシャーからでしょうね。レベル4です。いつレベル5になるかわからないので、一応ここで入院の形の隔離をした方がいいと思うのですが・・・」

「原因は よね・・・」

再び聞こえないほど小さい声でつぶやく。

「一度園崎の皆さんとも話し合わなければいけないかもしれませんがね。親御さんからの承諾も「詩いは園崎とのかかわりを極度に嫌ってるのです。これこそ詩いを刺激してしまうんです」」

もはや打つ手なしだった。

「なるべく皆さんには詩音さんに強い刺激を与えないように伝えてください。後紗都子ちゃんにはしばらくトラップを自粛するようにいってください。前原さんは目を覚ませば大丈夫なはず出しますので心配はいりません」

入江からの忠告をしっかりと聞いて梨花は部屋を出て行った。

友殺し編 13 (後書き)

コメント待ってます!!

募集のほうも見てみてください!!

友殺し編 14 (前書き)

事件のその後・・・。

園崎詩音は目覚ましの音で目を覚ました。詩音は自分がいつどうやってここに帰ってきたのかが分からなかった。しかたがないので顔を洗い、容姿を整える。そして見ると周りは灰色の世界だった。

「ナンナノコレ・・・??」

一体何が起きているのか分からなかった。ただいえるのは無性に首がかゆかったことだけだ。無意識のうちに書いていた。

しばらくするときにならなくなり、仕方なく朝食をとって学校へ向かうことにした。バイクのかこの中には自分と紗都子の弁当。紗都子に弁当にはかぼちゃが大量に入っていた。

「サトシクンニサトコノコトヲタノマレタンダカラ。サトコノカボチャギライハワタシガナオシマス」

自分では分からなかっただろう。すでに詩音の目は普通ではなかった。

レナはいつもどおり圭一を水車小屋で待っていた。昨日のことを考えると休むと思っていたのだが、特に休みの電話は来なかったので待っていたのだった。

「圭一君・・・大丈夫かな・・・」

ふうっと昨日の圭一の行動を心配するレナ。

「詩いちゃん・・・なんであんなになっちゃったんだろ・・・」

詩音の普通ではない行動目の当たりにしたので、今後どう付き合っ  
ていくか悩んでいた。

「いつもどおりにするしかないのかな・・・。かな・・・」

すると向こうから誰かが来る足音がした。

ぎゅ　ぎゅ　ぎゅ

顔を向けるといつもどおりの圭一が来たのだった。よかったと胸を  
なでおろすレナ。

「おはよう圭一君。もう、体調大丈夫なの??」

いつもどおりの会話をしようとする。

「ああ・・・おはよう・・・ございます」

「どどどしたのかな、圭一君??圭一君らしくないね。ないね」

あわてて話しかけるレナ。

「いえ、いつもどおりの俺ですよ・・・」

明らかに元気がないというか、口調がおかしかった。

「いつもどおりの話し方でいいんだよ。だよ」

「いえ……、俺は……犯罪者ですから……」

どんどん暗くなっていく圭一。もうレナには見ていられなかった。

「圭一君は過去の圭一君を見て欲しいの??それとも今の圭一君を見て欲しいの??」

突然大声で叫ぶレナに圭一はびくつとする。歩きながら話していたので魅音たちと落ち合う場所に来ていた。ちょうどレナが叫んだことを魅音たちも聞いていた。それを理解したのか近づいてくる。

「おはよう、レナと圭一。圭一……俺はお前が前に何やらかしたかしらねえが……俺は気にしねえ!!」

祐樹が叫ぶ。それに乗っかって。

「私も!!圭がここに車で何してたか知らないけど、私が好きなのは今の圭なの!!だからそんなに思いつめないで!!」

ミサキが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「ちよちよちよつとミサキ!!おじさんは何か聞いちゃいけないことを聞いたような気がするんだけど……」

なにやら顔を真っ赤にしてあたふたとしている魅音。それを聞いてさらに真っ赤になるミサキ。

「ハウ~~~~、ミサキちゃんと魅いちゃん、真っ赤になっちゃってかあいいよ~~~~」

かあいモードになったレナは、魅音とミサキの近くにいた圭一をレナパンでぶっ飛ばす。

「ぶほ!!」

数メートル吹き飛ばされて気を失う圭一。

「け〜い〜い〜ち〜」

涙を流しながら傍による祐樹と圭一の状態を確認する涼子。

「ふふふ、圭一の身に心配はありません。ただ気を失ってるだけです」

よかつた〜と胸をなでおろす祐樹。まだレナは魅音とミサキに頼りしている。結局目を覚まさない圭一を祐樹が背負って学校に行った。学校に着くや否や知恵先生にレナが起こられたのはいうまでもない。

友殺し編 14 (後書き)

コメント待ってます!!!

友殺し編 15 (前書き)

堕ちていくヒロイン・・・。

その日の放課後。いつもどおりの部活が始まると思っていたのだが、圭一は参加できないとそそくさと帰宅した。仕方が穴井と結局部活話で皆々解散した。

もとより今日を最後に部活は休みになるはずだった。1週間後に綿流しがあるのだった。

「綿流しまであと・・・1週間・・・」

悲しそうな表情で高台から村を見てつぶやく梨花・・・。

詩音はそれよりも前からあることを調べていた。

『綿流し連続怪奇事件と御三家との関係』

この雛見沢村で最も権力を持っているのは園崎家で、そのあとの古手家・公由家だった。

御三家が力を合わせれば、人の1人や2人、否それ以上の人間を殺すことはたやすい。

それで詩音は何かないか毎日調べていたのだった。今日も図書館で自ら危険を冒して手に入れた資料などを個室で目を通していた。

コン コン コン

戸がノックされた音がした。

「ハイ、アイテマスヨ」

詩音は軽く返事をする。

中に入ってきたのは鷹野三四と富竹ジロウだった。入ってくる前に資料はすべて隠し、学校の教科書を出していたので心配はなかった。

「コンニチハ、タカノサン、トミタケノオジサン」

「くす、こんにちは、詩音ちゃん。勉強熱心ね」

「やあ、詩音ちゃん。久しぶりだね」

「トミタケノオジサンハコトシモワタナガシニアワセテキテクダサツタンデスネ」

「ああ、綿流しはすばらしい祭りだからね。シャッターを下ろさないではいられないからね」

「くすくす、ジロウさんたら。ねえねえ詩音ちゃんあなたは知ってるかしら・・・」

「ナニヲデスカ??」

「オヤシロ様について・・・。毎年起きてる事件はすべてオヤシロ様によるものだとみんな言ってるわ。だから私はオヤシロ様についてのことを研究してるの。まだまだなぞはたくさんあるから、何か知ってることがあったら教えて欲しいの・・・。園崎のあなただから知ってることとか・・・」

「ナ・・・ナニヲイツテルノデスカ??タカノサン・・・。アイニクワタシハソノザキカラアイサレタモノデハナイノデ・・・。ナニモシラサレテハイマセン・・・。ソノコトナラバオネエヤリカチャマニキイタホウガイイトオモイマス」

「そう・・・残念ね・・・」

「ごめんね詩音ちゃん。へんなこと聞いちゃって」

「ジロウさん!!オヤシロ様は変なことじゃないですよ!!それに今度祭具殿に入るって約束は忘れていないですよね!!」

「鷹野さん!!」

しまったと鷹野と富竹は顔を真っ青にする。しかし詩音はそれをとがめようとはしなかった。

(サイグデンデサトシクンガゴウモンニアッタカモシレナイ・・・。ソレノシヨウコガミツカルカモシレナイ・・・)

「ワタシモイツテイイデスカ??」

まさかの詩音のお願いにびっくりする2人。しかしこれをほかの誰にも言わないという条件を挙げると・・・。

「イイデスヨ。サツキキイタコトハナカッタコトニシマス。トイウヨリモワタシモソレヲシヨウトシテルノデスカラ」

その後詩音たちは綿流しの日に、梨花の演舞が終わり次第祭具殿に

集合することを決定した。

友殺し編 15 (後書き)

コメントお願いします!!--!

友殺し編 16 (前書き)

いつも見てくださる皆さんありがとうございます。

小野ミサキは現在古手神社の境内に座っていた。どうしたわけか悩んでいるようだった。はあっとため息を漏らす。もう何回目だろうか。朝かここに来ては空を見ているばかり。今日は休みのため学校には行かない。部活も魅音と梨花が仕事がることから休みだった。ミサキが悩んでいる理由はこの前の出来事にある。ミサキはそのときのことを何度も回想していた。

『私も！！圭がここに車で何してたか知らないけど、私が好きなのは今の圭なの！！だからそんなに思いつめないで！！』

「思わず思っていることが口から出ちゃったけれど・・・」

ミサキはまだ圭一から返事をもらっていないかった。と言うよりも圭一があれを告白と受け取っているかどうか心配だった。あの状態で冷静に考えるのは難しいと思うし、何より自分がさらに彼に重荷を負わせてしまったのでは??と不安だった。がさつと草がなる音がした。振り返ると練習が終わったのか着物姿の梨花がいた。

「梨花ちゃん・・・、練習終わったんだね」

「みー 完璧なのです。明日は楽しみにしててなのです」

「そうだね 明日は楽しまなきゃね」

「ミサキはどうしたんですか??最近ここに来ることが多くなった木がするのですが・・・」

「ちよつと悩み事があつてね・・・」

「圭一のことですか??」

「！！どどうして圭のことになるのかな梨花ちゃん??」

「みー 魅音たちに聞いたのです ミサキが圭一に告白したことです。圭一は今どんなことを考えてるのですかね」

「べべべつに、あれたまたま出ちゃった・・・デマだよ！！デマ！！みんなが気にすることじゃないよ」

「みー 本当ですか??」

「本当だよ」

「じゃあ僕が圭一をもらってもいいのですね??」

「そそそれはだめ」

「なんでですか??顔が真っ赤ですよ??りんごみたいなので。にぱー」

「梨花ちゃんりんごはまだ季節じゃない!」

「それなら太陽みたいです」

「うう・・・、梨花ちゃんひどいよ・・・」

「早く答えが来るといいのです。きっとミサキならうまくいくと思うのです」

「そうかな??」

「やっぱり本当なのですな」

「あゝ、謀られた」

「みーにぱー みんなにお伝えなのです」

「梨花ちゃん待って」

逃げる梨花を追いかけるミサキ。夕日が広がる離身沢ではひぐらしが鳴いている・・・。

かな かな かな かな

友殺し編 16 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 17 (前書き)

いつも見てくださる皆さんありがとうございます。

小野ミサキは現在古手神社の境内に座っていた。どうしたわけか悩んでいるようだった。はあっとため息を漏らす。

もう何回目だろうか。朝かここに来ては空を見ているばかり。

今日は休みのため学校には行かない。部活も魅音と梨花が仕事がることから休みだった。ミサキが悩んでいる理由はこの前の出来事にある。

ミサキはそのときのことを何度も回想していた。

『私も！！圭がここに車で何してたか知らないけど、私が好きなのは今の圭なの！！だからそんなに思いつめないで！！』

「思わず思っていることが口から出ちゃったけれど・・・」

ミサキはまだ圭一から返事をもらっていないかった。と言うよりも圭一があれを告白と受け取っているかどうか心配だった。

あの状態で冷静に考えるのは難しいと思うし、何より自分がさらに彼に重荷を負わせてしまったのでは？と不安だった。

がさつと草がなる音がした。振り返ると練習が終わったのか着物姿の梨花がいた。

「梨花ちゃん・・・、練習終わったんだね」

「みー 完璧なのです。明日は楽しみにしててなのです」

「そつだね 明日は楽しまなきゃね」

「ミサキはどうしたんですか??最近ここに来ることが多くなった木がするのですが・・・」

「ちょっと悩み事があったね・・・」

「圭ーのことですか??」

「!!--どどうして圭ーことになるのかな梨花ちゃん??」

「みー 魅音たちに聞いたのです ミサキが圭ーに告白したことです。圭ーは今どんなことを考えてるのですかね」

「べべべつに、あれたまたま出ちゃった・・・デマだよ!!--デマ!!--みんなが気にすることじゃないよ」

「みー 本当ですか??」

「本当だよ」

「じゃあ僕が圭ーをもらってもいいのですね??」

「そそそれはだめ」

「なんでですか??顔が真っ赤ですよ??りんごみたいなのです。

「はー」

「梨花ちゃんりんごはまだ季節じゃない!」

「それなら太陽みたいです」

「うう……、梨花ちゃんひどいよ……」

「早く答えが来るといいのです　きっとミサキならうまくいくと思  
うのです」

「そうかな?」

「やっぱり本当なのですね」

「あ……、謀られた……」

「みーにば……みんなにお伝えなのです」

「梨花ちゃん待って」

逃げる梨花を追いかけるミサキ。夕日が広がる離身沢ではひぐらし  
が鳴いている……。

かな　かな　かな　かな

友殺し編 17 (後書き)

コメント待ってます!!

Pllllllllll

夜、小野家には電話が鳴り響いた。勉強中だったミサキは母親から受話器を受け取る。相手は圭一だった。

『もしもし、圭一だけど。ミサキさん??』

「もしもし、圭??ミサキだけど、どうしたの??後それと敬語はやめてね。今までどおりの口調でいいんだから」

『ごめん……。それで今時間あるかな??』

「どうして??別にいいけど」

『この前の返事のことについて……』

「!?!」

「いつもの集合場所に来て欲しい……」

「うん……分かった」

がちやりと受話器を置くと、ミサキは母親に友達の家に行くてくると伝えて外に出る。走っていけば5分ぐらいでつくところだ。

サンダルだったので少しゆっくり行くことにする。着くまで何度も考えた。振られた場合のこと、そして付き合うことになったときの

こと……。

ミサキが待ち合わせ場所に行くとすでに電話の主がいた。いつもの私服姿でただ相手が来るのを空を見上げて待っていた。

「圭??？」

ミサキが声をかけると圭一がこちらを向き、近づいてきた。

「……ミサキ、この前のことなんだけど……」

「うん……」

「……」

月明かりが照らす場所で2人は……。

翌日、綿流しの日。古手神社に集合していたいつもの部活メンバー。女性はそれぞれ浴衣姿。圭一だけがラフな私服姿だった。

「圭ちゃん、目の保養になってますかな??じゅるり」

「魅音、よだれが出てる」

「ハウ~~~~、みんなの浴衣姿がぁいいよ~~~~」

「きゃ~~~~レナさん苦しいですわ~~~~」

「もう眼福眼福……」

「祐樹……目がハート……」

「はっ！俺としたことが、紗都子〜俺とデートに「お断りですわ！」「が〜ん」

「どつどつ、祐樹もはしゃぎすぎはだめだよ。これからもつと盛り上がるんだからここでテンションあげすぎてもだめなんだよ」

「なんで圭一はもてるんだ??」

「おお俺はべべべつにだな」

「だったら何で圭一君はミサキちゃんと一緒に興宮の服屋にいたのかな??かな??」

「レナちゃん・・・なんで知ってるの??」

「なんでかな〜??かな〜??」

「レナ・・・目が怖い・・・」

「圭ちゃん・・・それはホンとかな??おじさんも詳しく聞きたいね〜」

「待て魅音!!落ち着けて!!ってレナなんでここで鉈を取りだす!!周りの人が怖がってるだろ!!祐樹!!いつまで紗都子の浴衣をシャッターチャンスしてるんだ!!2人を抑えてくれて、ミサキは何で顔真っ赤にしてるんだ!!ぎゃー服が切れました!!レナ落ち着け!!分かったから全部話す!!っていたたた魅音絞め技はタブーだ!!紗都子なんだその軽蔑したような覚めた目は!!って涼子も何説明してるんだ!!紗都子が顔真っ赤にしてるぞ!!」

って何で俺がけだものになるんだ〜!!」

そしてこのあと圭一は縄で拘束された後、すべてを話し、ようやく楽しい祭りに参加できた

友殺し編 18 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 19 (前書き)

とうとう30話超えてしまいました。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします!!

祭りは大成功だった。みんなで梨花の舞を見た後は富竹から集合写真を撮ってもらった。完成は1週間後だった。

詩音はみんなが圭一を拘束からといた後に合流し、祭りを普通に楽しんでいた。

そして現在は祭具殿の前に富竹と鷹野とともにいる。

富竹がピッキングで鍵を開け中に入る。もってきていた懐中電灯であたりを見渡すと。そこにあるのは拷問器具ばかり。

血がこびりついていることからまったく手入れされていないのだろう。

「きゃー！！」

突然鷹野の悲鳴が聞こえた。急いで鷹野の傍に行くと……。

「きゃー！！オヤシロ様だわ。私まじかで見るのは初めてよ！  
！もうサイコ」

「ははは、三四さん興奮しすぎだよ。オヤシロ様は逃げないからもう少し落ち着いたらどうだい??」

「ジロウさん、こんなにも興奮するものが目の前にあるのだから興奮を抑えるなんてとてもじゃないけれどできないわ！！」

「タカノサン??コレラゼンブガゴウモンキグナンデスヨネ??」

「そうよ、詩音ちゃん。これら全部がオヤシロ様の恐ろしさを突きつけるためにあるものよ。オヤシロ様がどれだけ非常な神様かを示しているわ!!」

(ココデ・・・???)

詩音の目に浮かぶのは、今にも拷問器具で殺されようとしている悟史の姿。

「詩音・・・助けてよ・・・」

泣きながらこちらを見ている。今にも崩れ落ちそうな顔だ。

(アンナカオニシタノハ・・・)

『魅音にお願いしたいことがある』

(アンナニヤサシカッタサトシクンヲ・・・)

『紗都子のことを・・・』

(アンナニヤサシカッタサトシクンヲ・・・)

『紗都子のことを頼んだよ・・・詩音』

(サトシクンヲコロシタノハダレダ!!)

だん だん だん だん

突如誰かが床を踏む音がした。辺りを見ても誰もいない。富竹たちは気づいていないようだった。

「トミタケノオジサン、タカノサン、ダレカガユカヲフムオトガシマセンデシタカ??」

「僕は聞こえなかったな。三四さんは??」

「私も聞こえなかったわ。もしかすると見回りの人が近づいたのかも」

「それなら帰ったほうがいいね」

その後鍵をかけて3人は帰った。その後何が起きるかも知らずに。。。

かな かな かな かな

ひぐらしが鳴いている。

友殺し編 19 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 20 (前書き)

とうとう20話来てしまいました。まだ続きます。気長にお付き合い  
ください。

翌日富竹と鷹野が殺されたという情報を聞かされた。その瞬間詩音はものすごい恐怖感に襲われた。

(コンドハワタシガコロサレル・・・)

詩音・富竹・鷹野は祭具殿に忍び込んだ。だから何者かに殺されたのだと詩音は考えた。

(コロサレルマエニコロシテシマエ・・・)

その日から詩音は常にスタンガンと拳銃を隠し持つようになった。当然拳銃の弾も隠している。いつでも戦闘が可能だった。

そんな状態で学校に行った。周りには恋人同士となった圭一とミサキ以外はいつもの風景のはずだったのだが・・・。

「何これ・・・」

目の前の風景が灰色がかっていたのだった。気味が悪くなり、警戒を強める。そんな緊張している詩音を新お会いして魅音をはじめ、部活メンバーが声をかけるが逆切れしてまったく会話にならない。

そんな詩音のもとに知恵先生の声が届く。

「詩音さん、お客様が来ていますので、玄関に来てください」

「はい」

めんどくさそうに返事をする、のろのろと玄関に向かった。そこにいたのは。

「いや、園崎詩音さんですね?? わたくし興宮警察の大石と申します。以後よろしくお願いします」

そう言っただけで名刺を渡してきたのは大石だった。

「丁寧ありがとうございます、わたくし園崎詩音と申します。といましても園崎とはほとんど交流は無いんですけれどね」

返事をしつつ名刺を受け取る。

「いやいや、それにつきましても深くは追求しません、こんな暑いところで立ち話でもなんですから、クーラーが利いた車の中でどうですか??」

もう6月下旬のためものすごく暑かった。すでにお互い汗を書いていたので、詩音はそれをありがたく受けることにした。中はクーラーががながん聞いていて涼しいくらいだった。お茶を飲みつつ大石は話を切り出す。

「昨日富竹ジロウさんと鷹野三四さんがお亡くなりになったということはご存知ですか??」

知っていることだったので頷いて肯定する。

「あなたは昨日綿流しに行きましたか??」

行ったので肯定する。

「ふむ・・・、誰と行きましたか??」

「部活メンバーと行きました。メンバーは分かりますよね??」

「ええ、いつも楽しそうで何よりです。そこで詩音さん、あなた祭りの後に富竹さんたちと会いましたか??」

あつたにはあつたが祭具殿に侵入するためだったので、ここですと後々悪いことが起きると予想したので、ここはあえて嘘をつくことにした。

「いいえ、私は祭りでみんなと別れた後に家に帰りました」

「それを証明する人は??」

「いません。だって1人で帰りましたし、それに興宮の方向に向かう人はいますが私はバイクで来たもので」

「あなた無免許ですか??」

「ちゃんとここに免許ありますよ」

確かに園崎詩音と書いてあった。

「すみませんな、まさか中学生でもう免許を持つてる人がいるなんてね」

「そんなことはどうでもいいんですが・・・犯人は見つかったんで

すか??？」

「それがまったく分からのですな。そこでいろいろな不とに聞き込みしてるんですけれどまったく有力な情報が無い・・・でも」

そこで大石の表情が暗くなる。

「どうしたんですか??大石さん」

詩音が心配そうに覗き込む。

「すみませんな、あなたには心苦しいかもしれませんが私は今年も起こった連続怪奇事件はすべて園崎家が行っているものだと思ってるのですよ」

その葉言葉に詩音は驚いた。もしかすると自分が捜し求めていた答えが見つかるのではないかと思ったのだ。そう・・・鬼隠しでいなくなった悟史のことが・・・。

「その話もう少し詳しく教えてください・・・」

その後社内でも詩音が聞いたこととはいったいなんなのか・・・。

かな かな かな ひぐらしが鳴いている。

友殺し編 20 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 21 (前書き)

とうとう20を超えてしまった。

翌日、雛身沢村に衝撃の事件が起きた。園崎家現当主園崎お麴が失踪したのだ。朝から村全体は騒がしくなり、学校はあつたが村の大人たちは総出で搜索していた。

次期頭首の魅音は自らが先頭を切って引つ張らなければいけない火が近いことを感じ、朝から調子が悪いようだ。

顔が真っ青だった。詩音も一応は心配しているがしれはただの振りでしかなかった……。

今から8時間前、時刻は深夜零時。みなが寝静まった頃、園崎家に侵入するものがいた。詩音だった。

詩音は大石から聞いたことからこの行動を決心したのだ。

『んふっふっふ、私はね園崎家が自らの力をオヤシロ様を使って村人を押さえつけようとしているのだと思ってるんですね。御三家の公由家はそのための舞台を整えるために綿流しを計画し、オヤシロ様の怒りを抑えるためにと言っ口実で古手家を利用している。すべてを裏で糸を引いているのが園崎家だと思っんですよ』

その真実を知るために詩音は御三家の党首を誘拐するという計画を打ち出し、決行した。

その日の夕方、打ち切りになったため、大人たちは家に帰っていく。詩音はこっそりと祭具殿に向かう。

「今頃また村が大騒ぎになってるわね……。まだまだこれから……」

そう言つて古手神社に向かった。

こん　こん　こん

詩音は梨花と紗都子が住んでいる古ぼけた家に来ていた。

ノックをすると梨花が出てきた。詩音は今日紗都子が買い物に行くことをあらかじめ調べておいたのである。

今から決行する計画のために。

「みー　詩いどうしたんですか??」

「梨花ちゃまと少しお話がしたいと思ひましてね」

「ぼくとですか??紗都子はもうすぐ帰ってくると思つんですが……」

「紗都子はいいんです。今は梨花ちゃまとお話がしたいんです」

「そうですか。分かつたのです詩い」

にっこりと笑う梨花、笑い返す詩音。

しかしその笑いにはどす黒い何かが含まれていた。

場所は変わつて祭具殿近く。色々しゃべっていたらここにきていた

のである。

それは詩音が誘ったからであった。

梨花は祭具殿を見るとわずかに顔が青くなった。

まるで何かに恐怖しているかのように。それを見逃さなかった詩音はまさかばれてると一瞬不安になったが、それでも決行しなければいけないという使命から奮い立たせた。

前を向いていた梨花にゆっくりと近づく……。

汲んだ後ろの手には薬を含ませたハンカチを持って……。

「みー……。詩い……。今日はひぐらしが鳴いていないのです。寂しいのです」

(ソウネ……。モウスグハキゴエハイヤツテホドキケルワ……)

すばやく梨花の口と鼻をハンカチでふさぐと梨花は意識を失ったのかばたりと倒れる……。

「ハハハハハハ、コレデスベテノシンソウガアキラカニナル!! マツテテネ!! サトシクン!!」

がさつと小さく草が動いたのには自らの大声で気づかなかった詩音。

詩音はその後梨花の体を担いで祭具殿に入ってしまった。

2人の鬼が拘束されている拷問卿へ……。梨花を誘う……。

その頃外では金髪の少女が走ってるのが見えた。

それを知るのは……。

かな かな かな

ただ鳴くひぐらしだけだった……。

友殺し編 21 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 22 (前書き)

10000アクセスありがとうございます。  
これからもよろしくお願ひします。

翌日になって御三家の頭首が全員行方不明となったことが村に伝わった。今日魅音が園崎家頭首代行、ミサキが古手家の親戚と言うことでその代行を務めることになった。

学校は休校となり子供は外に出ることが無いようにといわれた。まだ犯人が捕まっていない今、子供が外に出て行けばまた誘拐される危険があつたのだ。

しかしそんなときこそ行動したがるのが部活メンバーだった。メンバ（魅音・詩音・梨花・ミサキ・紗都子以外）が圭一の家に集まっていた。

梨花ちゃんを含む御三家頭首が行方不明になって2日目。さすがにそろそろ警察も動き出している頃だろう。俺達も仲間の梨花ちゃんを救いたいという気持ちからここに集まった。魅音とミサキばかりには負担かけられないからな。

「これからどこを探るか決めたいんだけど……って紗都子はまだ来ていないのか??」

「ハウ、紗都子ちゃん、どうしたんだろ」

「どこに圭の家があるのか分からないんじゃない??」

「そんなことは無い。興宮肉途中にあるから分からないわけないし、興味本位で俺がまだ来てなかったときに見てるはずだから」

「まさか・・・紗都子まで?? 紗都子〜」

「落ち着け祐樹!! まだ紗都子が捕まったわけではないだろ?? まだ家にいる可能性があるし、それに一緒にすんでた梨花ちゃんがいなくなっただんだ。寂しいんだよ。待ってればきつと帰ってくるって思ってるんだ」

「ハウ〜、それよりも梨花ちゃんが行きそうなところってどこだろ」

「こんなときに仲良しの紗都子ちゃんやミサキがいてくれたらいいのにね」

「ここは俺達で何とかするしかないだろ」

「・・・ふふ・・・ははは・・・あははははは」

どうしたんだ?? 突然祐樹のやつがおかしくなったぞ??

「え? え? どうしたのかな?? 祐樹くん・・・」

「何かおかしいことでも思いついたのかしら」

こんなときに思いつくことってなんだ?? もっと状況考えようぜ。

「俺様に任せろ!! 梨花ちゃんが行きそうなところは俺がすべて知っている」

「」「ホントに??」「」

どういうことだ?? なぜ祐樹が知ってるんだ?? そんなことよりも

今はそれを聞いておいたほうがよさそうだ。

「それで???どこなんだそこは??」

「ふふふ、そこはだな・・・」

「どうして祐樹が知ってるのから??」

「ふっふっふ、伊達に常日頃から梨花ちゃんと紗都子のことを守ってるわけじゃないんだぜ!!」

「でも・・・祐樹が言ってる守るってストーカーじゃないかしら」

「たしかに」

「かわいい子をスト・・・じゃなくて守ってないが悪いってぶべら!!」

ああ〜レナパンが炸裂した〜。哀れ祐樹って俺の本棚がめっちゃくちゃに!!そこには見られちゃだめなものが!!

「ハウ〜、祐樹くん??何かやましいことしてないかな??かな??」

「レナさん・・・これは健全な男子ならやることってぶは!!」

あ〜ポディーに入ったな。泡吹いてるよ。レナもう少し手加減を覚えなさいってそれはだめ〜!!

「ハウ!!これは!!」

「圭も男の子だからね」

見られてしまった。俺の秘蔵の宝たち。レナと涼子から何か黒いオ  
ーラが見えるんですけれども……。

「あの～お二人さん??何でそんなに怒ってるんですか??」

「別に怒ってないんだよ。だよ」

そう言いながらも本が切れ掛かっているんですけども……。レナ  
さん??

「そうだよ圭。あなたにはミサキがいるんだからこれは必要ないよ  
ね」

あゝ俺の宝物たちが。しくしくせっかく親にこっそりと買ってお  
いたものなのに……。

その後はちゃんとした話し合いになった。

友殺し編 22 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 23 (前書き)

いよいよクライマックス!!の前段階。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

紗都子は1人、祭具殿近くの草むらに潜んでいた。昨日親友の梨花をこの中に詩音が連れて行ったのを見たため、何とか助けようとしていたのだ。どうやら今は詩音はいないらしく、紗都子はゆっくりと祭具殿に近づく。隙間から中をのぞくも。

「暗くて何も見えませんわ」

しかも鍵がかかっているらしく。どうしようもなかった・・・普通のやつならばだが・・・。

「こんな鍵ならば私にかかれば・・・」

紗都子はポケットから針金を折り曲げたものを取り出すとガチャガチャとピッキングをはじめ、ものの3秒であけてしまった。

「まったくこのトラップマスターの私にかかればこんなものお茶の子さいさいですわ」

そうして扉を何とか開けて中に入るとそこには地獄絵図が描かれていた・・・。

「あ・・・ああああ・・・」

言葉がはつきりしない。なせなら目の前にいる人が・・・死んでいるのだから。それも血だらけで。

「こちらは確か・・・お勉強で・・・こちらが村長??」

園崎家頭首と村長だったと思われる肉の塊があった。原型をとどめておらず・・・死因がいくつも考えられるほど残虐な行いが行われたらしい・・・そして奥には・・・。

「梨花!!」

奥には貼り付けにされてぐったりとした梨花がいた。手足が太い釘で指された状態で貼り付けにされており、何かで叩かれた無数の後が見える・・・痛みで気絶しているのだろうか。ぐったりとしていた。

「まだ心臓は動いてますわ」

かすかだがまだ小さく鼓動しているのを聞いた。しかしこの構想具をはずすには自分1人では無理だということが分かった。そこで梨花が目を覚ました。

「ううう・・・」

「梨花??梨花大丈夫ですの??」

あわてて尋ねる紗都子。重いまぶたを何とか空けて梨花は紗都子を見ている。

「み・・・紗都子・・・どうしてここに・・・」

痛みで口が回らず、何とか話している状態だ。

「何言ってますの?? 梨花を助けに来たのですわ。昨日詩音さんが梨花のことを運んでいくのを見たので」

「みんなは??」

「皆さんはまだいませんわ……。でも今から呼んできて助け上げますわ!」

「紗都子……。僕のことはいいので早く逃げるのです……」

「何で見捨てて逃げる必要があるのです?? 梨花はわたくしの大切な友達ですわ!」

「お取り込み中悪いんだけどさ」

時が止まった……。紗都子はゆっくりと後ろを振り向いた……。そこにいたのは……。詩音……。否鬼だった。

「詩音さん……。??」

「紗都子……。何してるのかな……。??」

ゆっくりとこちらに向かってきながら詩音はしゃべる。目は正気の沙汰ではない。狂っていた。

「詩音さん! 何でこんなひどいことしてるのです?? 梨花はわたしたちの仲間ですわ!」

「紗都子は何にも知らないんだね……。可愛いそうに……」

「知らないって・・・どういふことですか??」

「悟史くんの事だよ」

「にーにーの・・・??」

悟史と言う言葉を聞いて紗都子は驚きを隠せなかった。自分の兄で突然いなくなってしまった大切な家族の1人。今も生きていることを信じて待っているのだ。

「悟史くんはね・・・こいつらの道具にされたんだよ・・・」

「道具・・・ですか??」

「そうだよ紗都子・・・園崎の力を完全に維持するためにこの婆が仕組んでいた計画・・・。そしてそれに力を貸していたのが公由家と古手家なんだよ」

「そんなことはないわ・・・」

突然梨花が口を挟んだ。

「あら・・・まだ死んでなかったのね・・・。そんなことないってよく言えたもんね。何がオヤシロ様の生まれ変わりよ。ただの小娘じゃない」

「わたしたちがそんな計画を考えることはないわ・・・」

「その証拠は??ないでしょ??」

「それなら詩音・・・あなたにはあるの?? 私たちがやったという証拠が・・・」

「それは・・・」

「何?? これはあてつけ?? 冗談じゃないわ!! そんなことのために2人を殺し、またわたしも殺そうっていつの?? 負避けるのも対外にしろ!! 園崎詩音!!」

「うるさいうるさいうるさい!!」

そう叫んで詩音は近くに落ちていた包丁をつかむと、梨花に向かって突進し、梨花の腕めがけて振り下ろした。

ぐさ ぐさ ぐさ ぐさ・・・

何度も何度も包丁を付きたてた。梨花はしかし悲鳴1つあげなかった。まるで魔女狩りにあう魔女のように笑いながら詩音を見つめていた・・・。

「うわあああつあああつあああああ」

叫びながら差し続ける詩音。すでに正気ではなく、狂ってしまった。いた。

「ああああああああ」

もうすでに腰が抜けて言葉にならない紗都子。詩音はそんな紗都子を見下ろして言った。

「ワタシハマチガツテイタ??」

零れ落ちる言葉に気はなかった。長年信じてやってきたことがまるで無駄だったことを突きつけられたものごとく。機械的な声を漏らした。

「詩音さん・・・もう辞めてくださいまし・・・わたしはもう・・・

」

「ワタシハアンタノタメヲモツテヤツテキタノニ・・・」

ゆっくりと紗都子に包丁を持って近づく詩音。紗都子は動けない。

「ワタシハサトシクンカラタノマレタカラアンタヲマモツテヤツテ  
タノニ・・・」

紗都子は覚悟を決めて言い放った。

「にーにーはこんなことを望んでいませんわ!!あなたなんか  
にーが振り向くはずがない!!にーにーはきつと泣いている!!  
あなたがしてきたことはにーにーがあなたに頼んだことではない!  
!あなたはにーにーに頼まれたことを何一つしていない!!」

パリン・・・

何かが割れた・・・。次の瞬間紗都子は倒れた・・・。詩音が心臓  
めがけて包丁を付きたてたから。

「嗚呼あああああつあああああああ」

狂ったように叫ぶ詩音、すでに限界だった。

「クロス・・・ミンナクロス！！ミンナワタシノテキダ！！」

詩音は立てかけていたマシンガンを持って村に走っていった・・・。

かな かな かな ひぐらしが鳴いている

友殺し編 23 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 24 (前書き)

長かった友殺しも残りわずか・・・。  
惨劇へ誘え・・・。

詩音は村を走って村人全員を学校に集めた。もちろん園崎のものも皆だ……。部活メンバーも集められ、人が変わってしまった仲間を悲しそうに見ていた。

「詩音！！こんな馬鹿なことはやめなさい！！」

魅音が叫ぶ。しかし詩音はそれをあざ笑うかのように、拳銃で魅音の四肢を打ち抜く。

「あああつああああ」

あまりの激痛に泣き叫ぶ。それを見てまた詩音は笑う。拳銃やマシンガンだけではなく手榴弾や学校の周りにガソリンを巻いていた。ここで目を起こせばみんな焼け死んでしまう。さらに窓は完全に固定されていた。詩音が男たちに無理やりやらせたのだ。ここに来るまでに何人かは逃げ出そうとしたり、あまりの恐怖に泣き止まない子供は殺された。

「詩音・・・梨花ちゃんと紗都子をどうした」

圭一が声に恐怖を含めながら尋ねる。ミサキを抱き寄せながら。

「あの2人なら村長たちと一緒に天国に行ったよ。私が殺した」

「なんでそんなことを！！」

「アイツラガワルインダ！！ワタシガサトシクンノタメニヤツテキ

タコトヲゼンブヒテイシタノガワルインダ!!」

「詩いちゃん!! 悟史くんがそんなことを頼むと本気で思ってるの??」

叫ぶレナ。しかし今の詩音には火に油を注ぐものである。

「うるさい!! お前らは悟史くんが苦しんでるときに何もしてあげなかった!! わたしだけが悟史くんのために動いたいた!! そんなやつに私のことを否定する資格はない!! 死ね!!」

マシンガンが火を噴く……。レナを含む近くにいた村人が血を流し……。死んだ。

「詩音!! てめ〜!!」

切れた祐樹が走り出し殴りかかったがそれより先に拳銃が火を噴いた……。祐樹は頭を打ちぬかれ……。死んだ。

「もう嫌〜」

狂ったように叫ぶ涼子や村人。彼らに立つように言った詩音は彼らを連れて外に出て行った。

「一体何をするつもりだ??」

「圭……。わたし怖いよ……」

泣きながら震えるミサキ。ミサキをぎゅっと抱きしめる圭。ここで逃げてみすぐにスイッチ式の爆弾で殺されてしまう。もう打つ手

がなかった……。ただ怖がらせまいと抱きしめていた。

ドガンー！！

大きな爆発音が響き渡った。しばらくしてから詩音が帰ってきた。

「詩音……何をしてきた……」

「あいつらに手榴弾投げつけて殺してきた……」

『！！！！』

誰もが驚愕した。そして誰もが死を覚悟し、生をあきらめた……。

「詩音さん、落ち着いてください！！あなたは病気なんです！！だから……」

入江が立ち上がり、説得を始めた。

「先生……あなたはいつも悟史くんの傍にいた……どうして彼を助けてくれなかったんですか??」

「それは……」

「いつでもあのくそや朗どもから助けられたじゃないですか！！何ですか??」

「詩音さん、まずは落ち着いて！！」

「もう！！お前は信用できない！！」

ズガーン

入江がゆっくりと倒れた。頭を打ちぬかれて死んだ。そして恐怖に取り付かれた人々は泣き叫びながら逃げ出す。彼らに向かって詩音はマシンガンをぶつ放す。次々と倒れていく人々。倒れていくかつての仲間、倒れていく生みの親、倒れていく双子の姉・・・みんな死んでいく・・・。

打ち終わったときには周りは血・・・血・・・血・・・だった。

「あは・・・あははは」

狂ったように笑う詩音。彼女はゆっくりと学校を後にする。

「帰らなきや・・・悟史くんが帰ってくる・・・」

詩音はふらふらと夢遊病者のように興宮に向かった・・・。

ここは学校・・・。死体の山の中に動く気配があった。

「ううう・・・圭??」

ミサキだった。彼女は自分にのっかっているものが何かをようやく理解した。

「うううう・・・圭・・・」

体中を打ち抜かれ、蜂の巣と化した圭一がミサキに乗りかかっていた。圭一はミサキを抱くようにしてマシンガンの嵐から守っていたのだった・・・。

「うわー！ーああああ」

ひぐらしの鳴くころに、1人の少女の叫びが響き渡った……。

かな かな かな ひぐらしが鳴いている

この日、詩音は夢を見た。学校でみんなが楽しそうに部活をしている風景だ。その中には……。

「悟史くん!!」

愛しの悟史の姿もあった。悟史の隣には紗都子がいてなにやらしゃべっている。彼らの顔は幸せそうだった。

「悟史くん!!」

詩音は立ち上がり、悟史の元に行こうとした。しかしいくら歩いても近づけなかった。むしろ詩音以外がどんどん遠ざかっていく。

「なんでわたしだけを置いていくの??」

彼らは悲しそうな顔を詩音に向けた。悟史が1歩前に踏み出して口を開く。

「詩音……僕は紗都子をよろしくとお願いしたはずだよね……」

「うん!!だからわたし頑張ったんだよ!!」

「でもなんでこんなひどいことしたの??」

「それはみんなが悟史くんを傷つけたからだよ」

「だからって紗都子を何で殺したの??」

「だって・・・わたしのしたことみんな否定するから・・・」

「君は僕の言葉をまったく理解していないようだね・・・」

「え???」

「僕は紗都子をよろしくといったはずだ・・・。君は紗都子だけではなくみんなを不幸にした・・・。君には失望したよ・・・」

そう言つて歩き去ろうとする悟史たち。

「待つて悟史くん!!」

何度言いかけても結局振り向いてくれることはなかった・・・。そうして今時分が何をしまつたのかを彼女は理解する・・・。

「紗都子を殺した・・・梨花ちゃんを殺した、お姉を殺した。レナを殺した、ミサキを殺した、涼子を殺した、圭ちゃんを殺した、祐樹を殺した、家族を殺した、村人を殺した。殺した殺したあああああああつああ」

「わたしは何もできていない!!わたしは何もかもを奪つてしまつた!!うわ~~~~ああああああ」

目を覚ました詩音はゆっくりと周りを見渡した。真つ暗だ。まだ夜中らしい。

ぺた ぺた ぺた ぺた

何かの足音が聞こえる。暗闇の向こうから何か近づいてくる。

「何?？」

詩音は恐怖で動けない。そして聞こえてくる声……。

「……さい」

「じゅめん……さい」

「じゅめん……さい」

そして聞く……小さな女の子の声をそして見る自分の周りを……。

「「じゅめんなさい」「じゅめんなさい」「じゅめんなさい」「じゅめんなさい」「じゅめんなさい」

そして詩音の周りには殺したはずの人々がいた。それも血だらけで彼女に迫っていたのだ。

「いやーあああつあああああ」

詩音は一目散に外に出た。そして階段で降りようとした瞬間……無重力間を感じた……。そして最後に彼女が見たのは……小さな女の子だった。

友殺し編 24 (後書き)

コメント待ってます!!

友殺し編 25 (前書き)

それから月日が流れ・・・。

私の名前は柊ミサキ。旧姓小野ミサキ。現在は幼稚園教諭として働いています。結婚もし、姓が変わりました。子供もいます。今日は家族でわたしが住んでいた旧雛身沢村に来ています。つい最近までは閉鎖されていたのが今日ある人たちと会うためにやってきたのだ。

懐かしい道。ここをみんなで登校した。懐かしい道。ここを初恋の相手と歩いた。そして見えてきた懐かしい学校。そこでみんな殺された。でも、ニュースでは大災害のために村が全滅したとおかしなデマが流れた。わたしの言い分は結局聞いてもらえなかった。あの日の後、詩いちゃんが亡くなったことを聞いたときには悲しさと怒りがこみ上げてきた。何でみんななくなっちゃうのと言う悲しみと、彼氏を殺された怒り。

学校に入るとそこには白髪頭の太った中年の人と若そうな人がいた。

「こんにちは、わたし柊ミサキと申します」

「んふっふっふ、これはこれはミサキさん。お忙しいところすみませんな」

「相変わらず不思議な笑い方ですね大石さん」

「あっはっは、これは手厳しい。こちらは僕の後輩でね、赤坂衛くんだよ」

「赤坂衛と申します。ミサキさんよろしくお願いします」

わたしは名刺をもらいこちらこそと返事をした。今日はここでなぜ大災害が村全滅とデマが流れたのかを検証するために集まったのだ。墓参りをしながら懐かしい村を眺めて回った。彼氏の墓にもちゃんとお供えしてきた。わたしが結婚したことを知ってびっくりしてゐるかな??でもわたしが圭のことを忘れたときはないよつと伝えた。安心したかな??

この不可解な問題が解決するか分からない。だからこれを見たあなたのお願いです。なぜデマが流されたのかを解き明かしてください。それだけがわたしの願いです。

平成1

5年 月 日 柊ミサキ（旧姓小野ミサキ）

ぺた ぺた ぺた ぺた ぺた ぺた また1つ足音が増えた。

友殺し編 25 (後書き)

コメントをいただければ執筆の励みになります。  
次回からは怨み殺し編です。お楽しみに！！

怨み殺し編 1 (前書き)

新たななる惨劇の世界へ皆さんをご案内します・・・。

## 怨み殺し編 1

ある女の子は親戚だからと舞台に立てなかった。

ただ指をくわえて見ているしかできなかった。

だから彼女を嫉妬した。

ある女の子は暗いからといじめに遭った。

トラウマを持つ彼女は人と接するのが苦手だった。

だから疑うしかできなかった。

彼女たちの負の思いが交わるとき、あの惨劇が起き、一筋の光が見えた……。

さあ、見せておくれ、新たな惨劇を！！

フレデリカ＝ベルンカステル

私の名前は小野ミサキ。小野家の長女だ。

わたしの家は代々古手気と親戚関係だった。

私は綿流しでの舞いにあこがれた。私もやってみたい。そう思っていた。ひそかに期待していた。古手家に女の子が生まれなければ私が舞をできるんだと……。

しかしそんな幼い私の淡い夢は脆くも崩された……。あいつが生まれたんだ……。古手梨花。

私は2歳のとき、古手家の奥さんが出産するということで古手家に来ていた。このときはまだ舞にはさほど興味はなかった。

「ミサキはもうすぐお姉ちゃんになるんだよ」

お母さんが教えてくれた。このときは素直に嬉しかった。だってかわいい弟か妹がいとこに生まれるんだもん。

「男の子かな??女の子かな??」

私はわくわくしながら待っていた。でも、古手家頭首の人は必死にオヤシロ様に祈っていた。

「どうか無事に元気な女の子が生まれますように」

必死な表情をしていたが、このときの私には何でかさっぱり分からなかった。そして生まれてきたのは元気な女の子みんな大喜びで彼女に梨花と名づけた。

彼らはオヤシロ様の生まれ変わりだとか、当時の私にはまったく理解のできない言葉を発していた。それでも疑問に思ったことなのでずっと覚えていた。

それから私はただ舞をしたい一身体練習していた。梨花のお母さんの次は私がやると心の中で決めていたからだ。

そして3年前にその人がなくなった。綿流しの日にだった。両親をなくした梨花はおお泣きした。私も泣いた。

でもこれで舞が踊れるという期待もあった。しかし神様は・・・オヤシロ様は私の願いを聞き入れてくれなかった。

「綿流しの舞は梨花ちゃんにやってもらおう」

私は居間で村の人たちが話し合っていることを聞いてしまった。私は必死に自分にやらせて干しいを懇願したが、父親に引きずられて外に出された。

「お前は梨花ちゃんとは違うんだ！！彼女はオヤシロ様の生まれ変わりなんだ！！」

父親が何を言いたいのかわからなかった。

「お前は一生舞は踊れない！！」

それを聞いて私は泣きながら家に帰った。布団に入っても1人で泣いていた。母親からどうしたのかと聞かれても何も言わなかった。

いつでも無駄だと知っていたからだ。だから私の心に鬼が住み着いたのは・・・。

怨み殺し編 1 (後書き)

コメント待ってます!!

怨み殺し編 2 (前書き)

惨劇への案内人の資格はさまざま・・・。

## 怨み殺し編 2

私は泉涼子。私は東京生まれ。昔からオカルト関係が好きだったため、特集雑誌やそれらに関する本などをよく読んでいた。

そのため私は根暗なオカルト少女というレッテルを貼られ、いじめの対象になっていた。

それは中学1年の頃だった。両親がある小さな村から出てきたのを知ったのは小さい頃に聞いていたが、そこにオヤシロ様という神様がいることをとある雑誌で見つけた。

なんでもそこではオヤシロ様のたたりとうわさされる回帰事件が起こっていることから私のオカルト好きの心が揺さぶられた。

私は知らないことを知るのが人一倍好きだった。だから夏休みの研究ではそのオヤシロ様について調べることにした。

実際に雛身沢村にも行ったりした。それはもう有意義なものだった。そのとき私は不思議な少女に出会った。

小学生ぐらいの髪の長い女の子。彼女は古手梨花といった。彼女は私に向かってなにやら意味の分からないことを言った。

「あなたは再びここに戻ってくる」

それだけ伝えると彼女はどこかへいなくなってしまった。ちょうど帰る途中だったので気にすることはしなかった。

帰ってからのレポート作りは楽しかった。私の書いたものの中でも1番の出来となった。私の中に何かが住み着いたのはそのときからかもしれない。

「やめてー」

私の書いたレポートが切り裂かれていった。なんでも気持ち悪いことがかかれたものが展示会に出されることを気に食わない選ばれなかった子達のいじめだった。

数人の女の子たちが私を囲んで殴る蹴るの暴行を繰り返す。原を中心にするため、傷は目立たない。私は夢遊病者のように家に帰った。そのときからか、私の中に鬼が住みついたのは

私に対するいじめは続いた。結局ぎりぎりまで修正したものが展示されたことに不満を持った同じ子達からのものだった。

さらに根暗ということまで男子にも拍車をかけ始めた彼女たち。私は学校では居場所がなかった。私の心はすでに崩壊寸前だった。そして事件は起こった……。

「ぎゃー！ー！やめてー」

いつもいじめる女の子が腕を押さえて泣いている。そこからは血が流れている。他の生徒たちはそんな様子を見て驚いている。

血の付いてカッターナイフから血をなめてきれいにするのは私。狂っていた……。ゆっくりとその子に近づき腕を……。足を……。背中を……。次々に切り裂いていく。

「ごめんなさい！ごめんなさい！！」

必死に謝る彼女だが。

「ふふふ・・・アヤマルクライナラサイシヨカラヤラナイデヨネ」

私は笑っていた。気絶すると次のターゲットを探す。

しかし私を先生方が捕らえる。私は奇声を上げながら暴れるが男の力が3人もかかるとどうしようもなかった。私はその後病院に連れて行かれ、注射を受けた。その後には急激な眠気が襲ってきた。

その後退院した私は両親のふるさつである雛身沢に帰ることになった。私自身こんなところにはいたくはないと思っていた。

それにオヤシロ様について調べたいことがまだまだたくさんあったのですぐに了承した。事件についてはそれほど重い罰則はなかったが傷つけた彼女には謝った。心をこめたつもりはないが・・・。

私は彼女を怨んでいる・・・。

私は神様を知りたい・・・。

私たちは何でこんなことをしたのだろうか・・・。

かな かな かな かな

ひぐらしが鳴いている

怨み殺し編 2 (後書き)

コメント待ってます!!

### 怨み殺し編 3

「はい、みんな集まって。部活はじめるよ」

魅音がいつものように元気よくみんなに声をかけている。そしていつものメンバーが集まり始める。

「おっしゃー!!今日は何のゲームなんだ??」

「圭ちゃん、そんなに慌てなくてもゲームは逃げて行かないよ」

「おーほっほっほ、圭ーさんの場合逃げていかないのは負けもじゃないですか?」

「何だと紗都子〜!!」

圭がいつものように紗都子ちゃんにいじられてる。

「ハウ〜、罰ゲームは何かな??魅いちゃん」

「あっはっは、今日の罰ゲームはこれだ!!」

レナの恐ろしい質問に答える魅音の手にあるのはどこから購入したのだろうナース服だった。

「ぎゃー!!んなもん着れるかよ!!」

男の圭は相当嫌がっている様子。でもこのメンバーはちょっとやさつとじゃ負けるやつじゃないからね。

「これは負けられんぞ圭一!!」

同じく男の祐樹も恐れを抱いているようだ。早くも同盟を結びつつあった。

「みー これは楽しみなのです」

梨花ちゃんが圭一か祐樹に着させようと策を凝らしているようだ。なんとも腹黒い小学生だ。それに私がどうしても好きになれない子だった。それは私がやるはずだった綿流しの・・・。

「みー???ミサキ???顔色が悪いですよ???大丈夫ですか??」

「え???ああ、大丈夫だよ梨花ちゃん。心配してくれてありがとう」

「みー どういたしましてなのです」

まったく・・・こっちはあんたにむかっていたんだからいきなり話しかけるんじゃないわよ。

「それより魅音、今日のゲームは何なの??」

なにやらオカルト関係の雑誌を読みながら涼子が聞いていた。涼子はここに来てもう1年だけだなんてここに来たのかな??一はなかなか溶け込まなかつたけれど最近ようやく感じて感だから。

「今日はこの推理ゲーム行ってみよ」

「よっしやゝ!!祐樹!!俺達の同盟は強固なものだ!!」

「オウよー！圭一、俺達はなんとしてもナース服という地獄から逃げ出すぞー！！」

どうやらゲームが始まるようね。

「ハウ〜。。。私このゲーム苦手なんだよ〜」

「はっはっは、これはレナの罰ゲーム決定かな？レナのナース服・  
・ぐふふ、想像しただけでってグハ！！」

「圭一〜！！」

圭ツたらレナの前でアツチ系のこと言ったらレナパン食らうことぐらい知ってるはずなのに……。吹き飛ばされて鼻血出してる圭を介抱しようと祐樹が頑張ってる。私も参加したほうがいいかな？

「まったく圭ツたら学習能力があるのかないのか……」

「たはは、面目ない……」

「だが圭一、俺にもナース服のレナの姿が浮かんだぞー！！」

「なんともいえないあの恥らう姿ってぶべほー！！」

「圭一ってばくはー！！」

あゝあ2人ともレナパンの餌食か。

「あっはっは、これは圭ちゃんと祐樹が目を覚まさなきゃできない

かね??」

「ほーほっほっほ、レナさん??圭一さんたちの首筋を斜め45度からチョップしてみてくださいまし」

「みー・・・、紗都子が恐ろしいことを言ってるのです」

そんなので起きるのかな??

「ハウ〜!!いきま〜す」

ズビシ　ズビシ

鈍い音が教室内に木霊した。残っていた低学年の子達が泣きながら帰っちゃったよ。

「ううううう」

「俺達は一体・・・」

うめき声を上げる圭とぼんやりと立ち上がる祐樹。ようやく部活が始まるようね。気絶して同名結んだことをすっかり忘れていた圭と勇氣はお互いに邪魔しあい再開を争っていた。そして・・・。

「勝った〜!!」

「何だと〜!!負けた〜!!」

勝利の雄たけびを上げる圭と敗北しがつくりとひざを折る祐樹。その後祐樹の断末魔が雛身沢に響いたのはまたの話だ。

かな かな かな

ひぐらしが鳴いている

怨み殺し編 3 (後書き)

コメント待ってます!!

私は泉涼子。私はみんなと別れてからすぐに帰宅した。父親は興宮に仕事出まで帰ってきていない。夕食ズ栗に勤しむ母にただいまっと言つてから部屋に行く。一通りの予習と復習を終える。宿題ももちろん終わった。そしてここからは私の趣味の時間だ。

私は熱狂的なオカルトファンだ。自分で雑誌や実際に調べたりすることで研究していた。

今私が興味を持っているのはオヤシロ様についてだ。

この村では連続怪死事件が続いている。これもオヤシロ様のせいだと皆が言っている。

私もそう思っている1人だ。なんだって鬼隠しにあった人は見つかっていないらしい。

これは本当にオヤシロ様に連れて行かれたの違いないと私は思っている。

だから次の休みは図書館でこの歴史を調べようと思っている。

みんなは何も言わないけれど私は受け入れられてるのかな??

またあのときみたいにいじめられたら嫌だな。私は自分の長い髪をなでる。昔の母の真似である。

「涼子???ご飯で来たから食べなさい」

母が読んでいる、私は返事をして書いていた研究ノートを戸棚にしまった。興のご飯は何かな?? 私はひそかに楽しみながら下に行った。

そして待ちに待った休日。別にみんなと遊ぶのが嫌だというわけではないのだが。わたしは今興宮の図書館に来ている。

歴史関係の戸棚から雛身沢村の歴史を読み漁っていた。

読むたびに新しい発見が見つかり私は夢中でノートに書き込んでいく。

すごいすごい……。こんなにスムーズに書き込みができるだなんて久しぶりだった。

私はふと一息入れようと時計を見るとお昼になっていた。

開館は9時だったのもう3時間はかきっぱはしだったのだ。

どつりで首と腕が痛いわけだ。

わたしはお腹がすいての出片付けて料理店にでも行こうと立ち上がった。

すると私の目の前に見知った顔があった。

「圭??」

「涼子??」

前原圭一の顔が合ったのだ。

現在私たちはとある料理店に来ていた。私がオカルトの研究に来ていたというと圭は模試の勉強に来ていたらしい。

「こんな田舎にいても模試を受けるなんて勉強熱心なんだね」。

「まあな、ここに来たのは俺の気持ちの整理のためとやり直しのため。理由は聞かないでくれ。言いたくないんだ。思い出したくもない。忘れちゃだめなことだけれども・・・」

圭が暗くなったので話題を変えることにした。

「圭はオヤシロ様について何か知ってる??」

「悪いが俺もここに着てだいぶ経ったがまだ歴史についてはさっぱりなんだ」

そうなんだ、残念。私がかっかりした顔をしたからか圭は謝ってきた。

「すまない。俺まだ何も知らないんだ」

「え??別にいいわよそれは仕方がないことだから」

それでも圭はやめなかった。

「なんなら涼子が俺に雛身沢の歴史について教えてくれよ」

「え??いいけど・・・」

「ほんとか??」

それなら場と私はまず毎年起こっている連続怪死事件について話した。圭も真剣に聞いてくれていたし、私の勝手な推理も笑わずに聞いてくれた。以前なら絶対に馬鹿にされて終わっていたのに……。

「それはまた不思議な事件なんだな。鬼隠しか・・・なんだか名前だけでも恐ろしいな」

「それに鬼隠しにあった人ってまだ見つかってないんだよ」

「それまた怖いな」

「そうでしょ?? 私が知ってる限りではここに書いてあるようにダム建設の社長さんと佐都子のお兄さんの悟史って人。子にことは佐都子には言わない補遺がいいからね。あの子まだ悟史が帰ってくることを願ってるから」

「そうだな。帰ってきてくれればな」

その後私たちはお互いの思い出話を昼食をとりながら話した。そして再び私たちは図書館でお互いのことをした。

しばらく経ってからだろうか、私は後ろから声をかけられた。振り向くとそこには。

怨み殺し編 4 (後書き)

コメント待ってます!!

怨み殺し編 5

「鷹野さん??」

看護師さんの鷹野三四さんがいた。どうしたんだろう。

「こんにちは鷹野さん。こんなところでどうしたんですか??」

「ちょっと調べたいことがあったのよ、あなたと同じオヤシロ様について」

「鷹野さんもオヤシロ様を調べているんですか??」

私はハイテンションだった。

「ええそうよ、あなたに負けなくらいオカルト好きだから」

鷹野さんもそうなのか。私は身近なところに仲間がいたのに嬉しかった。

「これが私が調べたすべてです」

私はいままで記入した研究ノートをすべて見せた。鷹野さんは驚きながらもそれを見てくれた。

「すごいわ泉さん。私とまったく同じところまで調べてる」

「本当ですか??これで今同点ですね」

後何を調べられれば鷹野さんからリードできるだろうか？？

「ここだけの話・・・祭具殿に入ってみない??」

「祭具殿ですか??」

私は思わず驚いてしまう。圭も何事かと近づいてきた。

「こんにちは鷹野さん。この前はどうもでした」

「こんにちは前原君。今泉さんと綿流しの日に祭具殿に入ろうって話をしていたのよ」

「祭具殿ですか??」

「そこにはね、昔オヤシロ様を信仰させるために、信仰しないものを拷問にかけたときに使ったものが入ってるらしいの」

「それまた恐ろしいものを見に行くんだな」

「前原君もどうかしら??」

「そういわれましてもそこって入っちゃだめなんじゃ??」

「確かにそうだけれども、入ったことで何か手がかりがつかめるかもしれないの」

「そうなのか??」

「そうだよ!!私は心細いから男の子についてきてもらいたな・・・」

「分かったよ・・・ついていけばいいんだろ??それでいつなんですかそれは??」

「綿流しの梨花ちゃんの舞が終わってからね。待ち合わせ場所は祭具殿ということでもいいわね」

「はい!!分かりました」

私はわくわくしていた。こんなチャンスめったにない。だから逃すわけには行かなかった。

たとえそれが彼の人生を変えてしまったとしても・・・。

怨み殺し編 5 (後書き)

コメント待ってます!!

## 怨み殺し編 6

しゅっ!! たん!!

私は今家に置かれて、弓道場で練習をしている。

綿流しでは私が清めの矢を撃つことになっているからだ。何でもやみには生まれ変わりといわれている梨花の髪の毛が1本いれられているらしい。

鬼を沈めるために行われるこの儀式・・・私は昔から弓の練習をさせられてきたが、これのためだったとは・・・気づいたのは母が祭りでやっているのを見た5年前だった。

そのときは無性に腹が立った。私がやりたいのは今梨花がやっている舞だというのに・・・。

そんなこんなで練習始めてもう2時間は経っていた。そろそろ握力がなくなってきた。時間もお昼だったから。

私は帰って昼食をと思っていたときに・・・やつが来た。

「みー ミサキは頑張りやさんなのです」

梨花だった。なにやら大きなバスケットを持っている。

「梨花ちゃん。どうしたのかな??それに私のは梨花ちゃんのに比べたらそんなでもないよ」

「そんなことはないのですよ。ぼくなんてまだ体が小さいですからそんなに長くはできないのです」

「それでも頑張ってることには変わりないでしょ??だから梨花ちゃんはずごいんだよ」

心の中ではとつとつとやめてしまえと思っていた。

「そうですね。僕も頑張りますです」

なんでそんなにやる気を出すんだよ……。そこで止めるとか言えば私が変わりにできるというのに……。また私の黒い部分が暴れだしていた。

「そんなことより梨花ちゃんは どうしてここに?？」

「みー ミサキが大仲すかしていると思ったからお弁当を作ってきたのです。にぱー」

「ありがとう梨花ちゃん。ちょうど帰ってご飯食べようと思ったところだったから」

「それはよかったです。たくさん作ったので食べてくださいなのです」

「ありがとう。いただきます」

そうして私は梨花と一緒に昼食をとった。美味しかったが私の黒い部分はそれを拒絶していた。こいつさえいなければ私が舞を踊れる……。ただ純粹に思ったただけだった……。なのに……。

『コロセバ?』

誰??今しゃべったのは誰??

「ミサキ??どうしたのですか??」

私が突然立ち上がったのに疑問を持たらしい。

「なんでもないの。なんだか空耳だったみたい」

私は座りながら大丈夫といった。しかし梨花の顔は険しかった。

「ミサキ??あなたが何をしようとしているかは分かりませんが取り返しの付かなくなるようなことだけはやめてほしいのです」

何を言ってるのこいつは??私が何をしようとしてる??

「僕から花にもできませんがあなたは今後選択を迫られます。その選択だけは間違えないでほしいのです」

なにやら必死の懇願だった。しかし私には何を言っているのかさっぱりだった。

「今は分からなくてもいいのです。でも近いうちに迫られます。だからそのときは間違えないでくださいなのです」

「分かったよ梨花ちゃん。そのときは間違わないようにするから」

私はできるだけ笑顔で言った。梨花も少しはにかんだ表情を作った。

『コロセバワタシガ・・・』

だからあなたは誰なの??

『ワタシガヤリタイノハコンナモノデハナイ』

だからあなたは一体??

『ワタシガヤリタイノハリカガワタシカラウバッテイッタマイナン  
ダカラ。リカガイナクナレバワタシガヤレル。ダカラ・・・』

やめて……。それだけは言わないで……。私おかしくなる……。

「ミサキ??大丈夫ですか??」

梨花が頭を押さえているわたしを心配しているようだ。しかしそれは本当だろうか……。

『ワタシガフルテリカヲコロセバカンタンジャナイカ。ナンテカン  
タンナコトヲイママデヤラナカッタんだ』

ぐらりと視界が揺らいだ。片手でなんとか体を支える。遠くでは梨花が私に何か言っている。サゲスミカ??

『コロセ コロセ コロセ フルテリカヲコロセ!!』

「あああああつあああ!!」

怨み殺し編 6 (後書き)

コメント待ってます!!

## 怨み殺し編 7

私は走り出した。

梨花が何かいっているのかもはや聞いている時間がなかった。

私はどうかしてきている。自分が何かのつとられる。

こわいこわいこわい……。

急いで私は中に入り洗面所で顔を洗う。

冷たい水で目を覚まそうと考えたのだ。

タオルで顔を拭く……。

ウシロニナニカイル……。

「ぺた……ぺた……」

足音が聞こえた……。

恐る恐る振り返ったが誰もいない。

しかし確かに聞こえた。

それでもそれ以降は聞こえなかった。

私はすぐに戻って梨花に急にいなくなったことを謝った。

癩に障ったが仕方なくだ。

梨花はなにやら探ってくる感じだった。だが私は無視した。

じゃなければ……いそのことここで殺せるくらいの殺意があったからだ……。

かな かな かな

ひぐらしが鳴いている。近くなる綿流しと破滅のときを告げるかのように……。

怨み殺し編 7 (後書き)

コメント待ってます!!

怨み殺し編 8 (前書き)

綿流しに突入・・・。

## 怨み殺し編 8

今日は綿流し。部活メンバーが集合して出店を利用した部活が開始された。

「さあー、最初はたこ焼き早食い競争だよー!!」

魅音が部長らしく大きな声で宣誓する。

「よっしゃー、勝ってみんなにあんなことやこんなことをつてぶほー!!」

なにやら圭がいかかわしいことを発言していたのでレナに殴られていた。

「ハウー、圭ーくんあんなことつてどんなことかな??かな??」

レナの目が据わってる。怖い怖い。

「あっはっは、圭ーそんなことをするならば仕掛け人は紗都子や梨花ちゃんか適任だつてぐばらー!!」

上からなぜかたらいが落ちてきた。

「ちょちょちょっとと祐樹さん??何レディーに向かって恥ずかしいことを言つてらっしゃるのです??」

紗都子が顔を真っ赤にして言っている。

「みー。そんなことよりも早く始めましょうなのです」

またこいつか……。

「そうだね、梨花ちゃんとミサキは舞と弓があるからね」

私はそんなことをしたいんじゃない……。

「ルールは簡単。人はこのたこ焼きを誰が最初に速く食べるか競うんだよ」

「何だそんなことかよ。簡単簡単。オツちゃんたこ焼きひとつ」

何も知らない圭がたこ焼きを買っている。私たちもそれぞれたこ焼きを購入していく。

「それじゃあ行くよー!!はじめ!!」

魅音の合図にみんなたこ焼きを食べ始める。しばらくしてから。

「あっちー!!」

圭が口いっぱいいたこ焼きを入れてもだえていた。

「あっはっは、圭ちゃん何してるの??」

魅音が覗き込みながら言う。

「おーほっほっほ、圭ーさんなぜわざわざそんなにも熱々のものを食べているのです??」

「なんだと??」

「あのね圭くん。出来立てじゃなくてもいいんだよ。だよ」

「なんだってレナ・・・それってまさか」

「そういうことだよ圭。わたしたちはできてからしばらく経ったものを食べてるの」

涼子がにやりと笑う。

「そそそんなばかなー」

「ということで俺食い終わった」

祐樹がたべをわるのを皮切りに圭以外のみんなが食べ終わった。圭はレナからジュースを貰って飲んでいた。そんなこともありながら私たちは楽しんだ。

そして、舞が始まった。私の前であいつが舞っている。私がやりたかった舞をただただ舞っている。それを下から多くの人が見ている。その中にはわたしの両親もいる。私にはけしてできないといった両親が。

そして最後に私が払いの矢を放った。毎日練習しているためにはずすことなく真ん中を射抜いた。歓声が上がったがまったく嬉しくなかった。どうせ歓声を受けるなら舞をした後のほうがいいと思っていただけからだ。

祭りが終わりに近づいて、片付けも少しづつ始まっていた。私は古手家で村の大人たちのお酌をしながら会話を楽しんでいた。

その場には魅音も次期頭首として参加していて、未成年の癖に酒を飲んでいた。まったく明日も学校があるというのにあんなに飲んで・・・明日二日酔い決定ね。

私は仕事を追えて廊下で空に浮かぶ星を眺めていた。そこへ・・・

「ミサキ、今日はお疲れ様なのです」

笑顔で私に話しかけてきたのは梨花だった。

「梨花ちゃんこそお疲れ様」

できるだけ笑顔で言ったがうまくいっていただろうか。

「どうしたのですか?? 顔色が悪そうなのです」

心配そうに言ってくる。別に心配されても嬉しくはない。

「大丈夫よ。ちょっと疲れただけだから」

手を横に振りながら大丈夫とっておく。

「それなら早く寝たほうがいいのです。明日も学校があるのですよ」

「そうね、そうさせてもらおうわ」

そう言って私とあいつは別れた。なぜだかあいつは意味ありげな表情をしていたがなんだったのか。

帰り道、なにやら人の声がしたので物陰に隠れた。

「誰だろ??」

私がそつと見てみるとそこには。

「圭……と涼子??」

そこには同級生の圭と涼子がいた。

怨み殺し編 8 (後書き)

コメント・評価待っています。

## 怨み殺し編 9

なにやら話し込んでいるけれどちょっと聞きづらい。

そこで私はもう少し近づいてみた。すると……。

「祭具殿の中すごいことなってたな……」

え???いまなんて……。

「だからオヤシロ様はいまも信仰されているんだね」

涼子がなぜか興奮しながら言っている……。オヤシロ様……。

「でもあの中は言っただけでほんとうに良かったのか???いまさらながら後悔が」

「大丈夫だよ。それに私最近不審に思っていることがあるんだ」  
「なんだろ……。」

「ここ数年殺人事件が起きてるって前に言ったよね。みんなはオヤシロ様ののろいだって言ってるけれど、誰かが裏で何かやってるんじゃないかって思うの」

「またそれは探偵みたいなのを言うんだな」

「まあね、私そういうのにも興味あるから調べてみようかと思ってるんだ」

「まったく深く追求しすぎて自滅すんじゃないぞ。それと何か俺にもできることあったら言ってくれよ。微力ながらも協力するからさ」

「それは助かるよ圭。ありがとう」

彼らは……。

「もう遅いからここで分かれるか」

「そうねまた明日」

「ああ、また明日」

そう言つて2人はそれぞれ帰つていった。

2人は村の禁忌を犯した……。

ぺた ぺた ぺた

何か足音が聞こえる。まさかさっきの2人のどちらかが帰ってきたのか??

私はまた隠れたが一向に誰も来なかった。まったく空耳だったかな??

ぺた ぺた ぺた

また聞こえる。目を凝らしてみてもまったく見えない。一体なんなのか。

『オヤシロ様・・・』

な・・・何???いまのは一体???

『オヤシロ様はいる・・・ここにいます』

誰なの???

『下せ・・・禁忌を犯したものに』

誰なの貴方は???

『下せ神罰を!!オヤシロ様に代われるのは・・・』

私は背中に誰かがいるのを感じていた。冷たい何かが肌に触れていた。しかし体が動かない。

ぺた　ぺた　ぺた

まっまた足音が・・・。そして聞こえてくる女の子の声・・・。

『ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・』

必死に誰かに向かって謝っている女の子の声だった。私はとたんに動くようになった足を必死に動かして家に帰った。

私はベッドに入るやすぐに先ほどの何者かの声を何度も思い出していた。そして私はいつの間にか眠りに落ちていた。

怨み殺し編 9 (後書き)

コメント。評価待ってます!!!

怨み殺し編 10 (前書き)

2人のそれぞれの惨劇が始まる・・・。

私はそれを聞いて愕然とした。

「富竹さんと鷹野さんが亡くなった?？」

「ええ、なんでも今朝がた発見されたりしいわよ」

お母さんが不安そうな顔で言った。私も同様に心の中で不安を感じていた。

富竹さんと鷹野さんは私と圭と一緒に祭具殿に入った……。

わたしたちも同じく殺される??

そんなことを考えていると電話がかかってきた。

こんな朝早くから誰だろうと思いつながら私が出た。

「もしもし?? 泉ですけれども」

『涼子か!! 俺だ!! 圭一だ!!』

「圭??? どうしたの??? どんなにあわてて」

圭は恐ろしいほど取り乱し、焦っていた。やっぱり事件のことを聞いたんだろう。

『富竹さんたちが殺された!! 俺達と一緒に祭具殿に入ったんだ!』

「だから殺されたんだ!！」

圭は次は俺の番だとなきそんな声で叫んでいる。

「大丈夫だよ圭。私だって入ったんだよ??それにまだこんなにびんぴんしてるんだからさ」

しかし私もとても不安だった。

富竹さんたちを殺したのは一体誰なのか……。これもまた連続怪死事件なのか……。

私の好奇心は高まるばかり。

『これから一体どうする??』

「そうね……。といりあえずいつもどおりに過ごすしかないんじゃない??今後のことは跡でゆっくり話し合いましょ??」

『ああ……。そうしてくれ……。じゃあな』

「うん、ばいばい」

そうして電話は終わった。圭は極度の不安に陥っている。これは私が調査したものによると次は幻覚・幻聴が現れることになっている。私もそうなるのかな??でもそんなに圭ほどでもないしね……。

「涼子??そろそろご飯食べなさいね」

「はい」

そのことについてはまた後で考えよう。

私は今一本道を歩いている。向こう側には白い軽トラックがあった。そこにはいつもの大人たちが……。なんだかいつも思うのだが不審である。

「おはようございます」

私は一応挨拶をしておく。

「おはよう、涼子ちゃん」

しっかりと返してくれる人たち。しかし小此木庭園と書かれているのになぜかトランシーバーを使っている。

「あやしい……」

私の好奇心に火がついた。

もともと不振な人たちだったので調べてみたいと思っていたのだ。

突然車が発進し始めた。仕方なく車が行く方向へ私も進んでいく。

「なんでこんなところに？」

ついたのはなぜか入江病院だった。一体なんでこんなところに？

すると影から武装して人たちが現れたのである。全く何なのあの人たちは。でも目をつけていたと通り、怪しい人たちだったというの

は間違いないわ。

これ以上の深追いは今はやめておいたほうがいいと判断して私は帰った。

帰ってからすぐに圭から電話が来た。

「もしもし、泉ですけど??」

『涼子か??圭一だ』

「全く圭何なの??」

『俺・・・殺されるのかな??』

「何バカなこと言ってるの??そんなわけないでしょ??」

『でも・・・最近レナ途魅音の態度がおかしいから・・・。なんていうか・・・俺によそよそしいから・・・』

私は分かってしまった・・・。圭は確実に狂ってきていると・・・。私の調査ノートのと通りに・・・。

だから私も狂ってしまったのだろうか・・・。この瞬間の私は今までの私とは違う存在になった気がした。

ケイハワタシニトツテノカンサツタイショウ。

『涼子・・・一体どうすれば・・・』

「それは圭の思い過ごしだよ。レナと魅音はきつと元気のない圭に元気になってほしいんだよ。よそよそしいのは女の子だけの話だからじゃないの??」

『そうなのかな……。俺……。不安でしようがないんだ……。』

「大丈夫だよ。また何かあったら連絡して。私に何かできるかもしれないから」

『そういつてくれると助かるよ。それじゃあ』

そう言つて圭は電話を切つた。私はすぐに部屋に戻つて新しいノートを取り出した。

『前原圭一観察ノート 前原圭一は私泉涼子が調査した雛身沢の歴史から考えて現在、周りを疑うという状態に陥っていると推測される。その根拠として竜宮レナ及び園崎魅音の行動に不審の念を抱いていることだ。私自身がその場に居合わせていたから分かるが、その時彼女たちは今朝から、富竹さんたちが亡くなったことから次は自分だと不安に駆られて元気のない前原圭一を元気付けようと考えていたのだ。それを疑心暗鬼になっていることから、私の調査した結果は間違っていないと考えられる。引き続き調査を続ける』

私は一気にノートに書きなぐつた。先ほどの電話の会話などをだ。

それにしても首が異様に痒い。

……。まさか私自身も??これはめつたにないことだ。自分自身で雛身沢の歴史を体感している。

怨み殺し編 10 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

怨み殺し編 11 (前書き)

遅れましたすいません。

内容充実に努めます!!

コメントよろしく願います。

その日私は興奮してなかなか寝付けなかった。

あの日から数日、圭には新たな変化が見受けられるようになった。

私が学校に行くと、なにやら教室内があわただしかった。

何事かと思い、中に入ってみると、圭がロッカーからバットを取り出していたのだ。

圭の傍には紗都子ちゃんと梨花ちゃんがいた。

紗都子ちゃんは悟史くんのバットだから勝手に持っていくなど言っている。

「俺は命を狙われているんだ！！殺されてたまるか！！俺は生き残ってやる！！俺は富竹さんや鷹野さんみたいには殺されはしない！！逆に殺してやる！！」

そう叫んで圭は外に出て行った。

怒鳴られた紗都子ちゃんは啞然としていたし、梨花ちゃんはなにやらうつむいて何かを言っていた。なんだったのだろうか？

しばらくすると外から大声が聞こえてきた。

「お前なんて仲間じゃない！！」

圭の声だった……。一体誰に言ってるんだろ。でも、今のはひど

すぎじゃないかな。

すると魅音が泣きながら中に入ってきた。レナも心配そうだ。

すると外ではなにやらドカンドカんと大きな音が聞こえた。

「前原さん！！大葉さん！！一体何してるのですか？？理由を聞きますから職員室に来なさい！！」

知恵先生が叫んでいる。

その日も圭は部活に参加せずにすぐに帰って行った。

祐樹とは仲直りしていたようだ。

それにしても岬の様子もおかしかったな……。何かあったのかな？？

『前原圭一観察ノート 前原圭一は疑心暗鬼に陥ってから数日、新たな行動をとった。昨年行方不明になった北条悟史と同じくバットを持ち出し、素振りを始めた。何勝手に兄のバットを持ち出しているのかと北条サトコは文句を言っていたが前原圭一は自分の護身用だといって聞かなかつた。さらに素振り中に園崎身音が話しかけていたが、それを冷たくあしらった。その後また素振りを開始する。そのことを大葉祐樹に問い詰められていたが、殴り合いになり、それを繊細に止められて、終了した。体のがっちりしている大葉祐樹と互角に殴りあうほど前原圭一の身体能力があるとは今まで部活からは考えられない。さらに放課後は部活に参加せずに帰って言った。私は現在前原圭一は厳格・幻聴に悩まされていると推測する。引き続き調査を続ける』

その日の帰り道、いよいよ私もやばくなってきたと感じていた。

首のかゆみが止まらず、周りが敵に見えた。

これがなんだか知っているからこそ、特に気にせずにごろごしているが……。

「まるで東京にいたときみたい……」

別にみんなが私の悪口言ってるわけではないのに……。

やっぱりこれは病気なんだ……。

「ん???ということは……」

私はひとつの仮説を立ててみた。

これが病気ならば治療法はあるのか??みんなはこの病気のことを知っているのか??ならばここ離身沢で治療ができるのは入江病院しかない。これに関することはあそこにいけば何か分かるかもしれない。

ならばどうすれば???

それは簡単……聞いてみればいい。

私は目を折って聞きに行こうと決めた。

翌日……。圭は学校を休んだ。

魅音とレナに効いても風邪だとしか言わなかった。

なぜだかレナの指に包帯が巻かれていたのが気になった。聞いてみたが料理で切ったといった。

でも料理好きのレナが怪我するなんて珍しいと思った。

私の症状も重くなっていった。

聞こえる声が自分を蔑む声。

これは病気のせいだと分かっているても耐えられなかった。

其れから数日後私は体育の時間に倒れた。精神的に参ってしまったのだ。

「うつうつ・・・」

私が目を覚ますとそこは病室だった。

ガラガラと戸があげられるとそこには。

「入江先生」

「やあ、涼子さん。気分はどうですか?？」

入江先生がにこやかに入ってきた。

「まだ体がだるいですね」

眠そうな声で私は言った。正直精神的に参っていたため、いつ殺されるかにおびえて、夜も満足に眠れなかったのだ。

それは幻覚だと分かっているけどだ……。

「何かお悩みなんですか?? 顔色が優れませんからね」

心配そうに聞いてきてくれる先生。

「最近幻覚・幻聴が……ひどいんです」

思わず本音を言ってしまう。

「本当ですか!?! それはいけない!?!」

とたんに入江先生は手元にあった赤い液体の入った注射器を取り出した。

「嫌……」

私は見てしまった……。入江先生が悪魔みたいな表情で私に近づいてくるすがたんを……。

「嫌!! やめてー!!」

私は力の限り暴れた。

しかしばたばたと中に入ってきた看護師たちに取り抑えられ、構想具で固定された。

「あああつあああ・・・」

私はつめき声を上げるしかできなかった・・・。

ちくりと小さな痛みを感じるとともに私の意識は失われた・・・。

最後に見たのは彼らの後ろで泣いている角の生えた女の子。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい」

一体誰に謝っているのだろうか・・・。

欠片の世界（前書き）

これからの予定です。

## 欠片の世界

神隠し編 鬼隠し編 友殺し編 怨み殺し編

愛殺し編 穢れ落とし編 時変わり編

罪滅ぼし編 皆殺し編 祭囃子編

— 友騙し編 心変わり編（完） — 鬼が島編

— 鬼が島編 解

— 六軒島編

— 六軒島編 解

— 役代わり編

— 役代わり編 解 （完）

全18巻で行きたいと思っております。

長い道のりになるかもしれませんが根気強く執筆していくつもりで  
あります。

皆さんからのコメント・評価が執筆の力になります。

コメントや評価どうぞこれからもよろしくお願いします。

私が目を覚ますとすでに夜だった。ベッドの近くには着替えやら色々なものが置かれていた。

「お母さん……」

どうやらお母さんがここに来て着替えなどを持ってきたのだろう。

誰も居なかったために私は病室を出た。

奥は電気もなく暗い廊下が続いていた。一体置くには何があるのだろうか……。

「行ってみようかな……」

私の好奇心の塊の心が高まる。

ゆっくりゆっくり遠くへと進んでいく。

暗い空間がなんとも薄気味悪く、私の心を高まらせる。

「ここに私の捜し求めるなどの答えが??」

あったらいいなというくらいの気持ちで進んでいく。

途中階段を下りていくと、とある1室だけ明かりが灯っていた。

私はゆっくりと近づいていき、隙間から中を見てみた。

そこには……。

「三佐、前原圭一が離身沢症候群末期症状に近いという情報が入りました」

「ごくろう、近いうちに彼は死ぬわね」

「しかし三佐、あれは一体どんな病気なんですか??」

「今のあなたが知る必要はないわ」

「三佐、掃除はいつ始めるんすか??」

「小此木……そんなに慌てなくても、そろそろ始めるわよ。離身  
沢滅亡作戦」

「!?!」

私は思わず口を押さえた。そうしなければ悲鳴を上げそうになったからだ。

「あなたたちはとつと持ち場に戻りなさい!!」

そう叫んでいる人は見覚えがあった……。

私は混乱しそうになった。しかし、中に居る人たちがこつちに向かってきたので急いで更に奥へと進んでいった。

「ハア……ハア……」

肩で息をしながら私はまた明かりの付いている部屋の近くに来ていた。

私は近づき、中を窓ガラス越しに見てみた。

そこにはわたしの知っている人が眠っていた。

昨年突然行方不明になった少年だった。

私は思わず彼の名前を読んだ……。

一発の銃声とともに……。

「……くん……」

私の言葉は届かなかった……。

最後に見たのは私の知っている女性だった。

なんで……???

私は意識を手放した……。永遠に……。

怨み殺し編 13

綿流しが終わってから、私の幻聴・幻覚は更にひどくなった。

朝はそれほどでもないが、夜寝ようとすると、とたんに激しくなる。

『コロセ!!--コロシテシマエ!--!』

私の声でささやきかける。

いい加減にして欲しかった。

そんなことが何日も続いていたある日、いつもの待ち合わせ場所に居たらいつもは圭と一緒に来るはずのレナが1人で歩いてきた。

魅音が聞いてみたら、どうやら風邪で寝込んでいるらしかった。

「しょうがないな、圭ちゃん。ここはおじさんが一発元気付けこなきゃ」

「いいのか魅音??この前圭一にひどく言われてたじゃないか・・・」

祐樹が心配そうに言うてくる。

そうだ・・・何があったか知らないが、圭は魅音に何かひどいことを言っただけで泣かせて、祐樹と殴りあったのだった。

解決は一応はしたらしいが、圭は魅音を毛嫌いするはずもなかった。

一体彼に何があったのか。

確かにいつもの彼とは打って変わって、何かにおびえている感じはしていた。

まるであのときの彼のように……。

何だかんだ言って昼休みに入っていた。

いつものように机をくつつけて弁当の取り合いが始まった。

「おほほほ、魅音さん、隙だらけでございますわ」

「何おー紗都子！ーそんなこといつてる割には横から取られてるよ？？」

「きゃー！ー梨花何するのですの！ーあなたのはわたくしと同じですわー！ー」

「にぱー。紗都子の弁当にはぼくにはいつていないものがあるのです。ずるいのです」

全くこいつは……。

「みー？？ミサキどうしたのですか？？顔色が悪いのです」

「え？？そんなことないよ。それより早く取らなきゃなくなるよ」

「そうなのです。急がなきゃいけないのです」

梨花は再び取り合いの中に入っていった。

『コロセ!..!』

また聞こえる。。。もううんざりだ。。。。

『コロセ!..!』

うるさい。。。。

『コロセ!..!コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ』

「いい加減にしろ!..!」

私はバンと机を叩いて叫んだ。

みんなは私に眼を向けたまま固まっていた。

「あ。。。ごめん。。。」

私はおずおずと謝りながら座る。

前に座るみんなが敵に見えた。

どうして私を見て笑っているの???

どうして私の悪口を言うの???

ねえ……どうして???

その日私はふと思いついたことを父親に聞いてみた。

「ねえお父さん……」

「なんだ??」

酒を飲んでいるからちょっと性格が悪くなっていた。

もうちょっと早めに聞いておくべきだったかな??

「綿流しの舞のことなんだけども……。梨花ちゃんがいなくなったらどうなるの??」

私は恐る恐る聞いてみる……。

「ああ??何言ってるんだミサキ……。梨花ちゃんがいなくなったら……」

私は期待していた……。お父さんがお前しかいないだろうって言うてくれることを……。

「綿流しはおしまいだ……」

「え??」

今なんて言った??綿流しはおしまい??

「私はできないの……??」

何とか泣くのをこらえながら聞く。

コップの酒をぐいっと飲んでから父は……。

「お前のようにそこらへんにころがってる子供じゃああの崇高なる舞を踊ることができないなんてことは村では決められていない!!いい加減にしろ!!お前は子供ができるまで弓をやっつけていればいいんだ!!そんなことでいちいち俺のた野地身を邪魔するな!!」

「私は昔から舞を踊りたかったの!!なんでそんなに簡単に言うの???」

私は思わず切れてしまった。精神的にも参っていたせいか……、制御できなかったのだ。

「お前!!親に向かってなんて口聞いてやがる!!」

父は私を殴った……。

後ろの障子をバリバリと破いて私は廊下に倒れた。

「梨花ちゃんとお前の違いは分かってるよな……」

父は私を見下しながら言う……。

決定的な違いを……。

「梨花ちゃんはそのオヤシロ様の生まれ変わりで、お前はそうではないからだ!!」

「私だつてやってみたいんだもん!!」

「いつまでもガキみたいなこというんじゃない!!」

また思いっきり殴られた。バキつて言う嫌な音も聞こえた。

置くから母が走ってきて何とか和解させようと何か言っている。

「オヤシロ様が何だ!!そいつが毎年村人を殺してるじゃないか!!」

「ぐう……」

それ見る何もいえない。何がオヤシロ様だ。あんなの人を恐怖で無理やり振興させる最悪の神だ……。

パアアンつと言う音が響く。私は母にも叩かれたのだ。

「お母……さん??」

「ミサキ……今の言葉を撤回しなさい……」

何言ってるの??

「オヤシロ様はみんなのことを見守ってくれてるのよ??それを……」

なんで泣いてるの??

「ミサキ・・・お願いだから・・・」

もう私には味方はいないの???なんで???なんで???なんで???な  
んで???なんで???なんで???

私は気がつくと走っていた。ついてそこは『道場』・・・。

怨み殺し編 13 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

愛用の弓を組み立てる……。練習に使う弓矢は全部で6本……。

『コロセ!』

「やってやるわよ……。こんなふざけた村……。いたってしょうがない」

私はここを出ることにした。不自由すぎて仕方がない……。この村を。

その前にむかつくゴミを処理しに行こうと決めた。

私は廊下から向こう側でなにやら話し込んでいる両親を見ていた。

どうせ私について何か話し合っているのだろう。

全く今になっちゃ、無意味なことなのに……。

私は矢を引っ掛けた。

『コロセ……。』

私は矢に指をかけた。

『コロセ……。』

私はゆっくりと矢を引く。

『コロセ・・・』

私はゆっくりと狙いをゴミに向ける。

『コロシテシマエ・・・』

私は矢を離した。

『コロセ!!--』

ズダン!!っという音が聞こえた。そのあとに母の悲鳴が聞こえた。どうやら腰を抜かしているらしい。

ゴミは頭を射抜かれて柱に体を預けて・・・。

「なんでこっちを見てるの・・・??」

私を睨んでいた・・・。

「あ・・・ああ・・・ああ」

何か得体の知れない恐怖が私の体を襲う。

「かゆい・・・」

突然のかゆみが私の首を襲う。掻いても掻いてもかゆみが止まらない。

「なんなのこれ・・・」

血が出てくる……。それと同時に蛆虫も出てくる……。

「嫌……」

私は必死にそれを払う。しかしどんどん首の傷口から這い出てくる。

『コロセ……』

私はどうかしてしまった……。

母がこちらを向いてにやりとしながら甲高い声で笑っている……。

「このくそゴミが……!!」

私は夢中で矢を放った……。

それは見事にくそゴミの頭に命中し……。

「なんで私を睨んでるのよ……!!」

2人が追いかけてくるような恐怖に襲われたため、私は家を飛び出す。

走って走って……。ついたのはなぜか前原家だった。

「暗いな……」

なぜか圭の家は電気がついてなかった。

しかし次の瞬間、静寂を破る音が。

「お前ら俺のことを殺しに来たんだな!!」

圭???

圭が誰かに向かって叫んでいる。そういえばレナと魅音が圭のお見舞いに行くって言ってたっけ??

「信じてたのに!!信じてたのに!!」

圭の声とともにグシャッ!!グシャッ!!という何かが潰れる音が聞こえた。

しばらく静寂がおとすれる……。

一体彼に何があったのだろうか……。

とても嫌な予感がしてならない……。

ドタドタと階段を下りる音がした。

バンつと大きな音ともに圭が現れた……。

「なんで血だらけなの……??」

圭は体中に血を浴びた状態で外に出てきたのだ。

「一体何があったの??」

私は慌てて圭に聞いてみる。しかし……。

「お前も俺のことを殺しに来たのか……??」

圭の目は恐ろしく何かにおびえていた。

「私はたまたまここを歩いていただけであつて。圭に何しに来たわけじゃないの!!」

「うそだ!!」

「一体どうしちゃったの圭??」

「うそだうそだうそだ!!お前もあいつらのように俺のことを殺しにきたんだろ??そうだとミサキ!!」

「あいつらつて……誰??」

「しらばっくれるな!!レナと魅音のことだ!!おまえら俺を殺す計画でも立ててたんだろ??最近よそよそしかったのもそのせいだな……。俺は殺されないぞ!!俺は生き残つてやる!!」

圭は叫びまくつて全く私の言葉に耳を貸さない。

「お前も殺してやる!!俺は生き残るんだ!!」

そう言つて圭は手に持っていたバットを振りかざして私に向かって走つてきた。

もはや条件反射だった。

私はすばやく弓矢を放つとそれは圭の頭を貫通し、圭を家のドアに貼り付けにした。

「はぁ．．．はぁ．．．どうして．．．??？」

なんで私を睨んでいるの??

圭もまた両親のように私のことをにらんでいた。

再びかゆみが襲った。がりがりとう首を掻く。それに比例して血とともにも蛆虫が出てくる。

「やだやだやだー!!」

私は再び走り出していた。ただただ闇の中を．．．。

しばらく走っていると目の前に公衆電話がぽつんと立っていた．．．。

もはや死の直前にいた私がいいたいの．．．。

『コロセ．．．』

この期に及んでまた出てきた．．．。

『コロセ．．．』

全く私の声とそっくりなんだから嫌になる．．．。

『コロシテシマエ．．．』

誰を???

『…………』

ん???

「ぺた……ぺた……」

また足音が聞こえてきた……。

綿流しの後に聞いたものだ……。

「ぺた……ぺた……ぺた……」

ドンドン近づいてくる。私の心臓はもう破裂しそうだった。

「ぺたぺたぺたぺたぺたぺた……」

ふと足音が止まった……。恐る恐る振り返ってみると……。

「あなた……誰??」

そこには涙顔の角の生えた女の子がいた。

「ごめんなさい……」

何謝ってるの???

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
いごめんなさいごめんなさい

あまりにしつこい。私はすでに正常な判断ができないくらい精神が  
逝かれていた。

「ふざけんなクソガキ!!」

私は残っていた矢を彼女に向かって放った。

ビィィンつと矢が地面に刺さる音がした。刺さったが彼女は全く  
の無傷だった。

「いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
いごめんなさいごめんなさい

うそ……。確かに彼女の後ろに矢が刺さっているのに……。

まさか……。

「あなたがオヤシロ様……?？」

ふと泣きやむ彼女が顔を上げた。

それだけで十分だった……。私に神が罰を与えに来たのだ……。

「うわあああつあああ!?!」

私は必死に逃げた。逃げなきゃ殺されると思ったからだ。

『コロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレルコロサレル』

それだけが私の耳に聞こえてくる。

『シニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイ』

それは私だってそう……。でも神様には攻撃は効かない……。

ならばどうする……???

『コロセ……』

……。

「『生まれ変わりを殺せばいい』」

このとき私は鬼になった……。

怨み殺し編 14 (後書き)

コメント・評価待っています。

こんこんつと私はとある家の戸を叩く。

「どちらさまですか??」

中からは紗途子ちゃんが出てきた。

「こんばんは、紗都子ちゃん……。梨花ちゃんはいるか??」

「梨花ですか??梨花なら上にいますわ」

「ちょっと呼んできてくれないかな??話したいの」

「分かりましたわ。ちょっとお待ちにあそばせ」

そう言つて紗都子ちゃんは階段を上がつて行つた。

しばらく待っていると梨花ちゃんが出てきた……。

「みー??ミサキどうしたのですか??」

「ちょっとそこまで歩かない??」

このときはまだ彼女は警戒していなかった。だって今から向かうところ弓矢を置いているのだから。

「梨花ちゃんは……。オヤシロ様の生まれ変わりなんだよね??」

「みー。みんなはそう言ってくれます。でもぼくはそんな実感がないのです」

「わたしね・・・さっきオヤシロ様にあっちゃったの・・・」

「・・・」

「それでね・・・。殺されそうになったの・・・」

「そんなことはしないのです！！オヤシロ様は「嘘だー！！」ミサキ・・・??？」

私の叫び声が木々を揺らした。

とたんに虫たちの声がやんだ・・・。

「だから殺される前に殺す・・・」

「ミサキ・・・」

梨花ちゃんは恐怖に震えてはいなかった。まっすぐと私の事を見ていたのだ・・・。

「なんでそんな顔をできるの??」

「私がオヤシロ様の生まれ変わりだからよ」

とたんに口調が変わった。

「やっぱり本性隠してたんだ……。さすがは生まれ変わりね」

私は草むらから弓矢を出す。そして構える。

「殺されるんだよ??それでもいいの??」

「この世界もだめだったのね……」

「一体何のこといつてるの??」

静寂が痛い。暗闇の森の中に2人の女の子……。月の光で互いの位置が分かる……。

「この世界にはもう飽きたわ……。だからあなたの手でこの世界を終わらせて……」

なんであきらめてるんだ??それに世界って何のこと??

祭具殿前での睨みあい……。

「さあどうしたの??ミサキ??早く打ちなさいよ!!」

私はなぜか打てなかった。彼女から発せられる気迫というのだろうか……。何かに恐れているのだ……。

「さあ!!討ちなさいよ!!神になれなかった哀れな鬼め!!」

「うあああああつあああああ!!」

とうとう私は手を離れた……。

ヒュっという音とともに、ダン！！という音が聞こえた。

見てみると心臓をい抜かれた梨花が祭具殿に貼り付けにされていた。  
。。。

なんで・・・???

「なんであなたは笑ってるのよおおおおお！！」

梨花はまるで私のことを見下しあざけ笑うかのな表情を見せていた。

そして・・・。

「こちら、ターゲットRの死体を発見」

「あらあら私が直接手を下すもなかったわね・・・」

後ろから声がした。

「三佐・・・」

「落ち着きなさい。ミサキちゃん・・・」

どこかで聞いたことのある声がした・・・。

「あなたのおかげでまた楽しい劇が完成されるわ・・・」

何のこと・・・???

「神殺し……」

「え??」

それが私の最後の言葉……。

次の瞬間銃声と友の私の体は傾いた……。

意識が遠くなるかなたで思ったこと……。

私はただ神になりたかった……。オヤシ口様に……。梨花ちゃんのように……。

そして意識が遠くなるかなたで聞いた言葉……。

「終末作戦決行……」

永遠に意識を手放した……。

怨み殺し編 15 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

## 愛殺し編 1 (前書き)

怨み殺し編のデータがぶっ飛びました・・・。  
仕方なく次話投稿します。  
新たな惨劇の世界・・・。  
次の主人公は・・・。

## 愛殺し編 1

彼らは1人の少女を助けるべく立ち上がった。

しかし、その少女はそれを拒んだ。

彼らがしたことは更に彼女を苦しめた。

そして彼女は更に2人の兄を失う。

兄たちが妹を思う気持ちは惨劇に跳ね返される。

己に惨劇を招くことで惨劇の前にひれ伏すのだ。

フレデリカ＝ベルンカステル

317

昭和56年5月下旬の雛身沢村。

ひぐらしの元気な鳴き声が響いている。

まだ夏に入っていないために涼しいと言う感じである。

水車小屋に1人の少女が立っていた。

彼女の名は竜宮レナ。

ここ、雛身沢分校に通っている中学2年生だ。

彼女は今一人の少年を待っていた。

「圭一くん遅いな・・・」

登校終了時間に間に合うぎりぎりの時間である。

いつも時間にルーズな彼を待っていた。

「レナ」

遠くから彼女の名前を呼ぶ男のこの声が聞こえてきた。

「圭一くん!!」

手を振って走ってくる圭一に同じく手を振って答えるレナ。

肩で息をしてようやく追いついた圭一。

「悪い悪い、寝坊しちゃった。待ったか??」

急いできたのだろう、服装が乱れていた。

直しながら謝る。

「もう圭一くん、時間ぎりぎりなんだよ。だよ」

少し怒りながらレナが言う。

「すいませんと謝る圭一。」

そうしてゆっくりと歩き始める2人。

周りから見れば恋人同士に見えるだろうが、まだ彼らはそんな仲ではない。

圭一くんこと前原圭一はここ1週間のうちにここ雛身沢村に東京から転校してきたのだ。

理由は定かではないが、それを無理やり聞きだすことはなかった。

「圭一くんはもし私が後れても待っていてくれるのかな??かな??」

ためしに聞いてみるレナ。

しかし返ってきた言葉は意外なものだった。

「その時は置いてく」

レナは驚いた表情になる。

せっかく自分が待っていてあげているのにそれはないと悲しくなる。

さらに圭一は追い討ちをかける。

「さくさく置いてく、きりきり置いてく」

「どうしてそんなにいじわるなのかな……。かな……。」

レナは今にも泣き出しそうな悲しそうな顔をする。

しかしそんなレナの頭にぽんと大きな手のひらが置かれた。

圭一の手だった。

「そんなわけないだろ??レナのことだったらずっと待ってるさ」  
にっと笑って頭をくしゃくしゃと撫でる。

いきなりなことにワタワタと焦るレナ。

顔が少し赤くなっている。

「ハウ、そんなに強くしないでよ」

はははっと笑いながら待ち合わせの場所に急ぐ二人。

そんな二人が向かったそこには四人の中学生らしき人たちが待っていた。

「おはよう圭ちゃん、レナ。今日も仲良く登校焼けますね」

魅音が親父くさく二人を冷やかす。

「ハウ、魅いちゃんあんまり恥ずかしいこと言わないで欲しいかな。かな」

レナが顔を真っ赤にさせながら言う。

相変わらずの赤面症だと圭一は思う。

「アハハ、相変わらずレナの反応はオーバーだな」

魅音の後ろで笑っているミサキ。

いつもの茜色の髪留めが太陽に輝いていた。

そんな様子を本を少しずらしてみているのは涼子だ。

相変わらずオカルトの本にかじりついている涼子を隣で眠そうにしている祐樹が話しかけた。

「相変わらずオカルト好きだね。お前。そんなの実際にあるわけ？？」

からかい半分で言ってみる。

「オヤシロ様……」

ぼそりと涼子がつぶやく。

その言葉に圭一以外がびくつと反応した。

「涼子ちゃん……その話は言わないって約束だよ……。よね」

みんなうつむいていると、レナがボソツと言った。

そんな彼らの反応人？？っと思ってしまう圭一だが、時間が押していることもあって急いで学校に向かった。

そして着いた教室の前。

しかし彼らはすぐには中に入らなかった。

否は入れなかったのである。

これから始まるであろう少年と少女との一騎打ちを邪魔するわけには行かなかったからである。

「よし私は紗都子が勝つのに百円!」

魅音が元気よく拳を上上げる。

するとほかの仲間も紗都子が勝つのに入れた。

これでは損得がないのでは??俺が勝つ期待は0ですかと圭一は心の中で泣きながら思っていた。

「まあまあ圭ちゃん、勝つたら次は圭ちゃんに入れてもいいよ」

ニヤニヤと肩に手をかける魅音。

どこか自分に被害が出ることを楽しんでいる表情だと圭一は思った。

「ハウ・・・、ごめん圭一くん。別に圭一くんが頼りないなってわけじゃないんだよ。だよ」

レナが申し訳なさそうに言うてくるものだから、思わず圭一はああ、別にいいさつとあっさりと言ってしまう。

そんな様子をつまらなさそうに見る魅音。

「まあまあ、圭も早く入らないと先生に怒られるよ??」

「何だよミサキ、まるで俺に早く被害にあえって言ってるもんだぞそれ」

「男は黙って突撃すればいいんだよ圭」

祐樹に背中をバシッと叩かれ仕方ねえなあっと言つとガラツと戸を開けた。

愛殺し編 1 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

## 愛殺し編 2

「第一の関門・・・チヨークの粉が入った箱。

「これは初日からの王道だな」

それを軽く避ける圭一。

しかし目の前には机を使った仕掛けられた引っ掛けロープが。

第二の関門・・・引っ掛けロープ。

「昨日のようにには行かないぜ」

それをひょいっとジャンプしてクリアする。

「なっはっはっは！！どうだ紗都子こんなお子ちゃまのトラップなんだ、男前原圭一様にかかれば赤子の手をひねるようなものだってボババハア！！」

腰に手を置いて叫んでいる圭一の顔面にクリティカルヒットするゴムボール。

食らった圭一はそのまま後ろに倒れてびくびくしている。

おーほっほっほっほ、何が赤子の手をひねるのです圭一さん。わたくしのトラップを掻い潜れるのは誰一人としておりませんのよ」

「さーとーこー！！今日という今日は許さん！！」

鼻血を出しながら立ち上がった圭一。

そのまま紗都子の方に走り出した。

血だらけの男が自分に走ってくるのである意味ホラーであった。

「イヤー来ないでくださいましー!!このケダモノ!!」  
「誤解を生む発言はするな〜!!」

圭一は叫びながら紗都子のことを追い掛け回す。

「みー。紗都子と圭一は今日も仲良しなのです。でも紗都子はもつと素直になるべきなのです」

突如として入ってきたのは梨花だった。

圭一と紗都子の間に入って仲介役を買って出た梨花。

紗都子に向き直っていい、いわれた紗都子は顔を真っ赤にして逃げる梨花を追いかける。

「なんでわたくしが圭一さんに素直にならなければいけないのですの??待ちなさいなのですわ〜梨花」

「みー。僕は嘘は言ってないのです。にばー」

そんな二人の追いかけてこをレナがハンカチをぬらしてきたものを痛む箇所当ててみていた。

「はいはい皆さん。そろそろ朝のホームルームを始めますよ」

知恵先生が入ってきたので朝のどたばた騒ぎは終了した。

そんな日のお昼の時間。

みんなで机をくつつけあって弁当争奪戦が始められようとしていた。

皆々すごいとしかいえない弁当を開いていた。

手作りもあれば家柄どおりのすごいものもある。

しかしそんな中に圭一のだけがなぜかカップラーメンだった。

休みになるや否やすぐに職員室にかばんを持って走って生きお湯を入れたカップめんを持って戻ってきたのだった。

「圭一くんどうしたの今日は??」

レナが自分の弁当からおかずをふたに移しながら言う。

それを圭一が受け取りながら答える。

「親が仕事の都合で東京に行ってるんだよ。だから昨日からいなくてな。夜は作り沖があったから助かったんだけど麻からは自炊だったんだよな」

やれやれという顔をしながらカップめんを食べる。

いつもは奪い合いが起きるがさすがに少ない圭一のラーメンを奪う

気にはみんなななかつた。

魅音たちからも貰いながら圭一は話す。

「俺実際自炊できないから今日の夜もカップめんになるかな？」

「うゝ両親はいつ帰ってくるの圭ちゃん??」

「あゝ・・・1週間後だったかな??やばいな・・・一週間もカップめん生活になるな・・・」

まさかの事態に気がついた圭一はがっくりと肩を落とす。

そんな圭一の頭を撫でながら梨花が。

「かわいそかわいそなのです。栄養不足で倒れないでくださいなのです圭一」

「さりげなく怖いこと言わないでくれないか梨花ちゃん」

何のことだかという顔をする梨花。

そんなこんなで昼休みは終わり、午後の授業へと時間が流れた。

そんな学校が終わり、現在は夕方六時。

スーパーマーケットに紗都子と梨花が買い物にきていた。

食料が残り少なくなってきたので購入しに来たのだった。

「これだけ買えばしばらくは持ちますわね」

小さな体の彼女たちが二人係でやっとの力で持ち上げることができ  
る量を入れたかごをレジに向かって持ってきていた。

「「あ……」」

二人が同時に見てしまい、すっとんきょんな声を出してしまった。

その光景を見せた本人こそ……大量のカップめんを購入する学校  
の先輩前原圭一だった。

そんな彼に呆れた紗都子がドカツとかごを置くと圭一に近づいてい  
く。

「圭一さん?? 一体何をしていますの??」

突然現れ、声をかけられたためびっくりする圭一。

「うわぁ!! 何だ紗都子か」

「なんだとはどういうことなの!!」

「いきなり現れたんだから仕方ないだろ??」

「きー!! なんだか小物扱いされている気がして気に入りませんわ」

売り言葉に買い言葉。

彼らの言い合いは三十分近く繰り広げられた。

しかし見かねた梨花が仲介に入ってようやく治まったのだ。

「全く二人とも見ているこちらが恥ずかしくなったのです」

全くと腕を組みながら言う梨花に向かって二人は申し訳ないと言うしかなかった。

「そんなことよりも圭一さん。本当にカップめんだけで乗り切ろうと考えていますのね」

呆れたように言う紗都子。

頭を掻いて苦笑いしかできない圭一。

「そんなこといわれても俺自炊できないからな・・・」

まさに絶望に浸っている圭一、そんな哀れな姿を目の当たりにしている二人。

二人でどうするか目を合わせるとそれしかないと嘆息する。

「みー。仕方がないのでぼくたちが圭一のご飯を作ってあげるのです」

口火を切ったのは梨花だった。

それを聞いた圭一はまるで陸に上がった魚が水を得たかのように生き生きとした笑顔を見せた。

「しょうがありませんの、私たちが恵一さんの家に泊り込みでご飯を作って差し上げますわ」

さらに詳しく話す紗都子。

「本当にいいのか??そうしてくれると嬉しいし、助かるよ」

「それしかないのですよ。ぼくたちも圭一がいないと部活ができなくなりそうです」

それを聞いた圭一は俺って部活よりも価値がないのかと悲しくなつた。

そんな封に涙を流している圭一を狙ったかのように撫でている梨花。

「そんなことをしていないで早く圭一さんの一週間分の食糧を買いますわよ」

紗都子に諭され二人はのっそりと立ち上がり、色々なコーナーを回って買い物を楽しんだ。

愛殺し編 2 (後書き)

コメント待ってます!!

そしてレジにそれぞれの買い物籠を持って会計を済ませようとした。

「あー!!」

紗都子が財布から小銭を落としてしまい、周りにころころと転がってしまった。

それを見た圭一と梨花は慌てて紗都子と一緒に集め始めた。

しかし圭一がよく見ると周りにはまだたくさんの人がいるというのに見ているだけで誰一人として手伝うことをしない。

だんだんいらいらしてきた圭一はとうとう痺れを切らす。

「おいお前たち!!」

圭一が立ち上がりながら声を張り上げる。

その声にびくつと反応する周りの大人たち。

紗都子と梨花も圭一を見上げていた。

「なんで紗都子が落とした小銭を拾ってやらねえんだよ!!困ってるんだから手伝うことぐらいできるだろ??」

しかし圭一の言葉に誰一人何も言わない。

それがさらに圭一に火をつける。

「紗都子何か悪いことでもしたのか??こんな小さな女の子をい  
い年こいた大人が弱いものいじめですか??そんなことでよく俺達  
子供に説教できますね!!いじめは良くないと!!」

止まらない圭一を梨花と紗都子が宥める。

「圭一、今ここで何を言っても無駄なのです。それより早く帰るの  
です」

「梨花ちゃんは悔しくないのか??自分の友達がいじめられてるん  
だぞ!!」

怒りが収まらない圭一。

「圭一さん!!私のことはどうでもいいのですわ。こんなことで圭  
一さんの評判を落とすたくはありませんの」

会計を追えた紗都子が買い物袋をもって同じく宥める。

「紗都子!!おまえは・・・」

しかし圭一の言葉はそこで止まった。

睨みつけた先の紗都子の目が早く帰ろうといていたのだ。

「くそ・・・!!」

圭一は捨て台詞を残すと乱暴に自分の買い物袋を持って外に出た。

外に出た圭一はようやく頭が冷静になってきた。

「ごめんな二人とも……。どうやら俺カッとなってた」

申し訳なさそうに言う圭一。

しかし梨花と紗都子はそんな圭一を攻めることはなかった。

「圭一は紗都子のためを思ってやったことなのです。ぼくなんてそんなことしたくてもできないのです」

梨花はむしろ嬉しそうであらやましそうだった。

「圭一さん……。私のためにしてくれたのはうれしいのですが、そんなことで圭一さんに悪いことがあれば逆に私のせいだと思ってしまいますので今後はそのようなことはしないでくださいまし」

紗都子は懇願するように言ってきた。

そういわれると圭一もないがしろにすることはできなかった。

「分かったよ……。今度は注意する」

それを聞いて安堵する二人。

「でもこれだけは約束してくれ紗都子……」

真剣な目をした圭一。

そんな圭一をじっと紗都子は見ていた。

「何か困ったことがあったら必ず俺に言え。できる範囲で力になるから」

紗都子の肩をつかんで言う。

加えられた力が強かったのか、少し表情をゆがませる紗都子。

すまないと急いで謝る圭一。

大丈夫ですわっと片目をつぶって微笑む紗都子。

しかし心では先ほどのことをどう感じているのだろうかと圭一は心配だった。

「みー……、圭一は僕のごことは守ってくれないのですか」

梨花が悲しそうな瞳を見せて言ってくる。

うっと唸った圭一はすぐに。

「もちろん梨花ちゃんの相談にも乗るさ」

「良かったのです。にばー」

やれやれと圭一たちは自分たちの自転車に乗り前原家へと帰っていた。

愛殺し編 3 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

三人は自転車に乗り圭一の家に来ていた。

中に入ると紗都子と梨花は絶句した。

台所の流しには食べたままの皿やらカップめんが散乱しており。

一応自炊したのかなべが黒い液体をぶかぶか浮かべた状態で放置されていた。

「圭一……一応聞きますけどこれは一体どうい子となんですか??？」

引きつった表情を見せながら梨花が聞く。

圭一はうなだれながら事の成り行きを説明する。

まずは機能は何かあった夕食も今日は親がいないのでどうしようもなかった。

だから自分でやってみようと炊飯器をセットしたのだがボタンが分からず断念。

だからその中には編めた状態の米が入っているということだ。

開けたくないと思つた紗都子と梨花は思う。

さらに仕方なくスープでも作るかと思つてなべに色々入れたのだが

突然炎が舞い上がり慌てた圭一がところにあるものをぶちまけてしまい中に混入、さらに燃え上がる炎に水をぶっ掛けたために回りに黒いものがこびりつき、まだなべの中には致死量数ミリグラムの毒薬が入っているわけらしい。

誰も挑戦しようとは思わないだろうと二人は思った。

そうして最低限の掃除を終えた圭一は仕方なくスーパーにカップめんを買いに行ったわけらしい。

「あきれるとしか・・・」

「いえませんの・・・」

「帰す言葉もありません」

年下二人に飽きられる年上の圭一。

仕方ないと掃除を始める三人。

二人に指導されながら圭一も手伝いをする。

かれこれ一時間かけてようやくきれいになった。

それでは夕食作りだということで圭一は台所から締め出された。

「兵器を作られたらたまらないのですよ。にぱー」

梨花ちゃんの恐ろしい言葉に圭一は黙って従うしかなかった。

コトコトと料理が作られている音が聞こえてくる。

なんとも家庭的だと感じている圭一。

そして二人にはもう親がいないのだということ思い出す圭一。

何とか二人で支えあっているんだなあっと感心するしかなかった。

退屈しのぎにテレビを見ていてもたいそうなことはやっていなかった。たので切ってごろごろとソファアーに寝転んでいた。

しばらくしていい匂いがしてきた。

すると我慢できなくなったのかお腹がぐぐつと鳴った。

「お腹すいた〜」

まるで子供のように言う圭一。

「もう少しでできますので圭一さんはテーブルでも拭いていてくださいまし」

紗都子に指示されたとおりにテーブルを丁寧に拭いていく圭一。

そんなときにも次々に出来上がった料理が乗せられていった。

圭一に見ればどれも小学生が作ったのとは思えないほどのご馳走だった。

「それでは食べようなのです」

梨花の言葉に続いて。

「……いただきます」「」

三人の元気な声が響き渡った。

そして翌日、圭一は二人が作ってくれた朝食をとってから支度をしいつもレナと待ち合わせするところに急いだ。

いつもは待たせている圭一だが、今日は二人がいるために遅れることはなかった。

まだレナがきていなかったので、しばらく待つことになった。

しかし紗都こと梨花はトラップを仕掛けるからと先に学校へ向かってしまった。

こんなに早く出るのはいつもトラップを仕掛けているからかと圭一は納得しつつも、今日も恐ろしいものと戦わなくてはいけないのかとため息をついていた。

待っていると向こうからレナがやってきた。

「あれ???圭一くん珍しく早いんだね。だね」

驚いた表情のレナ。

いつも待たせている圭一が始めて自分のことを待っていてくれたので驚きながらも、心の中では嬉しく思っていた。

「まあな、昨日から紗都子と梨花ちゃんにご飯作ってもらってな。今日も早く出てくれたのは二人のおかげってわけ」  
なるほどと納得するレナ。

昨日の失態話を聞かせながら歩く二人。

聞いているレナは腹がよじれるほど笑いながら圭一を真っ赤にさせていた。

ようやく着いた待ち合わせ場所にはいつものメンバーが集まっていた。

魅音が顔が真っ赤のレナに気がついた。

「何レナお腹抱えてるの???まさか圭ちゃん・・・レナに何かしたの??」

深刻な顔をしながら聞いてくる。

「な!?何バカなこと言ってるんだよ。ただ昨日のことを聞かせただけだよ。そしたらレナのやつが大笑いしやがって」

ワタワタと弁解する圭一。

同じく昨日の話聞いた魅音たちは腹を抱えてレナ同様に大笑いした。

涼子でさえ本に顔を隠して震えていたのだから。

しかし一人だけ面白くないという顔をしたやつがいた。

「気に食わんな圭一……。うらやましすぎる……」

祐樹だった。

御三家候補の大葉家の跡取り息子。

勉強はからつきしだが運動能力は魅音の上をいき、カアイイモードのレナに負けじとも劣らない。

「紗都子と梨花に何もしてネエだろうな……。あの純粹無垢な2人を……」

顔をズイッと近づけて言う祐樹。

圭一は冷や汗をかきながらも何もしていないと首を横に振って否定した。

祐樹はある意味口コソなので紗都子と梨花には目がないのである。

そんな2人が年上の圭一の家泊まって一晩を同じ屋根の下で過ごしたとなると自分がのどから手が出るくらいにほっしているシチュエーションにいるのだからこうなるのは当然である。

そんな祐樹を4人の少女たちは数歩引いたところで見ていた。

「何もしてねえって言うならこれ以上は咎めネエ……」

圭一を解放してから学校へと向かい始める祐樹。

そしてくるりと振り返ると。

「さっき聞いた失態話、最高におかしかったぞ。俺だって料理くらいできるぞ」

「んだとおおおおおお！！祐樹いいいいいい！！！！」

「あはは、悔しかったら追いついてみるってんだ」

「んなろおおおおお！！待ちやがれえええええええええ！！！！」

最後は挑発して、怒った圭一が祐樹を追いかけるといふ形になった。

その後の話だが、勢い余って教室にダイブした圭一はトラップにすべって引っかけかり、大失態を再び犯してしまった。

愛殺し編 4 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

## 愛殺し編 5

そして圭一と紗都子・梨花の三人の生活はあっという間に最終日になってしまった。

最後の夜だということでも圭一は親が置いていったお金を奮発して大きな肉を購入した。

それを2人が御馳走に変えてくれたのだから美味しくはないわけがなかった。

終始圭一は美味しいを連発して、二人を笑わせていた。

そして彼らは最後の日だということでも三人で寝ることになった。

普通なら怒られるものだろうが圭一が何もしないということでもなされることになった。

紗都子と梨花にとってもこの前原家での三人での生活は楽しいものだった。

特に紗都子は久しぶりに兄と一緒にいるという感じていた。

もちろん実際の兄ではないが、紗都子にとっては圭一という存在はもう一人の兄だったのだ。

疲れてしまったのか、今日の罰ゲームでコスプレをさせられて周知で顔が真っ赤になりながら村を走った圭一はすでに眠っていた。

そんな圭一を真ん中にして両脇に寝ている紗都子と梨花はまだ起きていた。

「もう明日からはまたあそこに戻るのですね」

「みー……。ちょっと寂しくなりますです」

二人にとって圭一と過ごした一週間はかけがえのないものになっていたのだった。

しかし終わりは必ず来る。

それに梨花にとって大きな大役がある綿流しが近づいていた。

練習はしていたがそろそろ本番さながらにやる必要があり、舞台も着々と出来上がってきていた。

さらに彼女たちにとって綿流しとはいい思い出だけではなかった。

両親がその日に三年つづけて亡くなっていたのだ。

そんな不安を今まで2人だけで感じていたがこのときだけは彼女たちのとって大きな存在で薄めることができた。

特に紗都子にとっては今は行方不明の兄が隣にいる感じだった。

こんなときだからこそ人のぬくもりを求めた。

恥ずかしさも会ったが圭一の腕を抱きしめて眠りにつく二人だった。  
。。。

そして綿流しが近くなったある日。

圭一は父親に代わりに祭りの手伝いに行くようにといわれた。

祭りが好きな圭一は積極的に働きかけて皆に感謝されていた。

そんな仕事が一段落して休んでいたら後ろから話しかけられた。

「圭ちゃん精が出るね〜」

魅音だった。

「よお魅音。お前もたしか実行委員だったっけ??」

「そうだよ、さっきまで話し合いがあつてね。色々議論がされてもう疲れちゃったよ」

圭一の隣のベンチによいしょと腰を下ろす魅音。

今は和服姿なのでいつもの彼女とはまた違った女性らしさというか清らかさが前面に出されていた。

「圭ちゃんどうしたの??顔が赤いよ」

そういわれるとなんだか顔が熱いと感じる。

しかしその理由は彼にはわかっていた。

「別にたいしたことないんじゃないか??あはは」

とぼけるように言ってみる圭一だが。

「はっはっん。もしかしていつもとは違うおじさんの姿の欲情したとか??」

「な!?!」

あながち間違いではないことを言われて思わず叫んでしまう。

「え???そうだったの??」

魅音自身も試しにいつてみたことがたまたま当たったために驚いている。

その場を通る人たちがなにやらニヤニヤと圭一と魅音の並んだ姿を見ている。

そしてそこに。

「あれ???魅音と圭一君じゃないかい。どうしたんだいこんなところで二人して」

「おお母さん???」

前に現れたのは魅音の母親の園崎茜だった。

同じく黒の和服を着ている彼女は誰が見てもきれいというしかなかった。

同じくジーっと見ている圭一に気づいたのかにっこりと笑いかける

茜。

「圭一君そんなに私のことを見ないでくれるかい？？見るなら隣の魅音でも見ておくれよ。今日だってこれ着ていくの躊躇してたんだからさ。今後めつたに見れないかもしれないよ」

「ちょっとお母さん！！」

いきなり恥ずかしいことを言われて思わず叫んでしまう魅音。

それじゃあつと軽くあしらわれてしまった。

「なんだかすごかったな・・・」

突然現れて突然去っていった茜。

彼らにとっては嵐だった。

「そうだね・・・」

まだ顔が赤い二人。

「お腹すいたな・・・」

なんだかんだ言って働き続けてもうお昼を少し過ぎていた。

魅音同じらしく、今朝は忙しいあまり余り口にしていなかったらしい。

「うちに来る??何か用意できると思うけど・・・」

突然爆弾発言をする魅音。

本人も顔を真っ赤にさせていた。

しかしお腹は素直だった。

逆らうことができない圭一は言葉に甘えるかのように魅音の迎えに  
来ていた葛西の車に乗って園崎家に向かった。

愛殺し編 5 (後書き)

コメント・評価随時待ってますのでよろしくお願いします!!

## 愛殺し編 6

そして今日は待ちに待った綿流しの日。

部活メンバーで大はしゃぎする日でもあった。

早食い競争では圭一が熱々のたこ焼きを一気にほおばって大変なことになるし、全員がカキ氷一気をしてのた打ち回るという醜態をさらした。

そうして現在は射的に講じていた。

「さあ今度は射的だよ。誰が一番の大物を取れるか競争だよ〜!!」

『おお〜!!』

七人が歓声を上げる。

じゃんけんで紗都子・魅音・ミサキ・梨花・祐樹・涼子・レナ・圭一となった。

「おーほっほっほ、こういうの慣れが肝心ですから圭一さんにはちよっと難しいかもしれませんわね」

「なんだと紗都子〜!!そんなに言うならとってみるよ〜」

「おい圭一、紗都子をあまりいじめるな」

「なんだと祐樹、俺はただ紗都子を挑発してるだけだ。いじめてる

のではない」

「まあまあ、そんなにムキにならないの二人とも。特に祐樹・・・あなた紗都子が好きだからってあまり過保護すぎない??」

「そんなことはない。これは兄として当たり前・・・すまない」

途中で祐樹の言葉が止まった。

なんだか周りの雰囲気も一気に悪くなったのを圭一は感じていた。

さらにこの感じについていけない自分がなんだか取り残されている感じがしてならない。

「どうしたんだみんな・・・いきなり暗くなったりして・・・」

ついていけないことにもどかしくなった圭一が口を開く。

しかし誰も何も言わない。

紗都子が無言のまま射的を始めて小さなぬいぐるみをとった。

「おほほ・・・ざっとこんなものですわ」

取ったはいいが声に元気がなかった。

紗都子に続いて魅音・ミサキ・梨花・祐樹・涼子・レナが打ち落とすしていく。

しかし喜びは小さなものだった。

こんな状態では店をやっている人も気の毒だろうと思った圭一は。

「何うじうじしてんだよお前ら!!」

圭一の声にみんなが振り向く。

「よくみてるよお前ら!!前原圭一様がどでかいものをとってやるぜ!!オツちゃん!!拳銃二丁頂戴!!」

いきなり大声で言われた店の人は驚きながらもお金を受け取って拳銃を渡す。

一本を取って圭一は狙いを的に向ける。

狙いは大きな熊のぬいぐるみだった。

まずは二丁目が発砲された。

しかし弾は当たってもぬいぐるみは倒れることはなかった。

「圭ちゃん、あまり無理して大物狙わなくてもいいんだよ」

「そうだよ圭一くん、みんな手ごろなものしか取ってないんだし」

レナと魅音が心配そうに言うが圭一はまったく聞く耳を持たない。

二丁目に手をかける。

「最初から無理だというなよな……。お前たちがそんな運命だと

「いつなら俺はそれに抗うぜ」

よく見るとわずかにぬいぐるみが傾いていた。

ぬいぐるみの足に先ほど発砲されていた弾が傾きを作っていたのだ。  
った。

そして圭一は熊の額に狙いを定めると連続で発砲する。

三発の弾がすべて額に当たりぐらりとぬいぐるみが揺れるとそのまま下に落ちた。

『おお！！』

元気のなかったメンバーから歓声が上がった。

しきりにすごいやらマグレだとかが聞こえてきた。

ぬいぐるみを店の人から褒められながら渡された圭一は鼻高々だった。

「この競技の勝者は圭ちゃんで文句ないね」

魅音の言葉にみんなは反対しなかった。

そして圭一はぬいぐるみを持って紗都子の前に立った。

「なんなんですの圭一さん。確かにあの時言ったことは謝りますわ。  
圭一さんも意外なことがお得意なのですわねてキャワ！！」

突然かわいい悲鳴が聞こえたと思ったら圭一が紗都子に大きなくまのぬいぐるみを押し付けていたのだった。

「どうしてこれを・・・??」

突然のことに驚いている紗都子。

「さっきお前が突然元気なくなっただろ??俺は来たばかりだからみんなが知ってることも知らない。それに聞いちゃだめなことかもしれないし、お前にとっては辛いことかもしれない。それをほいほい聞くような男じゃねえよ。だったら元気になってほしいからこれを上げるってわけ。ふう・・・、結構集中するのは疲れるんだよな」

くるりと背を向けて圭一は魅音に何か買ってくるといって走っていった。

紗都子は渡されたぬいぐるみをじっと見ていた。

そして渡された時の感覚を思い出す。

(にーにーから貰った感じがしましたのですわ・・・)

今は行方不明でない悟史がいたような感覚を感じていた。

そんな様子を見ていた梨花。

「圭一も無意識のうちにやってくれるわね・・・」

いつもとは全く違う口調の梨花がそこにいた。

そしてその後は梨花の演舞とミサキが清めの矢を射るのを見たメンバーは解散することになった。

圭一が自転車にまたがり帰宅しようとする後ろから声をかけられた。

「圭一さん……」

「紗都子???」

そこには大きな熊のぬいぐるみを抱えた紗都子がたっていた。

なんだろうかと圭一が待っていると。

「今日は……これを取ってくださいましてありがとうございますわ……」

小さな声で感謝の言葉を言う。

そんなしおらしい紗都子の姿がなんだか痛々しかった。

自分には言えない大きな悩みを抱えているようで。

それは聞きたいが人の心に土足で入っていくことはしたくなかった。

だからそつと手を頭に乘せて優しくなでてやった。

「ふえ???」

すつとんきよんな声をあげる紗都子。

突然のことに驚いているのだった。

「お前も少しはかわいげが出てきたな」

にししと笑う圭一。

「きー！！ちよつと感謝してみれば圭一さんはすぐに図に乗りますの」

なでられて頭に手を乗せて顔を真っ赤にさせた紗都子が言う。

しかしそんな顔で言われても迫力は皆無だった。

圭一はペダルに足をかけて。

「それはずっと大事にしてくれよな」

そう言い残して帰っていった。

そこに後ろでかたづけに精を出す村人たちの声を聞いてぼつんと立っている紗都子がいた。

愛殺し編 6 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

次の日の朝、雛身沢村を震撼させる事件が発覚した。

富竹ジロウと鷹野三四が亡くなったというのだ。

またしても起こった怪奇事件

そのまたという言葉をつつかり魅音がこぼしてしまった。

「魅音……そのまたってどういうことだ??」

圭一が聞いてくる。

彼はここに来てだいぶ経ったがまだそれについては知らなかったのだ。

知らされていないのだから知るはずもない。

彼に雛身沢村を嫌いになって欲しくなかったための彼女たちなりの気遣いだったのだ。

「そんなことでこんなすばらしい村を嫌いにはならないさ」

去年までの事件を聞いた圭一が開口一番で言った。

「でももっと早く教えて欲しかったな、思わず仲間はずれにされているのかと思ったぞ」

「ハウ・・・別に圭一くんを仲間はずれにしたかったわけじゃないの・・・。それだけは信じてね」

レナが急いで弁解する。

他のメンバーも申し分けなさそうだった。

「大丈夫だよ。信じるさ。そんなに簡単に終わるような関係じゃないだろ??」

にかりと笑って言う圭一。

よかったという安堵の表情の魅音たち。

今日も元気に登校した。

そして着いたのは教室前。

今日も紗都子のトラップがあるのだと警戒する圭一。

そして覚悟を決めた圭一は勢いよくドアを開ける。

「今日こそ俺の勝ちだ紗都子!!」

中に入ったはいいが何も起きずに痛い沈黙が流れる。

「これは一体・・・どういうこと??」

紗都子のトラップがなかったのだ。

それに彼女の姿もなかった。

「紗都子ちゃんいないの??」

ミサキが地殻の小学生に聞いたがまだ来ていないらしい。

よく見ると梨花だけがぼつんと座ったまま動かなかった。

不思議に思ったレナが近づいて聞いてみる。

「おはよう梨花ちゃん。紗都子ちゃんどうしたのかな??かな??」

「紗都子は今日は風邪で休みなのです」

小さな何とか聞き取れる声だった。

レナはまだ何かありそうだと言う顔をしていたが、梨花の状態からこれ以上聞き出すのは酷だと判断したのだろう、戻ってきた。

「紗都子ちゃん・・・風邪らしいよ。心配だね・・・」

「なんだと・・・俺の紗都子が??」

意味の分からないことを言っている祐樹は無視して話し合いは続く。

「放課後の部活は無しだね」。その時間使って紗都子のお見舞い以降かみんなで」

魅音が提案したところで。

「それはいいのです。みんなに移るとだめだと紗都子も言ったのです」

梨花が急に拒否してきた。

「大丈夫だよ梨花ちゃん。俺達そんなに簡単に風邪引く体はしてないぜ」

「そうだけ梨花ちゃん。紗都子が風邪だったら俺が行かなくてどうする。兄代わりとしての俺が」

圭一と祐樹が大丈夫だと聞かない。

しかしうつむき加減で聞いていた梨花は。

「いい加減にして欲しいのです！！僕がいつって行ってるんですからこなくていいのです！！」

学校中に響き渡る。

バタバタと知恵先生が走ってくる。

「何ごとですか??」

レナとミサキが紗都子の休みと放課後のお見舞いについて話していたと言っ。

「分かりました。古手さんがいいと言っているので無理して押しかける必要はありません。また日を置いていくようにしてください」

知恵先生によって話し合いは閉められてしまった。

しかしまだ納得が行かない様子の祐樹と圭一。

そんな二人を見てカレーのお話でもと迫ると、おとなしくなった。

そんな陽気な皆を見ながら梨花はただ一人で思い悩んでいるのだった。

紗都子に起こったことを……。

愛殺し編 7 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

紗都子が来なくなってから3日。

部活も行われることなく放課後が迎えられた。

「興も部活無しなのか魅音??」

圭一が退屈そうに言う。

皆もそんな感じであった。

しかし魅音は紗都子の席を見ながら。

「紗都子がいらないんじゃないかあね。部活の決まりからしてみんなが集まらなきゃやらないって決めてるから」

「そうか。つまんねな」

かばんを持って圭一は教室を出て行く。

「ちょっと圭一くん、待ってよ」

レナも急いでそれに続く。

「ごめんね、私手伝いあるから」

ミサキが手をあわせて謝る。

魅音は仕方ないよ苦笑いを浮かべて教室を出る。

それに続くミサキ。

涼子もゆっくと立ち上がると梨花と祐樹に挨拶すると返っていった。

夕暮れの教室にひぐらしの鳴き声が響く。

その場に居合わせているのは梨花と祐樹だけだった。

いつまでたっても帰らない梨花を心配する祐樹。

「梨花ちゃん・・・帰らないのか??」

しかしうつむいたまま何も言わない梨花。

どうしていいやら頭を掻くしかできない祐樹。

「紗都子の風邪・・・そんなに悪いのか??」

首を振るだけの梨花。

先生たちも帰りの準備を始めている頃だろう。

そろそろ帰らなければいけない。

それでも立ち上がらない梨花。

「俺達に言えないことでもあったのか??」

びくりと小さな体が反応したのを祐樹は見逃さなかった。

「なんでいえないんだ??」

「それは・・・」

ようやく出た言葉には力がなく、今にも消えそうなもの。

もはやあきらめた感じがあった。

「言ってみるよ梨花ちゃん。俺達でできることかもしれないしね」

どんと来いと構える祐樹。

「それは・・・」

「ん??」

中腰になって梨花と同じ目線に立つ。

そしてようやく顔を上げた梨花の瞳には大粒の涙があった。

しかし梨花は泣いてしまかなか口から言葉が出てこない。

「梨花ちゃん・・・」

祐樹は困惑するも、すぐにただ事ではないことを確信する。

しかしこのままでは先生が着て、さらに話しづらくなってしまつ。

だから祐樹は梨花の手をとってかばんを持ち、外に出た。

二人並んで帰宅の途につく。

夕暮れの空には赤とんぼが飛び交い、ひぐらしの大合唱が響く。

幸運にも村人には会うことがなかった。

あつたら血相を変えて飛んでくるからだ。

そして二人がたどり着いたところは古手神社だった。

「ここなら誰にも聞かれないぞ」

二人は境内に座り、やや暗くなってきた雛身沢村を見ていた。

そして隣に座る梨花に向かって優しく語りかける。

梨花はもう泣き止んでいるが、泣いたためか目は赤かった。

「話してみるよ、梨花ちゃん。辛いことは一人で抱え込まない。誰かに相談しなきゃな」

にっこりと笑いかける。

梨花はそれをぽかんとして表情で見っていた。

いつもは梨花や聡子にいやらしい???目を向けている祐樹だが、今

はそんなではなく本気で梨花と紗都子のことを心配してくれている。

「嘘だと思わないで聞いて欲しいのです・・・」

ようやく言う決心がついたようだった。

「

」

梨花が祐樹にとって衝撃的なことを言い放った。

「まじかよ・・・」

愕然とするしかなかった。

まさかのことが紗都子に降りかかっていたのだ。

そして梨花の頬が赤くはれているのは今朝方言った転んだためではなく　のためだったのを祐樹は確信した。

「紗都子を救いたいとは思っています・・・。でもみんなを危険に巻き込みたくなかったのです」

だんだん涙声になってきた梨花。

そんな梨花を祐樹は優しく抱きしめてあげた。

年相応に小さく華奢な体。

髪の毛からは甘い香りがした。

しかし今は堪能している場合ではなかった。

今時分の胸で泣いている女の子を泣かせたやつを、紗都子を泣かせたやつを祐樹は許せなかった。

心の中で思った。

コロシテヤルト……。

夜の闇が雛身沢村を包むとき、ひぐらしの合唱は消えていた。

愛殺し編 8 (後書き)

コメント評価待ってます!!

次の日祐樹と梨花は皆に昨日はなしたことをすべて話した。

「紗都子が学校を休んでいるのは梨花ちゃんが言った風邪だからじゃない。紗都子のおじがここ雛身沢に帰ってきたんだ。それで紗都子は奴にいいように使われてもう精神がズタボロだそうだ」

祐樹の言葉に誰もが愕然としていた。

紗都子のおじを知らない圭一も、皆の反応からこれはやばいことを感じていた。

梨花の話によると1週間前から帰ってきて、紗都子が家にもものごとりに言ってくるといつてなかなか帰ってこないことを不振に思った梨花が言ってみると男性の罵声が聞こえたらしい。

恐る恐る言ってみると中からけりだされる紗都子と紗都子をけった男・・・北条鉄平がいたらしい。

そのときのことを梨花は思い出していた。

夕方5時に家を出てかあらもう3時間はたっていた。

夕食の準備はできているというのに全く帰ってくる気配がない。

「道にでも迷ったのかしら・・・ね」

いつもとは違う素の古手梨花の口調。

ここにトラップを仕掛けて、すべてを熟知している紗都子が迷うはずがなかった。

だから紗都子自身に何かが起こったとしか考えられなかった。

「紗都子……。一体どうしたの??」

急いで外に飛び出し、北条家に走った。

暗い夜道だが、月の光が外灯代わりになってくれていた。

「まさか……まさか……あいつが??」

嫌な予感が近づくにつれて強くなる。

「そんなことはあるはずがない……。あつてたまるか……」

浮かんでくる最大の恐怖をかき消しながら走る。

見えてきた北条家。

言えにはなぜか明かりがついていた。

「紗都子……」

ゆっくりと家の玄関に近づく。

するとものすごい足音が聞こえ、いきなり玄関が開けられた。

そして外に放り出されたのは。

「紗都子!!」

体中に殴られた後が見える紗都子だった。

そして恐る恐る顔を上げるとそこには悪魔のような笑みを浮かべた男が立っていた。

「北条・・・鉄平・・・」

にやりと笑うその男は梨花に向かって。

「おおおう梨花ちゃんじゃないか。うちの紗都子が世話になったな」

こいつはこんなことを言うやつではない。

そう梨花は思った。

「紗都子はこれから俺とここで暮らすことになるからよ。でもこれからもよろしくやってくれや」

悪魔のような笑みは絶やさない。

吐き気が感じられる。

こんな男と一緒にいたらまた紗都子は。

「紗都子・・・さあ僕と一緒に帰るのです」

梨花は優しく小さな声で言う。

しかし。

「わたくしは大丈夫ですよ」

「紗都子……??何言ってるの……」

何馬鹿なことを言ってるのだと聞いたかった。

そんなに殴られて傷だらけになりながら……。

まだそんな強がりと言うのかと……。

なぜなんだと聞いたかった。

「これから紗都子は酒を買いに行かなきゃ行けねえんだよ。良い子はもう暗いから帰った帰った」

鉄平は梨花を紗都子から引き剥がすとそういった。

無機質な瞳が梨花に向けられている。

もうあんなのは紗都子じゃないと思った。

助けてあげたかった。

自分のかけがえのない親友として。

しかし自分は無力だ。

こんな大の大人に立ち向かったところで返り討ちにあって殺されるだけだ。

だから梨花は逃げた。

紗都子が何を伝えたかったのかはいざ知らず。

後ろからは悪魔の笑い声が響いてきた。

ただ唇をかみながら一目散にかけた。

「紗都子……」

何度も謝りながら。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい」

みんなをあんな危険なやつにあわせることなどできないと考えた梨花は言わなかったのだ。

しかし昨日の祐樹の言葉で言う決心ができたのだった。

愛殺し編 9 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

愛殺し編 10 (前書き)

今作品も10話目に突入。  
コメント・評価待ってます。

そして今は教室で部活メンバーにそのことを話した。

みな意気消沈という感じだ。

当然だと思った。

「どうしよう・・・」

最初に口を開いたのはミサキだった。

「俺達だけじゃあなんともならないからな。いとど先生に相談してみたほうがいいんじゃないか?」

「それがいいかもね。私が言ってくるよ」

圭一の提案に乗った魅音が教室を出て行った。

「それにしてもなんであいつがまた戻ってきたんだ?」

理由が分からないと言う祐樹。

「またってことは一度ここにきていたのか?」

圭一の質問に頷く皆。

「圭一くんが来る前の去年なんだけど。悟史くんと紗都子ちゃんが暮らしてたところに突然その人の奥さんと帰ってきたんだよ。あ、

悟史くんって言うのは聡子ちゃんのお兄ちゃんなんだよ。今は行方不明だけど・・・」

「行方不明???てことは去年からってことか???てことはつまり・・・綿流しの日ってこと???」

「そうなのです。悟史は鬼隠しにあつて今は行方が分からないのです」

すると廊下から足音が聞こえてきた。

教室に入ってきたのは知恵先生と魅音だった。

「園崎さんから事情は聞きました。私が今日の放課後から北条さんに家に行ってみます。だから皆さんは詳しいことが分かるまで決して安易な行動はとらないでください」

厳重な注意を言ってから授業が始められた。

そして放課後、メンバーは部活はせずにまた集まっていた。

「知恵先生だけで大丈夫かな」

圭一が不安そうに言っている。

それに頷く祐樹。

やはり男2人は紗都子を実の妹のように見ていたから心配だった。

「もしほかに方法がない場合はどうしようか・・・」

「そうだな・・・児童相談所に言ってみるのはどうだ?？」

「それは無理なのです・・・」

「無理ってどういふことかな梨花ちゃん??教えて欲しいかな。かな」

「以前紗都子が児童相談所に電話したときにうそのことを言ってしまったところがあるのです」

「そんな・・・」

ミサキがそれを聞いてうなだれる。

お手上げだと言うメンバー！。

所詮子供の頭ではこれ以上は方法が浮かばなかったのだ。

そして皆納得いかないという顔をしながら帰宅の途についたのだ。た。

そして梨花もまたうなだれながら帰宅の途についている途中だった。

夕暮れの空が広がり、ひぐらしがうるさいくらい鳴いていた。

いつもは隣に紗都子がいてくれるのに、一人で帰るとどうしても寂しく感じてしまう。

「紗都子・・・」

一人つぶやいてしまう。

すると後ろから足音が聞こえきた。

振り返るとそこには。

「圭…………。祐樹…………。」

そこには部活メンバーの前原圭一と大葉祐樹が息を切らせてやってきていた。

そこには部活メンバーの前原圭一と大葉祐樹が息を切らせてやってきていた。

どうやら二人とも急いで帰宅したあとに走ってきたらしく、鞆は持ってなかった。

「一体どうしたのですか??そんなに急いで」

「なんでってな」

「そうそう。あれだけじゃあなんだか納得できないからな。俺達だけでももう少し考えてみたいと思ってな」

二人は先ほどだけでは不十分と考えたのか、親友の梨花を混ぜた三人でもう少し考えたいと思ったのだった。

そんなわけで境内の上で話し合いがなされることになった。

しかし話し合いの結果は芳しくなかった。

もう一度児童相談所に電話して助けを求めればいいかもしれないが、鉄平に束縛されている聡子は恐怖から言えるとは思えないというのが梨花の考えだった。

小さな女の子一人も助けられない己の未熟さに圭一も祐樹も憤りを感じていた。

「あいつさえ・・・」

「いなければ・・・」

不意に出された二人の言葉。

それにゾクつと恐怖を感じてしまった梨花。

そのときの二人の目が何かに取り付かれたかのように虚ろなものだったのだった。

ゆっくりと階段を下りて帰っていく二人。

つき物がついた酔うかのように何も言わずに帰っていった。

「もう・・・終わりなの・・・??」

愕然と闇に飲まれつつある雛身沢の空を見てつぶやいた。

そして翌日の朝にメンバーは知恵先生に集められた。

しかし先生から出た言葉を聞いてメンバーは。

「智恵先生・・・」

「会えなかったって・・・」

「どづいづことですか・・・」

圭一、レナ、魅音が続いて言う。

皆愕然と言つか、失望の表情だった。

「ふざけるなよ先生！！紗都子がどれだけ苦しんでいるか分かっているのか！！」

「大葉君！！」

校長が急いで祐樹のことを押さえ込んだ。

「離せ校長！！俺は紗都子のを助けに行くんだ！！」

「君が行ったところで何ができる？？子供の君に！！」

「子供だから……。子供だから……」

それっきり何も言えなくなった祐樹。

「これからはわれわれ大人の出番です。子供の君たちは待っていていればいいんだ。私はこれか児童相談所に連絡してくる。知恵先生はいつもどおりの授業を始めていてください」

「分かりました。よろしくお願いします」

校長はそうして教室を出ようとしてところで、別の戸が空けられたのだ。

皆が驚いてみるとそこに現れたのは。

『紗都子！！』

風邪で休んでいた紗都子が登校してきたのだった。

「おはようございますわ」

笑顔を作っているが以前のものには程遠かった。

祐樹が走って近づくと。

「紗都子怪我は痛くないか?? 本当に登校してきても大丈夫なのか?? あの親父に嫌がらせされていないか??」

突然質問攻めされて驚く紗都子だが。

「大丈夫ですわよ祐樹さん。私はこのとおりぴんぴんしてますわ」

そう言って気丈に振舞う紗都子。

一応安心したのか通常通りの授業が始められた。

以前と同じ時間が流れていく。

昼食もいつもと同じくみんなでわいわいと弁当争奪戦。

しかし祐樹は紗都子のことをずっと心配していた。

どこことなく無理している感じがするのだ。

そんな風に一日が過ぎようとしていた。

愛殺し編 11 (後書き)

コメント・評価待っています。

放課後となり、生徒たちが帰宅しようとして身支度をしていたときだった。

廊下から足音が聞こえてきた。

おそらく校長と知恵先生だと思われる。

「あ……ああ……」

しかしその瞬間紗都子が何かにおびえ始めたのだった。

「嫌ですわ……嫌ですわ……」

「どうしました紗都子??」

体を抱いてがくがくと震えているのだ。

「来てしまいますわ……あの人が……」

梨花がどうしたのかと利いてみても全く口を開かず、おびえたままだった。

そしてがらりと戸が開けられて、最初に入ってきたのは校長だった。

すると紗都子は。

「いやあああああっああー!!」

悲鳴を上げて教室の隅に逃げ出したのだった。

「紗都子ちゃん??」

校長がいきなりすることに驚いていた。

教室にいた部活メンバーも驚いている。

隅でおびえたようにがたがたと震えているのだ。

「一体どうしたんだよ」

圭一が驚いた顔で言う。

「そんなこと言われたって私には……」

魅音もまた驚いていた。

「紗都子……どうしたんだ??」

祐樹が紗都子に近づく。

しかし紗都子は悲鳴を上げてそれを拒絶する。

手のうち用のないこの状態にさらに追い討ちをかける。

「先ほど校長先生と一緒に児童相談所に言ってきました。でも結果は思わしくありませんでした」

申し訳なさそうに言う知恵。

校長も頭を下げて謝ってきた。

愕然とする皆。

「おい、魅音。園崎家の力で何とかならないのか??」

「私だって力になりたいよ……。でもばつちやが許してくれるか……。それに力を貸したら園崎の力に影響があるかもしれない……」

圭一の頼みに魅音は家への影響を挙げて難しいことを言う。

まだこちらをちらちらと見ながらにている紗都子。

あんなにおびえる紗都子は初めてだった。

「そんな……。家への影響って結局お前は自分がかわいいのかよ!!」

圭一が叫ぶ。

「そんなこといったって仕方がないことなんだよ!!」

魅音も負けじと反論。

現在雛身沢村を实质押さえているのは園崎家である。

権力への影響を極力避けたいのである。

それは次期頭首の魅音にはよく分かっていた。

「仲間が困ってるんだぞ??そんなときでも家の心配かよ!!」

「私だって力になりたいさ!!でも私は園崎を背負わなきゃいけないの!!」

「まだ家々言つのかよこのやろう!!」

「だまれ!!」

いきなり叫び声が圭一と魅音の口論を止めた。

「レナ・・・」

肩で息をしているレナ。

「だったらお前の家で引き取ってうやればいいじゃないか!!前原圭一!!」

「レナ・・・??」

いきなりの豹変に驚く。

「自分じゃ何もできないくせに人任せ??あんなに大きな家に住んでるんだからまだ部屋の1つや2つくらいは残ってるんじゃない??だったらお前が助けてあげればいいじゃない??」

「それは・・・」

「だったらそれで万事解決??そんなことができるんだっただらさっさと宝探しにでも言っつてこようかな??」

「……でも」

「できないの??だったら軽々しく魅いちゃんのことをけなさないでくれない??みんなだって助けたいのは一緒なんだよ??でも・  
」

そこで言葉が途切れた。

そしてゆっくりと紗都子の元に歩いていった。

「おい……レナ」

圭一がレナに近づこうとすると。

「来ないで!!」

ぴしゃりと言われた。

踏み出そうとしていた足が後ずさりを始める。

そしてレナは隅で今だ震えている紗都子を抱きしめる。

その目には涙が浮かんでいた。

「ごめんね紗都子ちゃん……。何にもしてあげられなくて……」

レナは泣いていた。

みんなも泣いていた。

何もできない無力な自分たちを呪いながら……。

仲間の一人も救って上げられない無力な自分が情けなくて……。

魅音もミサキも涼子も……。

圭一と祐樹も……。

梨花は何やらあきらめたような表情になっていた……。

呆然と虚ろな目で紗都子を……この教室を見つめていた。

愛殺し編 12 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

このとき圭一は涙を流しながら必死に考えていた。

「何もできない・・・??」

「できるじゃないか・・・」

不意に声がした。

振り返っても後ろでは泣いている仲間たち。

慰めている先生たち。

「全くこいつらは役にたたねえ」

圭一と同じ声だがとても冷たかった。

「俺にやらできるのか??」

圭一は自問する。

「俺にやらできるさ。考える・・・。クールになれ・・・。そして頭の脳細胞を全部使って考える・・・。誰にもできなかったことを考える・・・。こんな腰抜けどもを信用するな・・・。頼れるのは結局最後は自分だけだ・・・。仲間なんて・・・」

「くそくらえだ・・・」

そうつぶやいたのを最後に圭一は気を失った。

同時刻、祐樹も同じように考えていた。

周りでは泣いてばかりで何もしようとしない仲間たち。

彼の目にはおびえきった少女の姿しか映っていなかった。

「紗都子……」

どうしたら助けてあげられるんだと頼りない頭をフル回転させる。

「全くこいつらは無能だ」

祐樹の後ろから声が聞こえた。

振り向いても泣いている仲間しかいなかった。

先生たちはそんなみんなを慰めている。

「大人も使えない。だからといって俺達にできることはほとんどない」

「じゃあどうすれば……」

「頭悪いなお前。だから御三家になれないんだ」

「今はそんなこと関係ないだろ??」

「あつと驚く行動。だれもやろうとはしていない行動をすればいい

んだよ」

誰もやるうとはしないこと。

それを必死に考える祐樹。

「簡単なことさ」

祐樹と同じ声のものが言う。

しかしその声はひどく冷たかった。

「紗都子連れて逃げればいいのさ」

「……紗都子」

目の前にいる少女を見つめ。

どうするか悩んでいた。

そんなことを考えている祐樹の隣で圭一が突然倒れた。

みんなが彼の名前を呼んでいるがなかなか目を覚まさなかった。

それから一体どれくらいの時間が経っただろうか。

数分の気もするし数時間だったかもしれない。

「……」

うめき声を上げながら圭一が目を覚ます。

その様子を見た部活メンバーと先生方はほっと胸を下ろす。  
顔を手で覆いながら起き上がる。

「圭ちゃん??大丈夫??」

「圭一くん??」

魅音とレナが心配そうにたずねる。

圭一は顔を伏せながら。

「きーきーうるせんだよ・・・」

その声はいつもの彼のものではなかった。

低く殺気のコもったもの。

思わずびくつと震えてしまった。

「帰る・・・」

そう言ってふらふらと鞆を持ちながら教室を出て行くようにする。

「圭ちゃん??」

「まってよ圭一くん!!--」

突然のことに慌ててついていく魅音とレナ。

そのあとにミサキと涼子もついていく。

帰り際に紗都子を一瞥するも、彼女はまだおびえたままだった。

ひぐらしの鳴く声が少しばかり少なかったような気がした。

帰宅している祐樹。

あの後時間がかからと紗都子は急いで帰っていった。

梨花はもうすべてが終わったという表情で帰宅して行った。

祐樹自身もそんな梨花のことを方っては置けないとついていこうとしたが梨花がそれを断った。

何度もついていくといいつつも全く受け入れようとはしなかった。

茜色のそれが少しばかり暗くなってきていた。

愛殺し編 13 (後書き)

コメント。評価待ってます。

学校での出来事は一体なんだったのかを考えていた。

突然自分と同じ声でささやいてきた。

そいつが言ったのは紗都子をつれて逃げるということ。

「そんなことができるのか・・・??」

逃げるにはそれ相応の準備が必要だった。

お金・逃げる場所・そこでの住む場所・自分たちはまだ義務教育の段階のために通う学校・お金を稼ぐための仕事それ以外にもまだまだたくさんあった。

「そんなの準備できるのか・・・??」

御三家候補ということでは勇氣はある程度の金銭は工面できる。

しかし住むとなれば地元を出て行かなければならなかった。

ここはほとんどを園崎が掌握しているために簡単に見つかってしま  
うからだった。

しかしこれ以上彼女の辛そうな顔は見たくなかった。

見るたびに胸が苦しくなる。

「俺はお前みたいに大切な人を守れるのか・・・?? 悟史・・・」

祐樹はいまだ行方不明の彼の名をそれに向かってつぶやいた。

それから大分時間が経っていた。

前原圭一は帰宅して自分の部屋に閉じこもっていた。

布団に寝転がりこれからどうすればいいのか考えていた。

「あいつと正面切ってやるのは体格的にも無理がある」

「ハハハ、ダッタラドウスルツテンダ?? マエバラケイイチ」

相変わらずの調子で話しかけてくる影のもの。

その声は自身と同じであるために影の部分であるのかと思っていた。

「奇襲をかけるのさ」

「キシユウ?? ドウヤツテダ??」

帰宅してからリビングで夕食の準備をしていた母親に聞いていたのだった。

完全犯罪について。

圭一の母親・藍子に聞いていたのだった。

彼女は推理小説好きだったためにそっち系統についての知識は豊富

だった。

色々聞かされたがやはり視界が悪いところでの奇襲をかけるのが一番だと決めた。

さらにすぐに証拠を隠せるようなところ。

あらかじめ死体を隠すところなどを確保していなければいけなかった。

「ソンドウスルツモリダイ??マエバラケイイチ」

「やつをおびき出して殺してから証拠とともに鬼ヶ淵へ沈めてやるさ」

「カンゼンニシズマナカイケナインジャーナイ??」

「そのときは重りでもつけて叩き落すさ」

にやりと笑う圭一。

したからは夕食ができたのだろう。

藍子の声が聞こえてきた。

「まあ、まずは凶器でも調達しに行きますか」

そう言って下に下りていった。

次の日は休日ということの特に何もすることがなかった。

しかし彼前原圭一はなぜか分校の教室に来ていた。

彼の前にあるのはロッカーだった。

そのこのネームプレートには北条悟史と書かれていた。

その中にはかつて彼が使っていた野球チームのユニフォームやら用具一式が収まっていた。

圭一はその中から金属バットを取り出した。

握りを確かめ振ってみる。

「これならいけそうだ・・・」

確かな成功の確信を感じていた。

「力を貸してくれ・・・悟史」

ロッカーを閉めて分校を跡にする圭一。

彼が向かった先は森の中だった。

その頃祐樹は家の自室で寝転び漫画を読んでいた。

しかしその指は全く動いておらずに同じページを眺めていた。

というよりも漫画など途中で読んでいなかったのだ。

「紗都子……」

今頃彼女は何をしているのだろう。

そんなことを延々と考えていたのだった。

あの親父に叩かれているのではないか？？

あの親父にけられていたのではないか？？

あの親父に殴られているのではないか？？

そんなことばかりが頭に浮かぶ。

だからといって自分にできることは彼女を連れ出すことしか浮かばなかった。

「ダツタラアンタガソウシチマエバイイジャンイカ」

頭の上から祐樹自身の声で語りかけてくるものがいた。

しかしその姿は見えない。

「そうは言っても……」

まだ踏ん切りがつかなかった。

「ヨワムシダネ〜オマエハ」

冷やかしてくるみえないもの。

「そんなこと言ったって誰も何もしてないだろ??それに連れて行くにしても色々準備が要るわけだし。まだ時間が必要っていうか・・」

それは単に言い訳に過ぎなかった。

いつもの自分だったらノープランで連れ出しているだろう。

しかしなぜだかいつもの思いっきりが出せずにいた。

それには理由があった。

彼だけではない。

雛身沢全体を覆っているもの。

「オヤシロサマデモキニシテルノカナ?」

愛殺し編 14 (後書き)

コメント評価まっています!!

核心を突く質問だった。

「!！」

それに反応するかのようには目を見開く。

ここからはなれるとオヤシロ様のたたりがあると小さい頃から聞かされていた。

だからこそ踏ん切りがつかなかった。

「ヨウムシダネ〜ユウキハ」

「うるせえ!！」

しかし実際はオヤシロ様という実態しない神様に恐怖はしていた。

何が起きるか分からないからこそ怖かったのだ。

「ソナナコトダカラダシヌカレチャウンダヨ」

「なんだと???どういうことだ??」

何者かが一体どういうことを言っているのか祐樹には分からなかった。

しかし自分のやろつとしていることが無駄になりそうだということだけがなせか感じられた。

「アノシヨウネン・・・マエバラケイイチってイッテタカナ??カレ・・・ナニカヲケッコウシヨウトシテルヨ??」

「何!!あいつ・・・」

とたんに驚愕の表情となる祐樹。

それを面白そうに見ているだろう見えないもの。

「ドウスルノサ。カレニハクバノオウジサマヤクヲトラレテモイイノカナ??」

勢いよく布団から起き上がる祐樹。

がたがたと机の引き出しをあさり、それらをリュックにつめ始める。

祐樹は決心した。

というよりも圭一人にいい格好をさせたくなかったのだった。

「俺だって紗都子を守りたいんだ」

そうつぶやくと同時に猛スピードで外に飛び出した。

めざすは北条鉄平という悪魔が住み着く家にとらわれた小さなお姫様のいるところだった。

雛身沢村はすでに真っ暗になっていた。

圭一はそんなくらい森の中で、鬼ヶ淵沼傍の茂みに隠れていた。

もうすぐ彼が電話であらかじめくるように言っておいたものが来る頃だった。

「そろそろか・・・」

手には今日の夕方ごろに分校から持ってきた悟史のバットだった。

すでに何時間も握っていたために汗で滑りそうだった。

仕方なく上着で汗をふき取りながら北条鉄平を待つ。

しばらくする遠くからなにやら明かりがちらちらと見え隠れしていた。

さらになにやらバイクのエンジン音がしていた。

間違いない、北条鉄平が来たのだと圭一は確信した。

大きなエンジン音が近づいてくる。

「うおおおおおおお！！」

そしてライトで鉄平の顔が見えた瞬間圭一は勢いよく飛び出し体当たりをぶちかます。

「ぐあー！！」

突然の出来事に受身を取れなかった鉄平はごろごろと地面に転がる。

その隙に圭一は金属バットを大きく振りかざす。

「紗都子を返せ!」

一気に振り下ろす。

「ぎゃあ!」

鉄平の悲鳴が上がる。

それに続いて何度も鉄平を殴り続ける。

そのたびに鉄平の悲鳴が上がる。

最後には助けってくれと懇願してきた。

しかし圭一の耳にはそんな彼の言葉は・・・悪魔の言葉は鬼には聞こえていなかった。

数分後、圭一の手には鉄平・・・悪魔の血がべっとりついた金属バットが握られていた。

「はあ・・・はあ・・・」

肩で息をする圭一。

彼の目の前にあるのは北条鉄平だった肉の塊。

すでに原形をとどめていないのは彼が死んでからも延々と殴り続け

ていたからだった。

「ははは・・・やってやったぜ・・・。紗都子・・・これでお前は自由だ・・・」

ここにはいない助けたかった仲間の名前をつぶやく。

バットと肉の塊を沼に叩き落す。

それらは浮かぶことなくそこへと沈んでいった。

「帰ろう・・・。明日からは以前と同じ楽しい日々が始まる」

鬼は歩き始めていた。

愛殺し編 15 (後書き)

コメント・評価まっけてますー!!

「ぜえ……ぜえ……」

祐樹は暗い雛身沢を走っていた。

明かりがぼつんとついた家。

北条家である。

玄関の戸をだんだんと叩く。

しかし全く応答がなかった。

不思議に思った祐樹は中に挨拶をしながら入っていく。

中は明かりがつけられていたが静かであった。

「紗都子……もう寝たのか??」

奥へと進むとまた明かりがついた部屋があった。

中へ入るとどうやらお風呂であった。

そこも明かりがついていてしかしとが開けっ放しだった。

そして湯船には信じられない光景が。

「紗都子!!!!」

祐樹は急いで浴槽に浮かんだ紗都子を引きずり出した。

その湯は非常に暑く、一体それだけ入っていたのだろうかと思うくらいだった。

さらにのぼせてしまつて意識が朦朧としていた。

急いで今へと運び、冷やすなどの応急手当を施した。

一体何時間経つたのだろうか。

眠っていた祐樹の傍を誰かが歩いている音が聞こえた。

「ううう・・・」

うめきながらも思い目を開ける。

すると目の前には。

「さ・・・どこ??」

そこにはすでに小さなエプロンをつけて朝食を作り始めていた紗都子の姿があった。

そして祐樹は自身にかけられていた布団に気がつく。

近くには布団も敷かれていた。

どうやらあのあと紗都子は目を覚まして自分でここに布団を敷き、

眠ったようだった。

「紗都子！！お前もう体は大丈夫なのか??」

昨日あれだけ長時間熱い湯の中に使っていたのだから大丈夫なわけはなかったはずだ。

しかし彼女は気丈にも。

「もう大丈夫ですわ。でも昨日は助けに来てくれてありがとうございます。ごうございませすですわね」

出来上がった料理を運んでくる。

「もう朝なのか??」

時計を見るともう7時近かった。

それに今日は普通の学校がある日だった。

「やば！！鞆とか置いてきたままだ！！」

家に置いてきてしまった祐樹。

今あるのは最悪の場合を考えて持ってきた金銭など逃亡用具たちだった。

焦る祐樹に対して。

「おほほほ、祐樹さん慌てる前に腹ごしらえしませんこと??」

それに乗じてか祐樹の腹の虫が大きくなる。

「じちそうになります」

かしこまりながらいただくことになった。

愛殺し編 16 (後書き)

コメント・評価まっけてますー!!

愛殺し編 17 (前書き)

大変遅くなり申し訳ありません。

投稿を再開したいと思えます。

皆さんからの評価・コメントを待っています!!

前原圭一の朝はひどいものだった。

朝起きるとわずかににおう血の香り。

帰ってきた跡に念入りに体を洗ったつもりなのだがまだ取れていなかったのだろうか。

仕方なくもう一度シャワーを浴びるべく、いつもよりも早く起きることになった。

それを見た母藍子はひどく驚いていたが寝つきが悪かったと説明すると納得してくれていた。

シャワーを浴びているとひどくのどのあたりがひりひりした。

しかしそれほど気にするものでもなかったために無視していた。

朝食をとり、レナの待つ場所へと急いだ。

「おはよう圭一くん。今日は珍しく早いんだね。だね」

レナが珍しく早く来ていた圭一に対して言う。

「まあ確かに珍しいのは否定しないが、いつも俺が遅れてくるのはレナが早いからだろ??レナが遅れてきたら俺がレナの家まで言うてやるぜ??」

「ハウ、レナの家圭一くんがお迎え??」

顔を赤くしてしまったレナ。

そんなレナをからかいながら魅音たちとの待ち合わせ場所に急ぐ二人。

そんな時向こうからバイクが走ってきた。

乗っているのは男だろうか。

「なんで・・・」

圭一はひどく狼狽していた。

「圭一くん・・・??どうしたのかな??かな??」

そんな圭一を心配そうに見つめるレナ。

「なんで生きてるんだ・・・北条鉄平・・・」

彼らの横を走り去ったのは北条鉄平だった。

その日1日中圭一は何かにおびえていた。

殺したはずの北条鉄平が生きていたのだから。

「俺は確かやつを殺して沼に捨てたはずなんだ・・・確かに沈んだんだ・・・」

誰にも聞こえない声でつぶやいていた。

そんな圭一に近づいてきたのは。

「圭ちゃん??大丈夫??」

「圭一くん??」

魅音とレナだった。

二人とも心配そうに見つめていた。

「ごめんな二人とも、なんか昨日なかなか寝付けなくてな、寝不足なんだ」

苦笑いしながら言う圭一。

「ねえ圭一くん。昨日の夜どこに行ってたのかな??かな??」

レナが突然聞いてきた。

「え??昨日の夜だったら寝てたんじゃないか??だって俺レナから何も連絡貰ってないから」

「だって私叔母様に伝はしたら家にいないって言われたよ??」

しまったと思った。

まさか昨日のことをいうわけにもいかず。

「ああ・・・昨日は確か・・・散歩に行ってたんだ」  
何とかごまかそうとした。

「ふうん・・・散歩ってどこまで行ったの??」

魅音が聞いてくる。

なんでこんなにも聞きたがるのか理解できなかった。

「なんでこんなこと聞こうとするんだ??」

「いいからどこ行ってたの??」

全く聞く耳を持たない。

したからのぞき見るようにして2人は見てくる。

その目には生氣はなく、ただひとを疑っているような目であった。

「ただの散歩さ・・・。ちょっと家の回り・・・いつもの待ち合わせ場所まで行っただけだから」

仕方なく言うことにした。

あながち間違っているわけではなかった。

「ふうん・・・そう」

「圭一くんがそういうならそうなんだろうね」

二人はまだ納得していない感じの物言いだった。

「でもね圭ちゃん・・・嘘言ったらいやだからね」

魅音は顔を近づけて言ってくる。

なぜだか背中に嫌な汗が流れた。

「圭くん・・・仲間って言うのは隠し事無しだよね・・・。よね」

レナは背中を見せながらつぶやく。

その言葉にひどく罪悪感を覚えていた。

その日の放課後休養があるといい急いで帰宅した圭一は鬼ヶ淵沼へと急いでいた。

その手にはしゃべるが握られて降りぬ目に付くと中に突っ込んで肉の塊を引き出そうとしていた。

しかしなにか大きなものには当たるものなかなか這い上がってこない。

腰には鉈が常備されていた。

もし北条鉄平が生きていたら一撃で殺せるようにするためだった。

「ある・・・あるぞ・・・」

ようやく引き上げた肉片の塊だった泥の塊。

圭一はようやく見つけた証拠に安堵していた。

後ろからがさがさと草がこすれる音がしたために急いでシャベルなどを沼に捨てた。

そこに現れたのは・・・。

「大石さん・・・??」

「んっふっふっふ。こんにちは、前原さん」

以前分校に現れ圭一に質問してきた人物だった。

なぜ彼が現れたのか圭一には理解できなかった。

誰にも見られていなかったはずなのに。

「どうしたんですか??大石さん。こんなところで油売っていいんですか??」

「確かにそうですね。でもあなたのお友達に相談されたらすれどうですか??」

「え??」

「あれだけ必死に頼まれれば断ることはできんですな」

お友達……一体誰がやったのか。

「ははは……どういうことですか??」

「園崎魅音さんと竜宮レナさんですよ。あんなに慌てた彼女たちを見たのは初めてですね」

「あなたは2人とそんなに面識ないですよね」

「そんなに怖い顔しないでくださいよ。それであなたは何をしていたんですか??こんな沼の近くで」

ここで鉄平を殺したことがばれれば確実に圭一はお縄につくことに

なる。

かといってうまく騙せるだろうか。

「ちよつと散歩がてら探検ですよ大石さん」

「こんなところですか??物好きですね〜都会っこは」

「ははは、初めての大自然ですからね。万傑したいですし、もともと俺、好奇心旺盛のほうなので」

ひぐらしの合唱がうるさいくらいだった。

さらに生い茂った草木が隙間なくあるためにサウナ状態となっている。

二人は虫に指されまくっていた。

「そろそろ戻りませんか??虫に刺されてかゆいんですよ」

「んっふっふ、そうですね。それでは最後に腰に刺している鉈は何に使うつもりなのですか??」

「!?!」

しまったと思った。

投げ捨てたのは使ったしゃべると肉片だけだったからだ。

もしものことがあったときの鉈を隠しておくことを忘れていた。

「じ……これは……」

言葉がのどでつつかえる。

にたにたと笑いながら歩いてくる大石。

左肩をつかまれた。

「さあ、前原さん??どうしてですか??」

「コロセ……」

沈黙していた声が再び聞こえてきた。

「コロセ……オオイシヲコロセ」

カタカタと震えるからだ。

あのと時の感覚がよみがえる。

鉄平を金属バットで殴るときの肉が飛び散る感覚。

どんなに強い人間でも不意打ちには弱い。

それに。

「ボリボリボリボリ……」

圭一は無意識のうちにのどを掻いていたようだ。

ほかの虫さされはそれほど気にならないのに首のかゆみだけはきになってしょうがない。

「前原さん??どうしましたか??」

大石が圭一の異変に気がつき聞いてくる。

「コロセ」

「なんでもないですよ??大石さん」

その瞬間圭一の傍から血柱が上がった。

そして圭一の足元にはサッカーボール大のものが・・・大石の首だった。

「大石さん・・・どうしたんですか??」

ピクリとも動かなくなった大石に向かって圭一は尋ねる。

「さて・・・行くか」

鉈を腰に引っ掛け、出口である古手神社に向かった。

愛殺し編 18 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

愛殺し編 19 (前書き)

コメント・評価いただければ幸いです。

祐樹と紗都子は一緒に梨花の元へと向かっていた。

帰るときも一人で走って行ってしまったからだ。

そんな2人は心配になり梨花の家に向かっていたのだった。

古手神社につき石段を上る。

「それにしても梨花はどうしたのでしょうか??あんなに悲しそうな顔をするのははじめてみましたのですわ」

そんなことはないと祐樹は思っていた。

紗都子がどうして学校に来ないのか祐樹に言うときもそんな顔をしていた。

否それに近い顔をしていた。

それよりも深刻そうな顔だった。

だからこれは急がなければいけないと思った。

「急がなきゃな・・・」

「ドウシテ??」

突然声が聞こえた。

今まで沈黙を保っていた声がまた聞こえてきたのだ。

「なんでまた出てきたんだ??」

「ダツテコウモヘイワダトツマラナイジャ〜ン??」

「面白がるな!!人をなんだと思ってるんだ!!」

「タカガゲームノコマニスギナイジャ〜ン??」

「な!??」

何言ってるんだと憤りを覚えた。

しかしここで切れても紗都子に心配されるだけだ。

祐樹は仕方なく我慢することにした。

「覚えてる・・・」

「ヒツヒツヒナニガオボエテロダ??オマエハシヨセンゲームバン  
ノコマニスギナインダヨ」

それっきり声は掻き消えた。

しかし耳にこびりつく言葉。

一体何を言いたかったのか。

「もう少しですわね」

紗都子の言葉に顔を上げると確かにもう少しだった。

しかしやけにカラスが多かった。

ようやくついた祐樹たちが見たものは。

「ああ・・・ああああ・・・あ・・・あ・・・あ」

紗都子はもう言葉になっていなかった。

「なんで・・・??？」

祐樹は愕然としていた。

そして草陰から現れたのは。

「祐樹・・・紗都子・・・梨花ちゃん!!」

梨花の死体を見て驚きの声をあげる。

「圭一・・・」

血まみれで鉈をもった前原圭一の姿だった。

しばしお互い見合っていた。

祐樹は無意識のうちに差都子を自身の後ろに下げる。

「圭一……その血は何だ??」

祐樹は信じたくなかった。

まさか圭一が……梨花を手にかけるなどとは。

「これは……」

圭一が説明しようとしたら。

「誰ですの……??」

「紗都子??」

紗都子の意味の分からない言葉に振り返る祐樹。

「あなたは誰ですの!!! いい加減正体をあらわしなさいですわ!!!」

「紗都子……?? 何言ってるんだ??」

目の前の圭一が困惑した表情で紗都子に語りかける。

祐樹自身紗都子が何を言いたいのかがさっぱり理解できなかった。

「圭一さんの皮をかぶった化け物め!!! 私は騙されませんわ!!! それに梨花を殺したのもあなたですわね」

「違う!!! 俺は殺して……ない」

しかし圭一は即答できなかった。

梨花は殺していない。

しかしもう2人殺してしまっている。

「は・・・ははほら即答できませんわ。あなたは圭一さんではありませんわね」

そう言つて紗都子は背を向けて逃げ出した。

「「紗都子!!」」

二人は叫ぶものの紗都子は振り返りもせずには走つて言った。

「紗都子!!俺は違うんだ!!殺してはいないんだ!!」

そう叫んで紗都子を追おうと走り出した圭一。

しかし。

「ここから先には行かせねえ・・・」

祐樹が体を張つて通せんぼする。

「どけ祐樹!!俺は真実を知ってもらわなきゃいけないんだ!!」

「だったらその血は何だ!!その鉋は何だ!!それが思わぬ証拠だろつが!!」

祐樹は激昂した。

なぜあんなに仲のよかった仲間を手にかけたのか。

「どうして……どうしてこんなことしたんだ!」

「俺はやってない!」

そう言っつて鉈を振り下ろした。

肩から斜めに切られた祐樹は崩れ落ちるかのように倒れた。

「はあ……はあ……お前が悪いんだ……お前が俺の前に立たなければよかつたんだ!」

圭一はそう叫んでから走っていった。

一人残された祐樹はぼんやりとした意識の中考えていた。

なぜ圭一は殺さなかつたのだろうか。

祐樹は浅く切られただけで少し出血が多いくらいだった。

一体圭一は何を考えているのか。

いくら考えても分からなかつた。

「圭一……」

聞こえるはずのない仲間の名をつぶやき目をつぶった。

圭一は紗都子を追っていた。

何とか梨花を殺したことの疑惑だけでも晴らしたかったのだ。

紗都子はすでに橋をほとんど渡りきっていた。

そういう圭一は体中が傷だらけだった。

この森は紗都子のトラップだらけであったからだ。

何度も引っかかりながら走ってきたのだ。

「紗都子……俺は梨花ちゃんを殺してない……」

「嘘ですわ!!そんなこと何が証明してくれますの??その血は何なのですか?」

紗都子を出せるだけの声を圭一にぶつける。

「紗都子……」

圭一は端に足をかける。

すると。

「来ないでくださいまし!!」

橋を思いっきり揺らし始めたのだった。

「おっわ!!!!」



しかし彼女の瞳は汚らわしいものを見下すような瞳だった。

「紗都子・・・ごめんな。助けてあげられなくて・・・」

そう言つて握力がゼロとなった手が離され圭一はまっさかさまに転落して行つた。

最後に見たのは角の生えた少女だった。

一体どれくらい眠つていたのだろうか。

圭一は目を覚ましたのだった。

「な・・・なんで生きてるんだ??」

自身が生きていることに疑問を持つ圭一。

なぜなら彼はあの端からまっさかさまに落ちたのだから師は確定のはずだった。

しかし下を見てみるとなにやらクッションみたいなものがあった。

どうやらこれに助けられたらしい。

「なんとも悪運が強いこと・・・」

思わず自嘲してしまった。

こんなことをしている暇はないと急いで村のほうへと帰っていった。

しかしそこには異様な光景が広がっていた。

なにやら学校へトラックが大奥と追っていたので急いで向かってみるとそこにはたくさんの方々が倒れていたのだ。

その中には学校の生徒たちそして部活メンバーもいた。

そこには父・母・先生・生徒たち・部活メンバーの魅音・レナ・紗都子・ミサキ・涼子がいたとなって転がっていた。

皆苦しんで死んでいったのだろう。首に手で押さえて倒れていたのだ。

「紗都子……」

その中には助けなかったはずの少女の姿もあった。

結局誰も助けることができなかったのだ。

圭一がくずれ落ちると同時に後ろでも同じくくずれ落ちるものがあった。

「祐樹……??」

「圭一……??」

どうやら祐樹も先ほど気がついてようだった。

圭一は傷つけてしまったことを謝り、祐樹は仕方がないと許していた。

現在2人は謎の軍団に介抱されている。

どうやら謎の毒ガスによって村が全滅してしまったことを聞かされた。

自分たちの親も皆死んだらしい。

もう涙が枯れてしまい1滴も出てこない状態である。

二人はもう生きるしかばねに近い状態となっていた。

一気に大切な家族仲間を失ったのだから。

彼らはそのまま車に乗せられていった。

「まだ彼らと面会できないんですか??」

そこには看護師に対して尋ねている男がいた。

「赤坂さん・・・もう少し待ちましょう。彼らだっぴいきなり地獄に叩き落されたと同じなんですから」

「そうですけれども・・・土御門さん」

彼らは警察官である赤坂衛と探偵土御門零である。

彼らは雛身沢事件に対して違和感を覚えたため生存者である2人の少年に事情聴取したいと思いきこにきていたのだった。

しかし一向に回復の兆しがないということで面会謝絶されていたのだった。

「それにしても奇妙な事件でしたね。一夜にして村が全滅・・・」

「それを詳しく調べるのがわれわれの仕事です。大石さんともあれ以来連絡が取れませんからね・・・」

2人は深くため息をついていると突然あわただしい音が聞こえてきた。

「先生!!!202号室の患者さんたちの心臓が止まりました!!!」

「なんだって!?!」

赤坂と土御門は同時に叫ぶ。

そこには生存者が入院している病室だった。

急いで中にはいる担当医。

ただ2人は生き返ることを祈るしかできなかった。

しかし。

「残念ながらお二人とも心臓麻でお亡くなりになりました」

「そんな・・・」

「そんなことがあるか!!!なんであんな若いやつらが心臓麻痺で死



愛殺し編 19 (後書き)

次回作でもたくさんの評価・コメントをいただけたらと思います。  
長らくお待たせしてすみません。

次回作も期待しててください(してもらえるように頑張ります！  
！)。

## 穢れ落とし編 1 (前書き)

それでは次巻を投稿したいと思います。少し原作と違ってしまっているかもしれませんがご了承ください。

感想・コメントをいただけると幸いです。

同時に執筆しているムシウタのほうの募集のほうもどっかよろしく  
お願いします。

では!!

## 穢れ落とし編 1

あなたは私を救えるの??

これから起ころうとする決まった運命の袋小路から……。  
でも、あなたたちはここに来てはいけない。

あなたには大切な人がいる。

あなたには大切な家族がいる。

それらを失ってまでもあなたたちはここに居座るの??

フレデリカ＝ベルンカ

ステル

一台のオートバイが走っている。黒と蒼を基調としたもので、一つのリュックをしょって人気のない木々に囲まれた道を走っていた。どうやら男性のようだった。森を抜けるとそこにはいかにも田舎であるといっている村が見えてきた。

「ここが……」

この村こそ青年が来たかった村。村長のほうから事件が毎年起こるから犯人を突き止めて欲しいといわれてきたのだ。青年はヘルメットを取りあたりを見渡す。大自然に囲まれ、空気がおいしい村。こんな平和そうな村で毎年起こっている事件。昭和55年6月20日の今日。青年は悪魔の脚本が上映される劇場へとやってきたのだ。

「雛身沢村か……」

青年の名は土御門零……とある探偵だった。

さらに走らせていくと大きな屋敷が見えてきた。家紋には園崎と書かれていた。

「ここが園崎家か・・・田舎っていうのにでかい屋敷だな」

あまりの大きさに驚きを見せながら家の門を叩く。中から家政婦さんらしき女性の返事が返ってきた。門が開けられ自分が尊重から依頼されてきたものであることを手紙を見せて証明し、さらにここで説明があるということできたことを伝える。家政婦のほうも聞いていることらしく、快く中に入れてくれた。中にはいると広い中庭だった。池にはたくさんの大きな鯉がいて、手入れの行き届いた花壇やら盆栽やら植物がたくさんあった。

「広い庭ですねー。それにきちんと手入れがされている」

「ええ、私もや専門の方の手でなされています。お馴染まもこの庭が気に入っていらしましてね」

家政婦も嬉しそうに言う。玄関を通り、中にはいる。そのままついていくと大きな居間に行き着いた。そこにはすでに何人かのものたちが座っていた。零中にはいる。

「お招きいただきありがとうございます」

中にはいるや挨拶を始める。

「わたくし、東京から参りました、探偵をしています土御門零と申します。どうぞお見知りおきを」

「わざわざ遠くからすまないね。まずは座っておくれよ」

座っている女性から勧められるがままに座る。正面にはここの頭首園崎お魴が座っていた。微動だにしない彼女からものすごい威圧感が向けられる。それをひしひしと感じながらも口を開く零

「それでは詳しい経緯について聞かせていただけますか??」

「そのことについては私が」

先ほどの女性の隣に座っているごつい体でサングラスをかけたいか

にもボディーガードだという男性が言う。彼の説明からしてこうだ。どうやら2年前から毎年祭りの季節になると殺人事件が起きるということだ。それも決まって2人。さらに奇妙なことに1人は死体でもちろん発見されるがもう1人がどうしても見つからないらしい。さらに昨年は北条家の夫婦が殺害されたようだった。そして連続でおきていることから村の上のものは不安を抱えていた。ほかの村人の中にも不安がるものもいるようだ。だからこそ何とか真相を暴いて欲しいというものだった。

「分かりました。全力で協力させていただきます。そしてなんと少しでも事件の真相をつかんで見せます」

「よろしく頼むんよ」

ただ一言今までだんまりを決め込んでいた頭首が口を開いたのだ。しかしその声は何かにおびえているような感じを含んでいたように例は感じていた。その後は調査に行くということとで園崎家を出て行った。まずはじめの向かう先は。

「古手神社か・・・」

まずは祭りが行われ、殺人の舞台となるところへと行くことを決め、オートバイへとまたがり、大きな音を立てて走り出した。そんな彼を見つめる角の映えた巫女服の少女がいたことを零は気がついていなかった。

穢れ落とし編 2 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

オートバイを颯爽と走らせ田んぼの横を走る。やはり田舎ということでのほほんという平和な感じが村を包んでいた。なぜこんなところで殺人事件が起きるのだろうか。先ほどから見えない理由を考える。こんな田舎で殺人を犯してなんになるのだろうか。それこそこの村に何かがあるということか。

「まったく持つて分かん・・・」

音を立ててオートバイを走らせる。ひぐらしが大合唱を響かせる。ここ雛身沢村。近々祭りが行われるということだった。そのためか田んぼには女性が多く見られ、男性はまったく持つて見当たらない。どうやら祭りの準備に精を出していると思われる。

しばらくは知らせていくと石段が見えてきた。かなり高いところまで伸びているようだった。零はオートバイを道端に注射し、リュックをしょって石段をあがっていく。一応体は鍛えているが、長時間の運転でここに来たために疲れがたまっていた。うんうん唸りながら何とか頂上に着いた。ついた最初に見たのは村の男たちが一生懸命祭りの準備をしている姿だった。みんな祭りを成功させようと頑張っているのだと零は思った。自分も顔を出すかもしれない祭り・・・綿流しというらしいが、何でもここ古手神社の娘が演舞を舞うということだった。肩にリュックを担いでしばらく歩いていく。すると目の前には大きな蔵が現れた。

「これは・・・えらくでかい蔵だな。でもかなりの年季が入っているような気がする」

興味を持った零は近づいていき、扉の隙間から中を見てみた。しかし中は真っ暗で何も見えない。しかし念入りに準備してきたリュックの中には懐中電灯が入っていた。それで中を照らし、再び中を見てみる。するとそこにあったのは。

「仏像・・・なのか??」

そこに見えたのは大きな木彫りの像だった。したにはなにかのお供え物のようなものもあった。しかし周りはそれでも暗くて見えな  
い。しかしその像だけが異様な雰囲気をかもし出していた。すると  
後ろに人の気配がしたのを感じた。振り向くとそこには小学生くら  
いの少女がいた。長い髪をそのままストレートにしている少女。い  
つの間に来ていたのだろうか。まったく音も立てずに。それだけな  
かものに見入っていたのだろうか。そう色々と考えていると。  
「みー。どちらさまなのですか??ここは誰も来てはいけない所な  
のです」

「それはすまなかつたね。ごめんよ。今日東京から来たんだ。だか  
らここについてはまったく知らなくてね」

「それなら仕方なのです。でもこれ以上長居すると村の人たちに怒  
られるですよ」

「それは勘弁だね。早く退散しよう」

「それがいいのです。にはー」

その子は古手梨花という名前の少女だった。ここ古手家の長女で  
演舞を舞うというのは彼女だということを歩いているときに聞いた。  
このことについては無知である零は彼女に質問してみることにし  
た。もちろん子供相手であるから殺人事件については控えておいた。  
「雛身沢で誇れるものっては何かな??」

「それはたくさんありますので迷うのですよ。でも一番はこのひぐ  
らしの大合唱なのです」

先ほどから耳を離れないこの大合唱。確かにこれだけにぎやかな  
ら有名になるかもしれない。こんなに大音量の虫の声は聞いたこと  
がなかった。まあ、確かに生まれも育ちも都会であるから仕方ない  
のであるが。

「後はオヤシロ様なのです」

「オヤシロ様??なんだいそれは??聞こえは神様みたいなものだ  
ね」

「そうなのです。オヤシロ様は神様なのです」

「オヤシロ様って言うのはどんな神様なのかな??」

「オヤシロ様はここ雛身沢村の守り神なのです。それに縁結びの神様でもあるのです」

「それはすごい神様だ。きつとかわいらしい神様なんじゃないかな??俺も家内安全になるように祈っておこうかな」

笑いながら話す零。そんな例の隣を歩いてきた梨花が話しかけてきた。その顔は何か不思議なものを見たようなものだった。

「どうしてそんな風に思うのですか??」

「そんな風にとは??」

「どうしてオヤシロ様がかわいらしいって思うのですか??確かに村を守ってくれています。でも村人たちはそんな神様を恐れているのです」

話していくうちにどんどん涙顔になってきた。なぜそんな顔をするのか零には分からなかった。慌ててハンカチを手渡しながら言う。

「本当に直感なんだけど話によると梨花ちゃんはオヤシロ様の生まれ変わりなんだろう??こんなかわいい子が生まれ変わりなら神様もかわいいんじゃないかって思ったわけ。馬鹿みたいに思われるかもしれないけどね」

苦笑いをしながらいう零。しかしとうの梨花は違っていた。心から笑っていたのだった。まるでそこにはいない誰かの代わりに笑っているようだった。そして零に向かって言う。

「ありがとうございます。そういつてくれると嬉しいと思いますです」

「誰がだい??」

本当は知っている答えをあえて聞いてみる。そして梨花は笑顔で答えを言う。

「オヤシロ様なのです」

その時目の錯覚だろうか、梨花の傍に笑顔の別の少女が見えたよ  
うな気がしたのだった。

穢れ落とし編 3 (後書き)

コメント・評価などもしお願いします!!

穢れ落とし編 4 (前書き)

原作と順番が違ってるかもしれませんが製作の都合上変わりました。

それから梨花と別れた零は再びオートバイに乗っていた。どうやらこのむらは昔ダム戦争というものがあり、その名残がまだ残っているようだ。そこに向かつては知らせる零。近くには分校があり、休日なのか生徒たちはいなかった。しばらくするとダム建設あとについた。

「ここがその名残か・・・」

そこは名残というよりも家庭から出たごみが産しているゴミ捨て場であった。愛芝が悪く、倒れそうなところを何とか踏みとどまりながら中心部へ徒歩を進める。すると近くで何かが崩れる音がした。はっと気がつき振り返るとそこには。

「お助け・・・??」

鉈を持った美少女がいた。思わず驚いてしまい、しりもちを情けないながらついでにしまった。その目には警戒に染まっており、何かへんなことをすればその鉈で殺されるという恐怖があった。何とか警戒を解いてもらおうと話しかけることにした。なるべく親しみを込めて。

「やあ、今日はいい天気だね」

「そうですね」

しまったあああああ！つと叫びたいところを我慢した。返ってきたのはそつけない冷たいものだった。仕方なく別の話題に走る。「ここで何してるのかな??ここはダム戦争の名残で今はゴミ捨て場って聞いていたんだけどな」

「離身沢の人じゃないよね??」

「ああ、東京から来たんだ。まあ、旅行かな」

「ここはゴミ捨て場なんてものじゃないんだよ。だよ」

なんだかうまく話がつながった。それに便乗してさらに続ける。「ならここはなんだい??何か探し物でもしてるのかな??」

「そうなんだよ。だよ。ここはレナにとっては宝の山なんだよ」

「宝の山？？確かに山といえば山だね」

「そう何だよ。ハウ！！かあいいいいよおお！！」

レナという少女が一目散に走っていった。相場の悪いこのゴミの山・・・宝の山を転ばずに走れるとは日ごろから来ているのだろうか。と零は思った。レナが持つてきたのはなぜか小さなイスだった。幼稚園児くらいが使うものだろうか。

「見てみてこれなんてかあいいでしょ？？」

見せられてもただのおんぼろにしか見えない零。しかしここでまじめに答えてしまうと近くにある鉈で真つ二つにされかねないので苦笑いしながらそうだねと言っておいた。レナもそうだよねと笑顔で言っていたのでよしとした。なぜここにいたの買いいてみるとどうやら今日は部活も休みらしく、特にすることもなかったので趣味の宝探しに来たらしい。綿流しは楽しみかと聞いてみると笑顔で楽しみだといった。しかし。

「でも、また起こるのかな・・・かな」

うつむいたままぼそりといった。どうしたのかと聞くと。顔を上げたレナの目はまるで感情のない無機質な眼をしていた。思わず寒気がした。下から見上げるように見てきたからだ。

「今年も起こるのかな・・・オヤシロ様の祟り」

「オヤシロ様の・・・祟りだって??」

オヤシロ様はこの雛身沢村の守り神だということを聞いていた。しかし彼女は祟りがまた起きるのではないかと不安がっている。ということはそのあたりというのは連続殺人事件のことなのだろうか。「オヤシロ様は優しい神様じゃないのかな??」

「そんなことはない!!」

突然叫んだレナ。思わず後ろに倒れこんでしまった零。あまりの剣幕に驚いた。レナは立ち上がっており、興奮してか肩で息をしていた。その様子からただ事ではないことを感じ取った。彼女にとつてはオヤシロ様というのは疫病神なのだろうか。と零は思った。

「オヤシ口様はレナたちの後ろにいる！！どこに行っても追いかけてくる！！」

「転校した時だって遠くまで追いかけてきた！！祟りでエレナたちは呪われてる！！」

「もうあんな嫌なことはたくさん！！」

一気に叫びきったレナ。大きく呼吸を乱していた。ものすごい剣幕で睨みつけているためにいくら大人の男性である零でもビビってしまうのは仕方がない。彼女からはさつきが駄々漏れだったのだ。何とかしなければ殺されてしまう。そう感じた零は何とか立ち上がり、レナの肩に手を置いて叫んだ。

「まずは落ち着いたらどうなんだ！！」

するとレナはきよとんとした表情で零を見ていた。まるでさつきまでのことがなかったかのような顔だった。

「ハウ・・・どうしたんですか??」

「え・・・ああ・・・その。なんでもない。すまないね」

そう言っつてレナの肩から手を離す。一体どうなっているんだと思う。ここにいるのは先ほどのすごい剣幕で叫んだ少女。しかし彼女はというとそのことを知らないという。理解のできない出来事に混乱する零を夕暮れが包み込んでいた。

穢れ落とし編 4 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

とうとう綿流しが明日に控えた前日。零は村人たちに色々聞き込みを続けていた。しかし返ってくるのはあまり役に立たないものばかり。やはり皆の知らないところでなされているようなものだった。進展しない捜査に頭を抱える。今年も起こりえる殺人事件。しかし誰が標的になるのかさっぱりだった。

「八方塞だな・・・」

捜査も進まなければ、次の犠牲者となりえるものの予測が立たない。途方にくれている間にもひぐらしの大合唱時は続く。今日も一段と暑く、半袖短パンになってもまだ暑いくらいだった。やはり近隣警察も気になってなのか、前日だということとで配置確認などをしていった。彼らとはまったく接点はなく、自身が探偵だということも言っていない。まあいざとなったら協力し合うがここは自分の仕事を優先させてもらうことにした。すると向こうから足音が聞こえてきた。誰だろうと振り向くとそこには古手梨花がいた。

「おはよう梨花ちゃん。どうしたんだいこんなところに」

「みー。おはようなのです零。零こそ何をしていますのですか??」

「ええっと・・・」

ここで探偵の仕事で操作だよなどとうっかり行ってしまっただけだと思えばいい。二人は近くの駄菓子屋でアイスを手食しながら明日の綿流しについて話していた。

明日は演舞の前に分校の友達と一緒に遊ぶらしい。なにやら罰ゲームありの早食いらしく。女の子にそんな遊びは似合わないだろうと素直に思う零だった。アイスを食べ終わり、また2人で歩き出す。歩いている間にもいろいろ話はあったがほとんど覚えていない。ずっと明日のことを考えていたのだ。そんな例の様子に梨花が疑問に思ったのか、心配そうな顔をして放しかけてきた。

「どうしたのですか零??何かすごく怖い顔をしているのです」

そんなに怖い顔だったのかと自分の顔をなでながら思う。いつもと変わらないと自分では思ったが彼女からしてみればそうではなかったのだろう。

「なんでもないよ。心配かけてごめんね」

笑顔で返した。しかし彼女はぴたっと立ち止まって零のを見ていた。どうしたのだろうと思いついて話しかけてもまったく返事がない。いよいよ心配になってきたところでようやく梨花が口を開いた。

『お前は東京に帰れ』

「え??」

聞いたこともない、大人びた声だった。

『お前はこれ以上ここにとどまればきつと後悔する』

「何言ってるんだよ梨花ちゃん。俺はここに大切な用事があるんだからまだそれが片付かなければ帰れないんだよ」

『あなたが何をしてもこの惨劇は止められない。そしてあなたもそれに巻き込まれる』

「惨劇……??殺人事件のこと??」

『忠告はした。公開するかしないかはお前が決める……土御門零』  
そうとうと梨花はガクリと頭を垂れる。急いで肩をゆすって大丈夫かと声をかける。ゆっくりと顔を上げる彼女はいつもの古手梨花だった。どうしたのかとさっきまでのことを知らないかのように聞いてくる。零はまたかと思いつきながらも先ほど彼女が言ったことを伝える。しかし彼女は知らないというだけだ。それでもレナのこともあって聞いてみた。

「君は何か知っているのかい??この雛身沢で起きようとしていることを」

一瞬きよんとした表情になる梨花。しかし次に見せた彼女の顔は、何か悲しげな表情をしていて、何かあきらめめいた感じが含まれていた。

「先の未来を知っていてもどうしても抗えないこともあるんです……それがとても悲しいのです」

そう言っつて、演舞の練習があるからと走つていく梨花。その後姿をただ見つめているしかできない零だった。しかし彼女が何かを知っているのは間違いないという確信がこの手にあった。

穢れ落とし編 5 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

その夜零はオートバイを走らせて古手神社へと向かった。そこではまだぼんやりとした明かりをつけて演舞場にいる梨花を見つけた。そこには梨花の両親らしき姿もあった。家族で団欒をしているのだろうと見ていたが、梨花の表情は浮かない様子。どうしたのだろうかと思っただ。しばらく眺めていると、両親のほうが自宅のほうへと戻っていった。梨花はそのあとただぼんやりと空を眺めていた。話しかけるチャンスだと思っただ零は茂みから出て話しかける。

「やあ、梨花ちゃん。こんばんは。こんな時間まで頑張ってるなんて感心だね。でも本番は明日がからあと休んだほうがいいんじゃないの??」

「みー、こんばんはなのです。もうこれでお開きにしようかと思っただのですよ」

「そうか、それならよかった」

しかし零には聞かなければいけないことがあった。梨花が本当に何が起きることを知っているのかどうかを。

「梨花ちゃん・・・これから聞くことに正直に答えて欲しい・・・いいね??」

「みー??分かったのです」

真剣な零の表情を察してか梨花も笑みを消した。

「梨花ちゃんには俺が旅行できたということと言っていたね。でもそれは違うんだ。本当は・・・」

零が自分は探偵としてここに来たと言おうとしたところで梨花が遮った。

『言わなくてもいいわ。あなたは探偵としてきたんでしょ??』

「やっぱりあのときの君は嘘じゃなかったんだね??」

どこか大人びた話し方をする梨花がいた。だったらその時言った後悔するということはどうということだろうかと思っただ。

『それであなたは私に何を聞きたいの??』

「俺は一体何に後悔するんだ??教えてくれ」

『・・・』

話すことはできないらしい。だったらほかの事を聞こうとした。

「これから何が起きるかも知っているのか??」

『それは・・・』

何かを言おうとしているのは口がパクパクと動いていることから分かった。しかしそこから言葉が出てこない。よほどのことなのだろうかと思っただ。

「言いたくなかったらいい。今年も何かが起きるといふことなんだろうから。その犯人を突き止めることが俺の仕事だ」

本当は言っただけだった。それで大きく犯人が誰なのか近づけると思っただけだ。未然に被害を止められるからだ。

『今年は・・・私の両親が殺されるわ・・・』

「君の・・・両親だ??まさか・・・」

あんなに仲のよさそうな夫婦が・・・殺されるといふまさかの話。

しかし彼女が自分が探偵だということを知っていることからおかしなことを言っているようには聞こえなかった。しかし梨花の顔には悲しげで、どうせこれは変わらないという諦めが映っていた。しかし零はそれを知ることができてよかったと思っただ。それなら彼らをマークすれば彼らを助けられるだけではなく、犯人も捕まえられるかもしれないからだ。

「そんなに悲しい顔するなよ。それを防ぐために俺が着てるんだろ??もつと俺を頼ってくれよ」

『無理よ・・・あなたはこれまでいろいろな世界で来てくれたわ。』

そのたびに今回こそはと思っただけで結局どの世界でもあなたは事件を解決できなかった』

「なんだと・・・??どういうことだ」

いろんな世界とはなんなのか。いきなり飛躍した話についていけない零。そのことを聞くと梨花は淡々と話してくれた。梨花は皆が言

うとおり、オヤシロ様の生まれ変わりらしい。そしてこの雛身沢村での昭和58年までを無限にループしているという。必ず殺されるという昭和58年の綿流しの日。犯人の顔を知ることなく殺されるという。その中でさまざまな世界に言っては抜け道を探しているという。しかしこの村の風土病という雛身沢症候群によって仲間たちが惨劇の引き金になってしまつらしい。なんでも前の世界では前原圭一と大葉祐樹という少年たちがその病気になったという。それまではあまり公に出ない風土病。零自身にもかかる恐れがあるという。まったく厄介な話だと思つた。

『この話を聞いてもまだあなたはここにいつもりなの??』

梨花は零に選択を迫っていた。普通ならあきらめるほうに賭けるだろう。どの世界の自分もできなかったこと。変わらない運命。しかし果たしてそうか??と零は思う。まだどの世界でもやっていないことはあるのではないか。それはこのようにじかに梨花と話していることじゃないか。どの世界でも何がいつ起きているのか知らない状態で出歩いて結局失敗している。しかしこの世界では違う。最初から誰がどうなるのかがわかる。助け出せるのだ。

「それはもちろん・・・残るに決まつてるぜ」

今度こそ救つてあげたい。どの世界の自分もできなかったことをしあげたい。両親が死ぬことを死んで生きてきたなんてあつてはならないことだと思つた。そんなふざけた運命はここで終わらせてあげたいと思つた。

「運命を変えよう。そのために俺はここにいるんだ」

『できるの??お父さんとお母さんが死なないでいられるの??』

「できる。やる」

そう拳を握つて宣言した。その手の向こうに大きな越えられない壁があるように。それを殴り壊すように。拳を天に向けて突き出した。

「運命は一方通行じゃない」

決戦は刻一刻と迫っていた。

穢れ落とし編 6 (後書き)

次話では零がいよいよ惨劇に挑みます。  
コメント・評価待ってます!!

綿流しが始まるうとしていた夕方。例は古手神社に向かつてオートバイを走らせていた。これからやるうとしていたこと・・・梨花の両親を守る。どの世界でも自分ができなかつたことをこの世界でやり遂げて、ふざけた運命を終わらせてやると思っていた。階段の下にオートバイを止めて石段を上る。そこにはたくさんのお店が開かれ、大人から子供までたくさんの人があった。食べ物を買っている店では子供たちが我先にと購入を求め、それを見て微笑む大人たち。こんな楽しい祭りの裏で古手夫妻が殺されるなんて考えられなかつた。しかしそれは避けようがない運命。だからこそ自分が変えてやると決めていた。

「警察も来ているのか・・・」

ところどころに興宮警察署から来ているのを見かけた。どうやら彼らもこれ以上の犠牲者を出したくないのだろうと零は思った。ふと見ると向日川に梨花とこの前あつたレナが他に6人の少年少女と一緒にいるのを見かけた。どうやらこの前梨花が言っていた罰ゲームありの早食い大会でもやっているのだろうと思ひ話しかけてみた。

「やあ、昨日ぶりだね。楽しんでるかい??」

「あれ??おじさん誰??」

「ハハ、君たちから見れば俺はおじさんか。こう見えてもまだ25歳なんだけどね」

「こちらは土御門零という東京から旅行に来た暇人さんなのです。

「アハハ・・・梨花ちゃん。暇人はひどいな」

「にぱー。それ以外に何かありますですか??」

ポニーテールの女の子におじさん呼ばわりされた零は思わず苦笑いする。まだ自分は若い部類だと自負していたのだがとすこし悲しかった。さらに梨花に探偵だということをはらされなかつたのは助かつたのだが、暇人扱いされたことは悲しかった。それぞれ自己紹介

をする。ポニーテールで中でも発育が行き届いている少女は園崎魅音といい、園崎家の次期頭首だということだ。部活の部長をしているということでの大会を思いついたのも彼女だそうだ。顔を出したときに会わなかったのは部活があったからだそうだ。金髪の少年は北条悟史といい、魅音と同じ年だという。野球をしているようで、今日もその練習のあとらしい。そして悟史の妹だという北条紗都子もいた。梨花と同じ年でややブロンズ気味だという。話している最中もずっと悟史の服のすそを握っていたことからそうなのだろうと思った。方で切りそろえられた黒髪のショートカットの少女は小野ミサキといい、古手家の親戚に当たる小野家の長女だという。黒髪で長髪の少女は泉涼子といい、元は東京生まれだが、とある事情で引越してきたらしい。茶髪でぼさぼさ頭の少年は大葉祐樹といい、御三家候補の大葉家の長男だという。

「零さんも部活に参加しますか??」

魅音が元氣よく誘ってくる。これから古手夫妻の命を守るために行動しなければいけない。その時間は梨花の話だと彼女の演舞が終わったあとらしい。つまり演舞が終わったのを見て夫妻が戻ったところを襲われるのだろうと思っていた。時間はあつたので少しだけ付き合おうと思った。梨花も少しだけなら大丈夫だろうと言う眼をしていた。それから信勝は過激なものだった。たこ焼きの早食いでは零だけが出来立てを食べてビリとなり、火傷したのを覚まそうと飲んだのがなぜか炭酸だったということに激しく痛みに悶絶した。カキ氷では皆が苦しみながら食べきり、一気に食べようと挽回を試みた零は頭痛以外にも齒にしみて結局ビリとなった。

「アハハ、零さん今のところ全部ビリだよ??」

「みー、かわいそかわいそなのです」

「ハウ、頑張らなきゃ罰ゲームが待ってるんだよ??だよ??」

「それは・・・嫌だな」

「頑張りましょう零さん。僕とあなたにはそれほど差はありませんから」

次の種目は射的だった。零はかつて拳銃を使う職についていたためにさまざまなものに手を出していた。そのために射的は得意分野だった。他のメンバーが次々に商品を見事に得ていく。それでもあまり大きくないものばかり。もっと大きいものがほしいだろうにと思った。そう思った零はここは大人の意地を見せてやるうと重い、店の人にお金を渡す。冗談に連なつた人形に狙いを定めて、一気に5発を放つた。それが次々に命中して見事にすべてを取ってしまったのだ。それを見た部活メンバーはすごいと歓声を上げる。どうだといわんばかりに胸を張って威張ってやった。それでとってやった人形を5人の少女たちに渡してやった。喜んだり、恥ずかしがったりしている少女たち。一番緊張していた紗都子もようやく回りに溶け込んでいるようだった。よかったと頷きながら思う零。こんな笑顔を失わせないためにもこれからの戦いに勝たなければいけないと決心する零。

「そろそろ演舞の準備に行かなければいけないのです」  
巫女姿で部活に参加していた梨花が言う。民はそんな李下にがんばれと励ましの言葉を送り、梨花はありがとうなのですといいながら家に戻っていった。メンバーはこれから演舞会場に行くといつて、零を誘ってきたのだが、零にはこれから夫妻の監視をするということが待っていたのだ。だから適当に理由をつけて断つた。  
移動して夫妻がじつと梨花の演舞を見ている姿を茂みから隠れてみている。辺りに誰かがいないか警戒しながらの監視だった。辺りにはどうやら誰もいないようだが、いつ来てもいいように懐にはあそこから愛用している拳銃を隠していた。むこうでは必死に演舞を待っている梨花がいた。思わず見ほれてしまうくらいに清々よく、そして力強い演舞だった。演舞が終わると大きな拍手が離れている。ここまで響いてきた。思わずつられて小さく拍手をしてみた。気づかれないためによかったが、当たり前から不穏な空気が流れてきた。警戒を強める。すると向こうから誰かが歩いてきた。それも1人や2人ではなかった。数十人の男たちが現れたのだ。まった

く顔の知らない者たち。しかし彼らが夫妻を殺そうとしているのだ  
と思った。

「古手さん……少しお話がありますので来てもらえますか??」

「あなた……」

「心配するな。私が話をつけてくる。絶対にやめさせるんだ」

神主には何やら強い覚悟があつた。彼らとどんな関係なのだろうか。  
不審に思った零は男たちと一緒に行く神主のあとを追つた。

着いていくとついたのは古手家だつた。大きな居間にはいつていく  
彼ら。どうしようかと思つた零は思い切つて下にもぐりこみ、聞き  
耳を立てた。

『もう一度考え直してもらえませんか』

『それはできない。こんなことをして娘に辛い思いをさせたくない』

『娘さんの血……つまり女王感染者の血で多くの患者が助かるか  
もしれないんですよ??』

『そんなことは何度も聞いています。でも一向に解決しないじゃな  
いですか。いくら待てばいいんですか??それに私は娘が女王感染  
者だとか、オヤシロ様の生まれ変わりとかということであつたらしい思  
いをして欲しくない。ただ1人の少女……古手梨花として幸せにな  
つて欲しいんです。だからその話はもうお断りします』

一体何の研究に手を貸し合つていたのだろうか。その研究に使われ  
ていたのは梨花の血だという。そして梨花の父親はその研究にはも  
う娘の血を提供しないとはっきりと断りを入れた。しかしそれでも  
喰らいつく男たち。病気が治るといふことは、梨花が言つていた雛  
身沢症候群だろうかと思つた。そしてついに切れたのか男たちの叫  
び声が響く。

『これだけ言つて言うことを聞かないとなればもはや殺すまで』

『お前たちは人をあやめてまでそんなふざけた実験を続けるのか?  
?』

『多くの人の命を救う術への鍵を捨てるおまえに言われる筋合いは  
ない』

上では男たちの足音が激しくなる。それを聞いていた零はまずいと思ひ、一気に床を自動式拳銃で撃ちもろくなつたところを立ち上がりながらぶち抜いて中に入った。

「なんだお前は!!」

「まさか今のを聞いていたのか??」

男たちはなにかの戦闘服を着た、手には拳銃を持っていた。神主は追い詰められ、それでもかたくなに覚悟を決めていた。零は懐からもう一丁の自動式拳銃を取り出し、構える。お互いに拳銃を構える間に緊張が流れる。そして汗が床についた瞬間例の拳銃が火を噴く。だんだんつと激しい銃声が連続でなると、男たちが拳銃を取り落としていた。呆気にとられる男たちの動きが止まったところで零は神主を連れて外に逃げ出した。

必死に走る2人。すると川岸にまた別の男たちと神主の妻がいた。というよりも今にも川に突き落とされようとしていた。

「待ちやがれ!!」

片方の拳銃が火を噴いて彼女の方に乗せていた男の手に命中し、男は激しく叫ぶ。そしてひるんだ隙にほかの男たちを拳銃で殴って気絶させた。妻のほうはぐったりとしていて、どうやら眠らされているようだった。二人を連れて零は森の中を走っていた。園崎家に行けば何とか匿ってもらえると思つたのだ。後ろから夫妻がついてきていた。先ほどようやく気がついた妻のほうは何が起きているのか分かつていなかったが何も岩ずついてくるようにと零は言っておいた。夫のほうも付いていこうといつたのでそれに従っていた。

「ここまですればしばらくは大丈夫でしょう」

片で息をする零と同様に夫妻にも疲労の色が濃かった。今頃梨花は園崎家に向かっているだろうか。彼女に例は園崎家で落ち合うことを約束していた。

「あなたは一体何者なのですか??いきなり私たちを助けてくれたのには感謝していますが」

神主が聞いてきた。不審に思つるのは当たり前だろうと思つた。ここ

で簡単に園崎から連続殺人事件の解決を依頼された探偵ですといえ  
ば簡単だがこれでは面白くない。ここまでできたのは梨花のおかげ  
だからだ。だから零はあえてこういった。

「オヤシロ様に導かれてきたただの探偵です」  
にっこりと笑って言った。

しばらく休んだあと再び3人は歩き始めていた。夫妻は例が言った  
オヤシロ様に導かれてきたということに指し所は不審に思っていた  
が、見ず知らずの人が助けしてくれたのだからそうかもしれないと思  
っていた。もう少しで園崎家に着く。そう誰もが思っていた。しか  
しここでも運命の高い壁が零の前に立ちふさがった。目の前から男  
たちが現れたのだ。それも先ほどの比ではなかった。すでに囲まれ  
ていたのだ。拳銃を構えようにもその前に誰かしらの拳銃の弾が当  
たってしまう。どうしようかと考えている零に男が話しかける。

「まったく、こちらの計画を邪魔されるとは計算外だぜ」

「誰だお前は……」

「ほいほいというわけないだろ??だがどうせ死ぬ運命にあるんだ  
から冥土の土産に教えてやるよ。小此木だ」

「俺は土御門零」

「なぜお前は俺達がその夫妻を殺すことを予測できた??誰にも  
漏らしていないはずだが??」

訝しげに見る小此木。零は拳銃を構えながら言う。

「オヤシロ様だよ……」

「何??」

「オヤシロ様に教えてもらったんだよ。ものすごいかわいい神様に  
教えてもらったんだよ」

もはや叫ぶしかできなかった。ここを打開するには隙を突くしかな  
かった。それを聞いた小此木はあっけに採られたかのようにぼか  
んとしていたがすぐに腹を抱えて笑い始めた。そんなことをいわれて  
笑わないものはいないだろう。しかしそれは真実だった。彼女はオ  
ヤシロ様の生まれ変わりだ。

「あははははつは！！それは傑作だ！！確かにオヤシロ様なら古手夫妻を守つてるかもしれないな！！」

そんなことはない。ここに住む村人みんなを見守っているのだといいたかった。きつと居間もそこにいるだろうオヤシロ様のためにもそしてできた隙について霊は小此木たちに向かって一気に拳銃を発砲する。次々に利き腕を撃ち抜かれて拳銃を落とす男たち。振り向きざまに後ろのものたちにも発砲する。いきなりのことに反応が遅れた男たちの発砲よりも早くたまが到達する。

「走れ！！」

叫ぶと夫妻は死に物狂いで走りだす。そして零は残つて男たちの相手をすることになった。そして祈つた。

「オヤシロ様よ・・・いるなら俺も救つてくれないかね」

ぼそりという例は男たちに向かって突進していった。数人が小此木の指示で負債を追う。彼らに向かって発砲すると足を押さえて転がる。しかしそれによって弾が切れた。ちつと舌打ちをすると肉弾戦となった。

「うおおおおお！！」

零はかつて後輩だった赤坂という男とよく組み手をしたものだと思ひ出しながら戦っていた。拳銃を使えなくなった男たちは数で零に襲い掛かる。そんなこと関係ないといわんばかりに力を見せ付ける零。向かってくるものたちを投げ飛ばしたり、殴る蹴るの攻撃を繰り出す。殴られても倒れずに倍返しで吹き飛ばす。周りには多くの男たちが気を失って倒れていた。そして目の前にはまだ体力十分という小此木と息も絶え絶えの零がいた。

「まったくお前は化け物か??どこでそんな銃と格闘技を覚えたんだ??」

「ふん！！かつて警視庁に勤めていたときさ。今じゃあポカしてやめたんだがな」

自嘲気味に言う零。警視庁という言葉に驚く小此木。しかし彼には負ける気はさらさらなかった。小此木が地面を蹴って走ってくる。

それを向かい打つ零。お互いの拳が交錯し、頬をえぐる。しかしその瞬間例の頬からバギっという鈍い音が聞こえた。何より彼の手が異様に硬かったのだ。手袋をはめている小此木。まさかとは思ったが今の攻撃で分かったこと。

「まさか・・・鉄板をはめ込んでいるとはな」

「ご名答。センチで鍛えた俺のこぶしはちつとばかり効くぞ?」

「鉄板はきついぞ・・・」

「だったらおとなしく殺されな!!」

そう言つて再び攻撃してくる小此木。拳をかわしながら反撃する例だが、同じく戦闘能力が高い小此木はそれをかわす。お互い攻撃が当たらないまま時間だけが淡々と過ぎていく。しかし先ほどまで指示だけを出していた小此木と戦い続けた例では体力の残量は違っていた。とうとうひざをついてしまう零。片で息をしているがそれでもまだ零よりは動けるといった小此木。ついに小此木のけりが横つ腹をつく。中にも鉄板が仕込まれているのか、零のあばらが何本かもつて行かれた。激しく咳き込む零にお構い無しに次々と攻撃を繰り出す小此木。反撃の攻撃も鉄板入りの拳との工作で腕が砕ける。

「がああああ!!」

ぐらりと体制が崩れる零だが、その腹にひざがめり込む。一気に空気が吐き出され、地面で悶絶する。臓器がいくらか破裂したのではないかと思うくらいの痛みがあった。普通のけりでも十分な威力の小此木のけりだが、それに鉄板が加われれば殺人的ものだった。今にも意識を失いそうになる。酸素が不足し、酸欠状態で頭ががんと痛む。すると小此木のトランシーバーに連絡が入った。それを聞いて小此木はにやりと悪魔のような笑みを作る。それを薄めで見た例は背筋が凍った気がした。

「任務完了だ・・・」

ただそれだけを告げた。しかし零にとってはそれで十分だった。それは例にとつて運命に敗北したという判決だった。すなわち零はまた守れなかったのだ。古手夫妻を救出することができなかったのだ。

向こうには園崎の者たちがいるはずだった。しかしそこまでたどり着けなかったのか。

「あんたの仲間なら俺達が始末しておいたさ。色々邪魔になるからな」

あれだけ用意周到にしてきたつもりだったのに。もう少しで運命に勝てると思っていたのに。かちやりと拳銃が頭につけられた。死ぬのだろうか。そう唐突に思った。もしかするとこれが彼女の言った後悔するということだろうか。確かに死ぬのは嫌だ。しかしあそこで逃げ出してあの時なせ帰ってきたのかと後悔するよりはましだった。最後の力を振り絞り思いっきり小此木の顔面にけりを入れる。叫び声を上げながらのけぞる小此木を無視して走り出した。多田小Pのときは死にたくないと思って。後ろから誰かが走って追ってきた。おそらく小此木の指示だろう。そして拳銃の発砲音。弾が肩を掠める。顔をゆがめながらも走り続ける。そしてとうとう足が止まった。はれた目ではまったく方向が分からずに、ただ闇雲に走っていた零。目の前にはがけがあり、下には川が流れていた。後ろにはとうとう追いついた男たちが拳銃を構えた。どうする。かすれ行く意識の中で自問する。

「俺は運命に屈しない！！絶対に彼女だけでも救ってみせる！！」  
零は叫んだ。

「それが俺の罪滅ぼしだから！！」  
そう言っただけでぐらりと体を空中にゆだねた。支えの失った体はただがけから落ちていった。そして冷たく、何者をも飲み込む川の中へと零は消えて行った。

穢れ落とし編 7 (後書き)

コメント・評価待ってます!!

## 穢れ落とし編 8 (前書き)

最終話です。

次回時変わり編は明日から投稿したいと思います。

たくさんコメント評価待ってます。

「ううん・・・」

零が目を覚ました。ここはどこだろうと最初に思った疑問だった。目の前には白い天井が。そして自分は真っ白な布団に寝かされていた。どうやらここは病院らしい。

ゆっくりと起き上がるとずきりと頭に激痛が走った。

「今はいつだろう・・・」

そう思うと同時に思い出す。雛身沢村で起きた事件。結局解決できなかった事件。あの夜小此木という男と戦った。結局敗北し、さらには夫妻の命も守れなかった。がらりと開けられた扉の向こうには女性と少年がいた。零と目が合うと瞳に涙をためて走ってきた。

「あなた!!」

「パパ!!」

妻の真澄と息子の佑介だった。二人は零に抱きつき涙する。零は何がなんだか分からずに2人をなでるしかできなかった。ようやく落ち着いたところで話を聞くと現在は昭和58年・・・つまり丸3年は眠ったままだったのだ。川から発見され、急いで病院に運ばれ手術されたという。一命は取り留めたものの、ノウへの影響があり、いつ目を覚ますか分からないといわれたそうだ。そうして今日ようやく目を覚ましたということだ。そしてカレンダーがあることに気がつき見てみると。

「昭和58年・・・6月20日・・・まさか」

そのまさかだった。彼女がいつていた殺されるという年ではないか。こうしてはいられないと思ひ、ベットを抜け出して上着を羽織る。何をしているのだと真澄に言われるが。

「助けを求めている子がいるんだ」

「一体誰なのよ!? それにあなたは病み上がりでしょ!?!」

「絶対に行かなければいけないんだ!! その子が殺されてしまうん

だ!」

「どういうこと・・・??」

詳しいことは今言っている暇はなかった。だから帰ってきたら必ず話すといった。なおも食い下がろうとした真澄だが、例の真剣な目を見てそれをあきらめた。

「だったら・・・絶対に帰ってきてくれる??こんなに傷つかないで・・・」

真澄の瞳にはまた涙がたまっていた。自分はどれだけ妻に苦勞をかけてしまったのかと後悔した。ここでようやく分かった。これが彼女が言った後悔するということだと。確かに後悔が大きい。しかし自分が行かなければいけない。

「分かった・・・必ず帰ってくる。今度は笑顔でな」

「うん・・・」

涙はあつたが笑顔になってくれた。よかったと思った。そして息子の佑介の元に行く。

「パパはこれから人助けに行かなきゃいけないんだ。だからまた佑介とままだに悲しい思いさせちゃうけど、それをまず謝っておきな。

ごめん。でも行かなきゃいけないんだ。だからママのこと守ってくれるか??」

「うん!!守るよ。僕がママのこと」

「それでこそパパとママの子だ」

頭をガシガシとなでてやった。そうして零は立ち上がり、外に出る。そこにはずっとそこにあつたかのように零のオートバイがあつた。

すでに着替えていたのはいつでも着替えができるようにと真澄が持ってきていたからだった。依然もっていったリュックの中には以前と同じものがしっかりと詰め込まれていた。まるで真澄がいつでも零が出かけられるように。そしてオートバイの近くにはこのことかいは不釣合いな巫女服の少女がいた。どこかで見たとのことのある少女だった。零の視線に気がつく。

「あうあう、いきなり現れたのです」

「何を言っているんだい??」

「あうあうあうあうあう、なぜか梨花以外にも見えているのです。零は雛身沢症候群なのです!!」

慌てる少女がいった言葉。梨花……。それはかつて零に色々なことを教えてくれた子だった。

「君は……」

「あうあうあう……。あう??ばほぼくは羽生というのです」

「は……にゆう??」

聞いたことのない名前だった。しかし梨花と関係があるということのは確かだった。

「君は梨花ちゃんを知っているのかい??」

「そうなのです!!零!!僕たちを!!梨花たちを助けて欲しいのです!!」

「梨花……。たちつてことは、今年が梨花ちゃんが殺される年??」

「そうなのです!!それに零がこの年に目を覚ましたのはこの世界が初めてなのです!!」

「まさか……。それじゃあ今までの世界では殺されたあとに目を覚ましていたということか??」

「そうなのです。今までは大災害が起こったあとに目を覚まし、後悔に絶望していたのです」

「それでも奇跡は起きた……」

「そうなのです!!これは奇跡なのです!!今までけして起き得なかった奇跡……。今回の世界が最後なのです!!だから零!!力を貸してほしいのです!!」

必死に頼み込む羽入。零はすでにその答えを持っていた。それは3年前のあのときに誓った答え。

「もちろんだ!!」

そう言ってエンジンをかけ、アクセル全快に踏む。爆音を響かせ走り出す一台のオートバイ。

「さあ行く……」

風を切つて走るオートバイ。向かう先は雛身沢村。かつて無様にも敗北した運命という壁に再び挑戦する探偵がいた。その名は土御門零。

「祭囃子の世界へ!!」

「ハイなのです!!」

(完)

時変わり編 1 (前書き)

大災害後の話です。楽しんでいただけるように頑張りますのでコメント・評価待ってます。

のどかな雰囲気が漂う自然に囲まれた場所・・・旧雛身沢村。しかしここにはすでに人々はすんでいなかった。かつて昭和58年の6月。前代未聞の大災害がここ雛身沢村を襲ったのだった。生き残った村人はたったの1人だった。その人物も当時まだ中学生だった。その少年も今は何をしているのかも分からない。

そしてここ旧雛身沢村にとある大学の卒業生の団体がやってきていた。彼らはとある大学のオカルト研究サークルのメンバーである。卒業旅行としてかつてここでおきたオヤシロ様のたたりというのを知りたいということやってきていたのだった。

とはいえ止まるどころなどもちろなかったために村にあるという古手神社に止まろうと話が決まっていた。そこに止まればもしかするとオヤシロ様に会えるかもしれない。そんなことも考えていた。

「それではこれから旧雛身沢村に入るけれども、くれぐれも勝手な行動はよしてくれよ??」

「分かつてるわよ。いちいち言わないで」  
リーダーとして指揮をとっているのは黒縁眼鏡に黒髪というまじめそうな青年は元部長の小田島唯で、化粧に乱れがないか手鏡で確認しながらいちいち確認を取る唯に文句を言っているのは佐々木奈々で、栗色のロングヘアである。

まあまあと奈々を宥めているのは桜田柊子で、桜色の髪でショートカットである。分かったわよとふんぞり返る奈々だ。そんな様子を遠目で見ていて、早くしないかというのは斉藤達哉だ。金髪のツインヘアが特徴だ。

そうだなという唯は荷物を持って、森の中を先頭に立って歩いていく。他のメンバーもそれに続く、夏だということでも汗がにじんできている。おのおの水分を取ったり、タオルで汗をぬぐったりなどして進んでいく。

ひぐらしの大合唱が響いている。

雖身沢の名物としても有名だったひぐらし。しかしその村はとうの昔に消滅してしまった。ここには入れたのも奇跡的に昨年解放されたからだった。何でも警察と探偵が入って調査をして、有毒ガスによる全滅ではないという見解を発表したのだ。その見解は受け入れはされなかったが、ここが危険ではないということが分かったために開放されたというわけであった。

「でも、こんなところに来て何があるのよ。まったく暑いだけよ？」

「そう言わないの、奈々ちゃん。オカルト以外にもここは自然がいっぱいだから仕事だらけの前にリフレッシュできるよ?？」

暑いためかぐつたりとしていている奈々を励ます柊子。あたりは大自然に囲まれており、空気が彼らのいた都会よりも澄んでいた。ところどころ家が住む人を失った今でも残っていた。しかし中に入ることはなぜかためらわれた。

4人は大自然の中での昼食をとったあとに森の中を探検した。着いた場所は鬼ヶ淵沼。どす黒いそこは現実とはまったく違うところとつながっているような雰囲気を出していた。それに興奮しないオカルトサークルの彼らではない。写真をとったり、木の棒をつつこんだりと色々調査してみた。もちろんそれ用の道具も持ってきていたのだ。しかし、長くいればやばい気がしてそそくさと退散してきた。ひぐらしの鳴き声が小さくなるにつれてあたりが暗くなる。急いで彼らは止まる場所である古手神社へと向かった。

するとなぜか神社の石段の前に大型バイクが置かれていた。イタリア製の有名モデルだった。一体こんなすごいものを持つ人がなぜ田舎町に来ているのだろうかと思議に思うメンバーだった。

不思議に思いながら上に登っていくとそこには墓を前にして線香を立てている1人の男性がいた。茶髪の背の高い男性は唯たちの気配に気がついた用で振り向いた。イケメンの部類に入るその整った顔と大人だという雰囲気をかもし出している男性。始めは驚いた表

情だったがすぐににっこりと笑った。

「どうしたんだい君たち??こんなくらい時間にこんなところで」

「俺たちここに卒業旅行で来たんです。それで今日はここに止まるうかと思ひまして」

唯が男性の質問に答える。それを聞いて驚いた表情にあつた男性はすぐに笑顔で言った。

「俺もそのつもりだったんだ」

彼らはまだここが惨劇の舞台になるとは思っていなかった。

## 時変わり編 2 (前書き)

とうとう4万アクセス来ました!!

ここまで来るのに皆さんのお力のおかげです。

まだまだ先が遠いこの作品ですが、最後までお付き合いしていただければ幸いです。それでは時変わり編第2話どうぞ!!

## 時変わり編 2

彼らはまだここが惨劇の舞台になるとは思っていなかった。

園崎圭一・・・それが男性の名前だった。旧雛身沢村の大災害から唯一生き残った元住人。それが彼らの興味を引いた。矢次に質問する唯に淡々と答える圭一。質問に答えるとき、わずかに曇る表情。やはり何年たつても心の傷は治らないのだ。

「ほどほどにして置けよ唯。園崎さんだって思い出したくないことだつてたくさんあるんだから」

「分かつてるよ達哉。すいませんでした園崎さん。おかげで少しかつてのことが分かりました」

「お役に立てたなら良かったよ。明日は俺が少しここを案内しよう」それにはみなが喜んだ。やはり知らないことは知っている人に聞くに限る。この日の夜は持ってきていたものの調理でカレーだった。どうやら圭一は料理がからつきらしく、かつてはなべを爆発させてしまったこともあるらしく、1人待つこととなった。

出来上がった料理と酒を囲んで皆で輪になって食べることにした。

昔はカレー好きの先生がいたものだと思いつながら語る圭一。色々当時のことを話してくれた。自分が災害が起きた年の5月ごろに転校してきたこと。来る前は東京にいて灰色の生活をしてたこと。それがたつて児童虐待事件を起こしてしまったこと。ここに来てからが打って変わって色付いた生活ができたということ。毎日の部活が楽しかったこと。部活の罰ゲームでよく女装をしたこと。綿流しのときの部活がいつもの日ではなかったこと。色々な過去のことを話してくれた。それを話しているときの圭一の表情はどことなく楽しそうで、懐かしそうで、そして悲しそうだった。

そして興味深い話が唯から出てきた。

「みんな・・・ここ雛身沢では鬼隠しつてのがあつたらしんだ」

それを聞いた圭一は分かりやすいほどに反応した。しかしそれに気づいたのはいなかった。

鬼隠し・・・毎年綿流しの日に一人が行方不明になること。けして見つかることはないことや昔雛身沢には鬼が板ということから鬼隠しと呼ばれるようになったのだ。いなくなった彼らは一体どんな気持ちでいるのだろうか。否死んでしまふから何がおきたのか分からないだろうか。

「それがあの連続怪死事件で注目されたってこと??」

酒で酔っているのか投げやりな態度で聞いてくる奈々。それに頷くこと答える唯。かつての新聞などからとってきたのだろうか。唯の取り出したノートには雛身座和解し事件についてのことや歴史に関するものがびっしりと書かれていた。

よく書いてるなと横目で見ている達哉。するとガラガラと扉が開けられた。一体誰だろうと思うとゆっくりと姿を現したのは見知らぬ女性だった。肩からはカメラを紐で引っ掛け、リュックをしょっている黒髪ロングヘアの女性だった。

「どちらさまでしょうか??」

おずおずと尋ねる柊子。くすりと微笑を浮かべる女性。

「田無三四よ」

時変わり編 3 (前書き)

大変遅くなりました、すいません。  
それでは時変わり編 3をどうぞー!!

翌日圭一に連れられ唯たちは雛身沢を歩いてきた。快晴に恵まれ、太陽の日差しに思わず目をつぶってしまいそうになる。

しばらく歩いていくと、ツルが所狭しと巻きついた一軒の家の前についた。

ここに車で見た家よりも大きなものだった。

「結構大きな家ですね。こんな田舎に誰か金持ちでも住んでたんですか??」

興味心身にカメラに次々と収めていく唯が尋ねる。

少しは自重しろと達哉が言うが、まったく収まる気配はない。

まあいいんじゃないかと宥める柊子。

「ここは・・・かつて俺の家だったんだ」  
懐かしそうに見る圭一。

「そうなら、あなたは結構なお金持ちだったの??」

「おい、奈々。何で今そんな質問を」

「うるさい、達哉。私はただこの人の過去がどうだったか聞いているだけでしょ??別に金持ってそうだったらくつつこうだなんて野暮な考えはないわよ」

いつもそうやって男を拾うから誤解するんだよな・・・。

嘆息しながら達哉は思う。

「そんなに金があったわけじゃないんだけどな。まあ、ここにすんでた人たちよりはあったかもな」

泥で汚れて、風化しつつある壁をなでながら言う。

「御三家つてのもあってそれらのほうが金あったな。特にこの雛身沢を治めていた園崎家なんてはすごかったな・・・。友達に園崎のやつがいてさ、年上なのに遊びはできても勉強がな・・・」  
よく教えてやったものだと思ふ圭一が言う。

その人は今どうしてますかなどと無責任なことは聞くつもりはなかった。

目の前の男性からこれ以上彼女のことは聞かないでくれというオーラが出ていたのだ。

きつと今の表情からして、もうこの世にはいないのだろう。

「さて、次に行くか」

圭一に続いて、再び歩き出した。

次にやってきたのはすでに屋根の一部が破損し、大きな穴が開いた学校だった。

中に入ると木造だからか、そこから雑草やらが生えていた。

蜘蛛の巣だらけで奈々は入りたくないといい、仕方ないと達哉と一緒に待っていることになった。

「ここは圭一さんの学び舎ですか??」

「ああ、こうやって中に入るといつもとラップがあつたもんだな」

「トラップですか!??」

「くくく、そうだよな。普通はそう思うよな」

しかし圭一にとってはそうではなかった。

いつもの待ち合わせの水車小屋から6人で学校へと向かう。

1人はかわいいものが見つかったことを誇らしげに話し。

あのパンチは痛かった……。

1人は昨日の自分の醜態について傷に潮を塗るように言ってくるわれらが部長。

あのコスプレランニングは黒歴史だ……。

1人は自分のことについて色々聞いてくる危なっかしいやつだった。

なかなか視線を合わせてくれなかったのはなんでだなんて当時は思ってたけど今となれば……分かる。

もつと違う世界になってたかもな……。そうなれば俺はどうしているだろうか??

1人はなんだかよくオカルト雑誌開いて、圭一と同じく過去と決別

するためにここに来た少女だった。

何かと調べ物につき合わされたな……。

1人はお互いに好きな子について語り合った男友達。

あのロリコンはすごかったな……。でもなんでもあの時俺達KYって言われたんだ？

そんな6人中に入れば待っていたのは一人の少女によるトラップの数々。

はつきり言つてよくあんなにもアイディアがあつたものだ……。今ならあいつをスカウトしてもいいかもなんて思えるぞ……。まさか彼らが今自分が何の仕事をしているかなんて予想もできないだろう。

そして一番悲惨な死を遂げた年下の女の子。

彼女の死を聞いたときは、むごい……。それだけだった。腹を切り開かれた上体で発見されたのだった。

「圭一さん？？どうしたんですか？？顔が真っ青ですよ……」心配そうに話しかけてきたのは柊子だった。

額を触つてみると確かに嫌な汗がジトつとしていた。

おそらくあのときのことまで思い出してしまったからだろうと思つた。

何年立つた今でも心が握りつぶされそうな痛みが走る。

「大丈夫……。少し思い出しすぎた」

「すいません……。俺が余計なことを聞いたばかりに……」

「そんなことないさ。それよりここにはカレー好きの先生がいてな。3食問わず年中カレーの先生がいたな。その人カレーについては地獄耳でさー、ちょっとしたことでも教室まで走ってきたな」

部活で悪口を言い、延々と説教を食らったことも話した。

「あれは地獄だった……」

「大変だったんですね……」

同情の意味を込めて言う唯。

そろそろ行くかと外へと向かう3人だった。

時変わり編 3 (後書き)

コメント・評価をいただければ幸いです。

時変わり編 4 (前書き)

圭一「離身沢はあの時と変わらないところと、大きく変わってしまったところがあるな・・・」

海斗「そうですね。やはり変わらないでいてほしいものもありますよね」

圭一「ああ、それが思い出深いものであればあるほど・・・」  
海斗「それでは、時変わり編 4をどうぞ!!」

外に待っているはずだった田無三四・佐々木奈々・斉藤達哉の姿がなかった。

最初は3人だけで観光にでも言ったのだと思い、唯と柊子は圭一に連れられて、ゴミ処理所にきていた。

今はきれいに排気され、まったくゴミは残っていない元不法投棄の場所。

「あの時は本当にゴミ山だったんだぜ??」

辺りを眺めながら言う圭一。

こんなきれいなところがゴミの不法投棄所だったなんてとてもじゃないが信じられないという唯たち。

なんせゴミのない地面にはきれいな草花が咲いていたからだ。

確かここであったよな・・・埋まったケンタ君人形を拾ったのは・・・。

圭一の目にはあの頃と代わらない、ゴミ山が映っていた。

足場があるかどうかも分からないゴミ山。

踏み外せば小さな怪我だけではすまないような場所だった。

しかし一番高いところに立っているのは白のワンピースを着たオレンジ色の髪をした少女だ。

なぜか鉈を持ち、自分を見ている。

殺されるかと思っただぜ・・・。

屈託のない笑顔を見せ、自分を秘密の基地へと案内してくれた少女。そこには十分生活ができる用意がなされていて、驚かされたのを覚えてる。

そう・・・まるで昨日のように。

そっと取り出したのは真っ赤の燃えるような赤いビー玉。

ここで怪我を追いながらも彼女と手に入れたきれいな思い出の詰まったビー玉。

『えへへ、この赤いビー玉、まるで圭一くんみたいだね。燃える太陽みたいで、暖かい感じなの』

『そうか?? だったらこの蒼いビー玉は みたいだな。なんていうか、雛身沢を包み込む、蒼い空って感じ』

『ハウ、まるで圭一くんとわたしと一緒にいるみたいだね。だね』  
『ノノノ何恥ずかしい事言うんだよ』

『圭一くんは・・・嫌なのかな・・・?? かな』

『・・・そんなわけないじゃんかノノああ、もう恥ずかしいからこういう話はまた今度!!』

『いつもはこういう話は圭一くんからするのにね。それじゃあ明日は残ったビー玉をみんなに渡そうね』

『ああ、そうだな。きつとみんな喜んでくれるさ』

その赤いビー玉が太陽の光を反射して赤く光る。

それを見ている圭一に気がついたのか、唯が聞いてきた。

「圭一さん、それは・・・ビー玉ですよね」

「ああ、これは俺の・・・俺達の思い出が詰まってるんだ。ココデな、同級生の女の子と一緒にとったんだよ。あの時は怪我しながらだったからな」

たははと過去の失敗談を混ぜながら話す圭一。

そんな圭一のこの場所を寂しそうに見る表情を横で見ると唯たち。

きれいになったのはいいことだが、やはり思い出が一つずつ消えていつているのを見るのはつらいのだろうと思った。

## 時変わり編 4（後書き）

圭「もう少し思いでめぐりかな??」

海斗「いえ、そろそろ大きく展開が変わります。またオリキャラ出しますんで」

圭「それにこの作品は時変わり編で終わりなんだよな??」

海斗「ええ、この後のことはひぐらしのなく頃に 解で執筆したいと思っています」

海斗「それでは皆さん、また明日お会いしましょう。コメント・評価待ってます!!」

時変わり編 5 (前書き)

海斗「それでは時変わり編ですが、一気に展開を変えます」

圭「いよいよ何かが起こりそうって雰囲気だな」

海斗「それでは本編どうぞー!!」

## 時変わり編 5

時間は経ち、現在は夜の10時を回るところだった。しかし彼らを包む雰囲気は重いものだった。

いまだ戻ってこない田無たち。

携帯にかけてもまったく通じず、田無との連絡手段を持たない彼らがこの夜、さらに雨の降りしきる中を搜索するのは危険極まりなかった。

唯の傍で泣きじゃくっている柊子。

そんな彼女を慰める唯。

彼らの周りには残っていたカレーを食べた皿のあとと缶ビールの空き缶があった。

「しかしどうしたんだろう。こんな天気の中じゃあ、きっと奈々のやつきつと切れてるだろうな」

「そうなのか?? まあ、女の子だからな。そうなら田無さんもだな。これは達哉君は大変そうだな」

確かにと苦笑いの唯。

しかし心配の色は表情から消えない。

雨が強くなり、古手神社の境内の屋根を強く叩く。

とき切なる雷とその閃光で視界が真っ白になる。

これはまずいことになってきたなと思う圭一。

そして突然鍵をかけておいたドアがドンドンとたたかれる。

ヒィッと柊子が悲鳴を小さくあげる。

油井が彼女の口を手でふさぐ。

キンっと言う金属音が鳴る。

なんだろうかと油井が振り向くとそこには背中にあった紫色の風呂敷に包まれていた棒状のものを持つ圭一がいた。

その棒状のものは、日本刀だった。

どう見ても真剣であり、凶器ともなりうるものだった。

それを腰の高さに構え、ゆっくりと叩かれるドアに近づく。

「下がってる……」

何も言わずに無言でコクリと頷く唯は柎子を庇いながら後ろへとゆっくり下がり、圭一とドアから距離をとる。

そして勢いよくダンと開けると同時にその刀の切っ先を目の前に現れた人物に突きつける。

「おいおい待ってくれよ……。俺は怪しいものじゃないって……」

「こんなところに、しかも夜遅く来ることから怪しんだ。さあ、名を名乗れ」

低く、冷たい声色で尋ねる圭一。

油井たちにはそんな尋問じみたものに圭一がなれているように感じた。

さらに剣術も寸のところで止めるなど、かなりの腕なのだろうと感じていた。

「ああ、分かったよ。俺はジャーナリストの武田悠二だ。ほら、このとおり名刺もある」

懐から財布を取り出し、名刺を取り出す武田。

それを受け取り、圭一は頷くと中へと入れる。

すまねえなといいながら入る武田は全身が雨でびっしょりだった。

「一体こんなところに何をしに来たんですか??」

唯が警戒しながら聞く。

タオルを受け取り、頭を拭きながら着替えをする武田。

「ちよつと気になることがあつてな……」

「気になることって??」

「お前さん、この雛身沢がどうして全滅したか……。知っているか??」

ピクリと圭一が反応したのを唯は見逃さなかった。

武田は圭一がこの出身だと知らないから平気で過去の話を引き張り出せるのだろう。

「俺はこの村が災害で滅んだとは到底思えないんだな」

「どういうことですか？新聞などには確かに災害で滅んだと書いてましたが」

武田の話を信用できないという唯。

しかし対照的に、圭一はその話しに興味を持っていた。

「もう少しおまえの知っていることを話してくれ」

「そういうお前さんも、もしかして俺と同じ考えのやつか」

頷く圭一を見てにやりと笑う武田。

いいのかと不安がる唯。

しかしそんな彼のことを無視して圭一と武田は二人だけではなしを始める。

どれくらい時間がたっただろうか、腕時計を見るともう深夜を回っていた。

話を終えた2人は意気投合してビールを飲んでいた。

そんな彼らを尻目に結いは何度かドアを開けては帰ってくるのではないかとまっていた。

しかし一向に戻ってくる気配はなかった。

「どうした唯君、お友達でも待つてるのか？？」

「ええ、この雨の中ですから・・・心配で」

「俺が入ったときから雨が降り出したからな。でもそんなやつらは見てないぞ？？」

腕組みをしながら思い出そうとしている武田。

もしかしてと想っていた唯だが、外れらしい。

しかし奇妙な人だよな・・・武田って人。

かなりやせ細っていて、目の下には熊ができていた。

まだ40代だというのに少しばかり白髪が目立っている。

それでも瞳にはジャーナリストとしての炎が灯っている。

「へっへっへ、少し気分が良くなってきたから面白い話でもしようかな？？」

「面白い話ですか??」

「ああ、もしもの話だ。お前さんの連れは鬼隠しにあったのかもな」  
「鬼・・・隠しですか??そんな馬鹿な。だってあれは雛身沢の綿流しの火に起きたことであって・・・」

圭一の表情には悲しみがあり、武田はヒッヒッヒと不気味な笑いを上げている。

「そういうことさ。今日はなんたって綿流しの日だ」

ノートにもあるが綿流しの日、過去4年間は1人が死に、もう1人が行方不明になる事件が起きていたのだ。

しかしそれは5年目の事件を最後に村が全滅したことで終わりを告げた。

それが自分たちが入り込んだことでまた怒るとは思えなかった。

しかしそういうのが好きな自分たちにとってそれは興味がある反面、恐怖するものでもあった。

この日とは面白がっているのか??それとも何か意味があつていつているのか・・・。

まったく持つて読めない男だった。

「もしかしたら鬼ヶ淵沼から現れた鬼が3人のうち、2人を襲つてるかもな。とはいえ、俺はあの事件は同一人物だと思つている」

それは誰でもそうだろう。だって傾向が同じすぎる。

「それは俺も同感だ。それに俺の知り合いで探偵だったやつが記憶喪失の状態で雛身沢から戻つたつて言うのがある。傷だらけだったこととその年に起きた古手夫妻殺害からして、犯人に口封じでやられたんだらうな」

「それで??その人は今??」

「療養中だな。記憶がいつ戻るかも分からないらしい」

ふうと一息つく圭一。

一日中歩いたのか、それともいろいろ思い出すことがあつてか疲れしているようだった。

それで3人の捜索は明日から始めようと決まり。  
眠りにつくのだった。

時変わり編 5 (後書き)

海斗「新しいオリキャラ登場です」

圭一「なんだか胡散臭い男だな」

海斗「ジャーナリストですからね、いろいろあるんですよ。ほら、  
なにかの核心に迫っているとか・・・」

圭一「まさかな・・・」

海斗「それはまた次回。コメント・評価待ってます!!」

時変わり編 6 (前書き)

海斗「いよいよ、搜索開始ですね」

圭「心配だな。何も食べてないんだろ??」

唯「それに雨での寒さをしのぐものもなかったし・・・」

海斗「それでは行方不明になった3人はどうなったのか??そして彼らを搜索する3人はどうなるのか??それでは本編スタート!!」

## 時変わり編 6

翌朝朝食を済ませた圭一たちは3人の搜索に乗り出していた。今いるのは4人。

中の柊子は1人では危険だということで、唯と一緒に行動となった。「ここからはそれぞれ分かれて探そう」

圭一の提案に武田も2人も頷く。

武田も調査がてら協力してくれるということに心強い。

唯たちは東を、圭一は西を、武田は北を探すことになった。

森の中に入っていく唯と柊子。

もしかすると田無という自分と同じく雛身沢について興味を持っている女性が調査に2人を連れて行ったのではないかと思ひ、歴史的に有名なところを中心に探していた。

雑草を掻き分けて進むと先には大きな沼があった。

しかしそこはすでに埋め立てられたところであり、新聞などでも話題に上がった毒ガスを排他という鬼ヶ淵沼だった。

コンクリートではないが、土でそこまで埋め立てられた沼。触ってみてもざらざらとして土の感触だけだ。

あたりには人影はなく、あれだけ合唱していたひぐらしの声もない。なんだか・・・不気味だな。

たった1日で大きく変貌した雛身沢。

ちよいちよいと上着のすそをつまむ柊子を連れて次の場所へと急いだ。

ついで来たのは祭具殿だった。

かなりの年月がたったためか、そこはもはや蔵とはいえなかった。

屋根は押しつぶされ、扉は半開き状態。

中からは不穏な雰囲気の流れ出ていた。

震える柎子を背中に隠しながらゆっくりと中に入る。

「田無さん??達哉??奈々??いるなら返事してくれー」

唯の声が虚しくも祭具伝の中を反響する。

「やっぱりいないのかな??」

後ろでおずおずと顔を出して言う柎子。

「そうかもな、しつかしどこ行っちゃったんだ??もうすぐ夕方になるし、何も食べてないだろうに、そう遠くにはいけないだろうにな」

昨日の昼から失踪した3人。

昨日から何も食べていないだろうにと心配になる。

ゆっくりと中に入る唯。

そこは泥と雑草でひどく汚れた空間だった。

くもの巣があちらこちらに張り巡らされ、大きいものから小さいものさまさま。

それらには虫が無常にもから娶られ、彼らのえさと化していた。

もしかすると彼らもあの虫のように何かに捕まったのではないかと  
いまだ捕まっていない、雛身沢連続化意思事件の犯人について考え  
てしまう。

そんなことはないと思死でふざけた考えを消そうと躍起になる。

奥へと進む。

目の前にはところどころが屋根が落ちたときに傷ついたものや、年  
月と湿気で腐り、脆くなったところから折れている像があった。

「これって・・・」

口を手で押さえ、驚いている柎子。

唯も始めてまじかで現物を見る。

それはここ雛身沢村を大昔から見守ってきた神・・・オヤシロ様だ  
った。

「これが・・・オヤシロ様」

呆気にとられた油井の横で、また柎子の悲鳴がする。

何があったのかと不栄向くとそこにはグロテスクな拷問器具があち

らこちら二歩折り投げられていた。

まるでついさつきまで使われていたような感じを出していた。

あれを使って信仰しない人たちを殺したんだな……。

見ているだけでも顔を背けたくなるようなものばかり。

予想してみても、最悪のものばかりが映る。

柀子があまりにも震えるためにここにはこれ以上いるべきではない  
と思う唯。

彼自身も吐き気をも要していた。

雛身沢についてはもっと知りたい。

しかし、あんなむごいものを間近で見ることができるとは興奮と不  
快感が半々だった。

それから何とか暗い道を小さな形態の明かりを便りに古手神社に戻  
った二人。

そこに武田が胡坐を書いて缶ビールを飲んでいる姿だけがあった。

「あいつならまだ帰ってきてないぞ?？」

ひつくとしゃっくりをしながらニヤニヤと笑いながらいう。

あたりにはかなりの量の缶が転がっている。

結構前に帰ってきていたらしい。

「何か見つかりましたか?？」

そんな唯の質問にいいやと嘆息を入れながら返す。

「俺はかつての家の中まで色々見て回ったが何も不審な点も人も見  
なかったな。ヒック……しかしあいつはどこまで捜しにいったん  
だか。いやあ??もしかするとあいつも捕まったか?？」

ニヤニヤと笑う武田。

「そんな……圭一さんまで」

ここで一体何が起きているのか。

分からない恐怖に踏み潰されそうになる。

「やはりここには何かがある……それが人間か……それとも鬼  
か……」

武田がまた一口ビールを飲む。

カチカチと腕時計の秒針がなる。

「これって・・・オヤシロ様の祟りなのかな・・・??」

「柊子??」

急に頭を抱えて震えだした柊子。

そんな彼女の肩に手を乗せようとしたが勢い欲振り払われる。

そんな行動に呆気にとられる唯。

「きつとこれは祟りなんだ!!」

「私たちは祟られている!!」

「もうどこに行っても私たちは祟りから逃げられないんだ!!」

「どうせここにいってもやつてくるんでしょ!??」

一体何がと思う唯。

そしていきなりの凶変にさすがの武田も驚いてビールの缶を取り落としていた。

「きゃははははははは!!」

「そこに来てるんでしょ!!オヤシロ様!!」

「何も来てないよ柊子!!」

がしつと今度は正面から両肩をつかんだ。

勢い余つてぎりぎりと力を込めてしまった。

しかし痛いともいわずにうつむいている柊子。

そしていきなり顔を上げたその目は虚ろなものだった。

「嘘だ!!」

キーンと耳鳴りがした。

こんな近距离で叫ばれるとは思わなかった。

それに自分は本当のことを言っただけだ。

しかし柊子は嘘だといった。

後ろを見てもただ扉があるだけ。

誰もいない。

武田に一応確認しても首を横に振るだけ。

しかし柊子は完全におびえている。

「嘘だ!!嘘だ!!嘘だ!!」

必死に表情になって叫ぶ。さらに扉の先に指を指している。震える指は一体何を指しているのだろうか。

「だって・・・そこにいるよ」

「何が・・・??」

見えないはずのものが見えている??と恐ろしいことを考える。

しかしオカルト好きの彼にとってそんなことはありえないとは一概にも言えない。

「角の生えた女の子がそこにいるじゃない!!」

「馬鹿言つてんじゃネエぞお嬢ちゃん!!いくら怖いからってそんな幻想じみたこと言つてんじゃねえ!!」

酒が回つて短気になっている武田。

「本当にいるんだから!!巫女服を着た女の子!!」

柊子は一体何を言っているんだ??

ダンダン不安になって来る唯。

しかしそんな柊子もまた、また表情を引きつらせる。

「どうということ・・・??」

「どうしたんだ??」

「ここにはいけないって??ねえ・・・どうということ??」

「どうということだ!??」

武田が我慢できずに切れる。

そのときド眼といきなり扉が開けられた。

びくつとしたが、最初は圭一が帰ってきたのかと思った。

しかしそこにいたの軍人たちが着ているような服を着た男たちだった。

その手には拳銃が握られており、誰もが鍛えられているように見えた。

そして奥からリーダーらしき男が出てくる。

髪を後ろで結び、目は釣りあがっつていて、自分たちを睨んでいる。「殺れ!!」

無情にも拳銃から発砲された。

時変わり編 6 (後書き)

海斗「明日でこの作品もきつと完結かな??ん??暗闇から走ってくるのは圭一さんだ」

圭一「はあはあ・・・待ってる今行くからな」

海斗「圭一さん??何をそんなに急いでるってそれ・・・」

泉海斗が見たのは一体???

追記 コメント・評価待ってます!!

時変わり編 7 (前書き)

海斗「さあ、いよいよ完結です」

圭「山狗との戦いか……。あれで行くか……」

海斗「圭さん……？？」  
「一体何を？」

暗い森の夜道を1人の男性が走る。

風が吹くと木々が唸り。

風が吹くと草花が滑らかな音色を奏でる。

しかしそんな音もこの状況では破滅への序曲にしか聞こえない。

走る男性は大きく肩で息をしている。

腰には長い日本刀。

ズボンは泥でところどころが汚れている。

木の葉を無理やりこじ開けて走っているために、鋭いもので小さな

切り傷ができる。

「ハア・・・ハア、待ってる今行くからな」

その男性は園崎圭一。

3つに分かれて搜索していたが、行方が分からなくなっていた人物だった。

ものすごい速さで森を駆け抜ける。

片手には電池が切れてしまっている携帯電話が握られていた。

「俺がつくまで・・・間に合っていればいいが。ああ、クソ。あい

つなら間に合う」

ふと思いつくかぶのは和服がよく似合う自分の妻。

携帯で話していた相手は彼女なのだった。

踏みしめるたびに地面が沈む。

それによってさらに速度が上がる。

たんと地面を真上に踏み込み、跳躍する。走っていると面倒だと思

った圭一。

木の上を走る。

そしてようやく抜けた森。

目の前には石段、古手神社の前だった。

上では何やら銃声や、建物に激突する音。

「ち、もう始まつてる」  
ギリツと齒噛みする。

そして再び足に力を入れると一気に石段を飛び越える。  
そのときの赤い光がきらめいていたのを、まだ誰も見ていない。

ダアンという銃声とともに重なり合うように発砲された銃弾が、謎の男たちの発砲したものをすべて打ち落とす。

一体何が起きたのかと唖然としている両者。

油井たちは殺されたと思っていたために、生きていることを知るとへなへたと座り込んでしまう。

「お前らが・・・雛身沢で起きた事件の犯人・・・だな??」

武田がジャーナリストの顔になると、酒で酔ったからだとは思えないくらいのしつかりとした足取りでたつ。

手にはなぜかメモ帳とペン。

そして首にはカメラが合った。

「あんなこんな状況で取材ですか!??」

激しく場違いな行動に激しくつつこむ唯。

しかしいつの間にか囲まれていた。

数人はどこからか富んできた銃弾を発砲したものをだがさうとつろつろしている。

「いやしかしまさかあれ(・・・)を見られるとは思わなかったな・・・」

釣り目の男が参ったといわんばかりに手を顔に当てていう。

あれとは一体なんだろうかと思う唯。

もしかしたら連続事件に関わることなのだろうかとも思った。

「あれとは・・・もしかして昭和58年までの5年連続で起きた連続化意思事件についてか??」

武田が低い声で探るような目をして言う。

なんとしても暴いてみせると言うジャーナリストらしい覚悟であった。

ハツハツ八と笑う男。

「何がおかしんだお前・・・」

「まさかまだあのときのことを嗅ぎまわっているやつがいるとはな・・・。まったくまだあっち（・・・）も片付いてないってのに・・・」

「あつちつて・・・どういうことだ??」

さつと血の気がうせていく武田。

その言葉に意味を彼なりに解釈し、最悪の場合を思いついてしまったのか。

それに彼の正体はいつたい??と思う唯。

確かにオカルト好きでないものが、まだこんな昭和に起きた事件をかきまわってるだなんて。

不思議としか思えない。

しかしそうなると圭一もまた同じことが言える。

彼もまた、この事件について色々かきまわっていた。

どう見ても一般人にしか見えない彼がどうしてと。

確かにたくさん仲間を殺されたことがあるが、その恨みからだろうかとも思える。

「俺達のことをかきまわっている頭の黒いネズミたちがいるってことだ。まったく一人はまず記憶がないからいいとして、面倒なやつがまだ2人いるからな」

「お前・・・まさか」

そのまさかという言葉で武田が彼らと精通していることが分かる。しかし一体誰とだと思っ。

「しかしまさかやつらの仲間に出会えるとはな・・・。まずはお前から死んでもらおうか??」

「生憎だが・・・俺はまだ死ねないんでね」

「俺は知っているぞ??お前が恋人殺されたから俺達をかきまわってることをな」

「お前・・・」

明らかに顔に怒りが浸透している。

彼もまた、雛身沢の事件の被害者なのだろうと思った。

「天国で恋人が待つてるぜ?? さっさと行ってやれよ・・・」  
かちやりと拳銃が構えられる。

1人ではない、回り全員だった。

蜂の巣だ・・・。

完全に死が決定したことを確信した。

ぎゅっと震える柎子を抱きしめる。

武田もまた歯噛みする。

せつかく見つけた宿敵を目前に、その敵に殺される。

長年の恨みを晴らす前に殺されるとは、悔しいことこの上ない。

「死ね!!!」

拳銃のトリガーが下ろされる。

そのときだった。

取り囲んでいた男たちの背後から、いきなり数人のスーツ姿の男たちが飛び出してきたのだ。

虚を突かれた男たち。

発砲する前に殴り飛ばされ、気を失う。

慌てて後ろから攻撃しようとするも、何かでなぎ払われる。

「葛西?? 後ろが隙だらけよ??」

「すみません。久しぶりの大一番ですから興奮して」

「これを圭ちゃんに見つかつたら何いわれるか分かりませんよ??」

「ですね」

くすりと笑うロングヘアの女性と同じく笑みを浮かべるガタのいい男性。

どうやら仲間同士だが、言葉少なくとも考えていることが分かっているように見えた。

そんな彼らの周りでは次々とスーツの男たちが軍事服の男たちを捕まえていく。

どちらも鍛えられているようだが、スーツの男たちのほうが戦いな

れているようだった。

顔のあちこちの古傷みたいなものがある。

彼らは裏社会のすべてを取り仕切っている園崎組の幹部たちだった。次々とやられていく猛者たちを見て、釣り目の男は後ずさりをする。

「もう降参したらどうですか？？小此木さん？？」

女性がやんわりとした口調だが、そこには微弱ながらも殺気が込められている。

ぐっとたじろぐ小此木。

しかしさつと手を背中に回すとそこからライフルを取り出した。

それを見て権勢が逆転する。

「ヒヒヒ、これで逆転だな」

「待て、こつちには人質がいるんだぞ？？」

「そんなやつらどうせいくらでも後ろにいるさ。もうすぐ増援が来る」

「まさか・・・私たちが来ることがばれてたの？？」

「何やら不審な動きがあったもんでな？？三佐に頼んだら快く受け入れてくれたのさ」

どうやら小此木は人質もろとも殺す覚悟で構えているらしい。

さらに彼にはまだダイナマイトもある。

そんなものを使われたらいくら裏社会で戦ったものでもひとたまりもない。

すると後ろから誰かが走ってくる音がした。

現れたのは小此木たちと同じ服を着たものだった。

「来たか」

勝ち誇ったかのような笑みを造る。

反対に葛西たち園崎組はまずいと焦る。

「詩音さん、ここは我々に任せてください。あなたはあの3人と一緒に」

「馬鹿いつてんじゃないよ葛西。あんたらを死なせたら私が圭ちゃんに何言われるか」

「しかしことがことです。きっと圭一さんも分かってくれます」  
「葛西！！私たちは家族みたいなもんでしょ?? だったら見捨てることなんてできないのさ」

葛西の目に映るその女性は彼女の母親とそっくりの顔だった。

かたくなな覚悟を持ち、それを守り通そうとする彼女。  
彼がかつて恋心を抱いたその女性を瓜二つだった。

こうなってしまうえば彼女を説得できるのはたった一人。

彼女の夫であるあの男しかできなかった。

「圭ちゃんは来ます。必ず」

そうですねと笑みを造りながらいう。

小此木に映る来た仲間の様子がおかしい。

どこか焦っているようだ。

「どうした?? ほかの連中は??」

その男には恐怖の色が濃くあった。

「お・・・お伝えします。われわれ増援組は・・・壊滅しました」

「なんだって!?!? どういうことだ!?!」

ライフルを構えながら片手でその男の胸倉を掴み上げる小此木。

ヒイと悲鳴を上げる隊員。

「お・・・」

「お??? おが何だ??」

「鬼です!! 鬼にやられたんです!!」

何か恐ろしいものを見たという顔で叫ぶ隊員。

こいつは大丈夫なのかという感じで見ていた小此木だが、どこか様子がおかしいことを感じ取る。

まったく後ろから後を追ってくるものがないのだ。

そして幾多もの視線を潜り抜けてきた小此木だから分かる。

あの石段の下に何かがあるということ。

それを感じたこともない殺気を迸らせた何かだ。

いつの間にか夏の音色を奏でていた虫たちの合唱が途絶える。

風も無い。

しかし木々や草花は何かに触れたかのように静かの揺れている。  
詩音も葛西もそれを感じていた。

そしてそれが何から発せられているのか、それも分かっていた。  
場の雰囲気が変わったことしか分からない唯と何がなんだか分から  
ずに戸惑っている柊子。

カツンカツンとゆっくりとだが、石段を上がってくる音がする。  
今しがた着たばかりの隊員はその音が一つするたびに悲鳴を上げて  
いる。

一体何が起こってやがる??ほかのやつはどうしたんだ。

緊張に体を震わせながら、情けない隊員を見下す。

そして指示どおりにことが進まないことに歯噛みしていた。

カツンカツンとまたゆっくりと石段が叩かれる。

さらにぴちゃんぴちゃんという何かが滴る音。

そして香ってくるのは木々や花々の自然の香りではなく、真っ赤な  
血の鉄臭く、生臭い香り。

血・・・それにこれは殺気ってレベルじゃネエ・・・。

歴戦の猛者である小此木でさえ恐怖するそれ。

「隊長・・・ここは引きましよう!!あんな鬼に敵うやつなんてい  
るわけないんですよ!!」

「何言ってやがる!!こんな時代に鬼なんているわけねえだろ!!」

そして石段の向こうから頭が見えた。

別段普通の人間のものである。

鬼だなんて空想の産物だ。ましてやこんな時代にいるわけが  
・・・。

しかし小此木の思考はそこで途切れることになる。

目の前に現れたそれを見て、思考も何もかもを奪われた。

隣で震えていた隊員の一人はそれを見て失神している。

現れたそれは・・・。

「バカな・・・お、鬼・・・だと??」

そこに現れたものの二つの目はまさに鬼のそれのように真っ赤に染

まっていた。

そしてそれが持つ片手にはおそろくやってこないだろう隊員たちのものである血でべっとりと汚れていた。

「鬼だかしらねえが、簡単な話！！殺せばいいんだよ！！」

一気にライフルを発砲する。

ダダダダとうめき声を上げながら銃弾が飛び出し、鬼に向かって放たれる。

目がおかしいが、よく見りやただの人間じゃねえかよ。

そう鷹をくくった小此木だが、次の瞬間その現れた男は日本刀を構えると恐ろしい速さでつつこむ、そして。

キンキンキンつとすべての銃弾を真つ二つにしてさらに小此木のど下へと切っ先を突きつける。

・・・バカな。人間業じゃねえ。

一瞬のうちにすべてをひっくり返された。

「あんた・・・確か小此木造園にいた人じゃないか??」

小此木もそれを言われて、目の前にいる男が誰だかを確信する。

あの大きな、この田舎村に不釣り合いな家を建てた前原家の息子。

「お前・・・前原・・・圭一」

「やっぱりあのときの人か。何で造園の人がこんな物騒なものを持つてるんだ??」

下げた手にあるライフルを顎で示して言う。

「ふ、それを言うと思うか??」

「いや??というか、あんたたちが来たのは俺達が雛身座話題災害について調べていることと何か関係が??」

「・・・」

赤い鋭い目でにらまれる小此木はでかかった言葉を何とか押しとどめる。

まるで心まで操られているかのように、簡単に言葉に出てきそうな気がした。

なんだ・・・この感じは・・・。

しかし沈黙していたこの状態に終止符が打たれる。  
ぱあんと言う銃声が一つ。

そしてキーンと言うそれを弾き返す音。

「あんた・・・田無さん??」

そこにいたのは圭一に向かって拳銃を発砲していた田無三四だった。

「三佐!!このやろう!!」

はっと気づいた小此木はライフルを圭一に向かって殴りつける。

しかしそれを上に跳んで回避し、その途中にライフルを真っ二つにする。そのまま詩音と葛西たちがいる元へと着地する。

「圭ちゃん、大丈夫??」

「詩音か、少し疲れただけだ。部活と比べれば、どうてことないさ」

「ボス、良くぞご無事で」

「相変わらず葛西さんにそう言われるのはなんだかこそばゆいな」

相変わらず真っ赤な瞳をしながらそれぞれ詩音と葛西を見ながら話す圭一。

彼らの後ろには捕まって捕縛された山狗たちがいた。

「あの圭一さん・・・ですよね??」

「ん??無事だったか、よかったよかった」

赤い瞳ながらも安堵している圭一。

柊子はそれを見てひいと悲鳴を上げてしまふ。

しかし今はそれを気にしている暇はない。

「あらあら、みんな捕まっちゃったのね。せっかく彼をおびき出したのにみんなやられちゃうんだもの」

「三佐・・・ということとはほかのものたちは」

「ええ、あの鬼にみんな食べられちゃったわ」

くすくすと笑う田無だが、それを聞いた小此木はさっと真っ青になる。

「田無さん・・・いや鷹野三四さんですよ。あの時、入江診療所にいた」

「あれ??ばれちゃったのかしら??」

しかしそれに答えたのは圭一ではなかった。

「俺の情報網を甘く見るなよ??あんたの事をずっと調べてたんだからな」

「あなたはいつぞやのジャーナリストさん??あのとときの記事は読ませていただきましたけど、あんなものでよかつたんでしょつか?」

「ああ、俺にかかればそんな答えでもいいものになる。だがあのとときのインタビューで分かつたよ、あんたが依頼人からの探し人だつてことをな」

武田はずつと前にとある警察関係者から写真に写るものを探してほしいという依頼を受けた。

武田の表の顔はジャーナリストだがその職柄を生かした裏の顔として裏社会とのつながりもあつた。

もちろん薬などそういうものではなく、あくまでも仕事に使えるような常任では知りえない情報を貰うために利用していたのだ。

その警察関係者は、とある自分が書いた記事に写つた女性を見て相談に来たのだ。

そして詳しいことを聞く。

雛身座話題災害について・・・それを聞かされた。

その警察関係者は、いまだあれが災害によるものではないと思つているらしい。

それを証明するものは持つていないが、彼はとある少女からこうなることを聞かされていたらしい。

自分は5年後の祭りの日に殺される。

それを知つていながら彼はその子を救えなかつたらしい。

それに妻も仕事の都合で失つてしまい。今は男の手一つで娘を育てているらしい。

さらにその男の先輩もまた、雛身沢で何かがあり、そのためか記憶喪失になつていようだ。

「あれは私のことを知るためのものだったのね。まさかとは思つて

たけど」

「ならもう少しで俺は殺されていたってわけか??あぶねえなあ」  
胸を下ろす武田、彼もまたぎりぎりの線で見えない敵と戦っていたのだ。

「さあ、観念したらどうですか鷹野さん??あのときの災害つてのは嘘でしょう」

「あなたがお姉たちを殺したんです、村の人たちを殺したんです」

「観念ね・・・、してあげたいのは山々なただけれどももう少し実験したいことがあるのよね。それが終わるまでは私は死ねないの。おじいちゃんのために」

バラバラバラと大きな音がする。

それとともにものすごい風が吹き荒れた。

「またどこか出会いますしょう??素敵な夫婦になっているのを見て嬉しいわ。圭一さんと詩音ちゃん」

空を見上げるとそこには大きなヘリコプターが来ていたのだ。

いつの間に??

そう思うや否や、そこから梯子が下ろされる。

それに捕まる鷹野と小此木。

そして小此木はこちらに向かつて持っていた拳銃で威嚇してくる。逃げるための時間稼ぎだった。

逃がすか、みんなの敵だ。

そう思うや否や、恵一は再び刀を構えて突進する。

すでに多角まで上がっていた二人に刀は届かない。

そう思われていた。

一気に力を足に込め、跳躍する。

「な!??」

ありえない光景、そしてその赤い瞳。

恐怖するよりも、興奮していた。

あの目を彼女は知っている。

誰よりもそれを知りたかった彼女が知らないはずはなかった。

「本当にあつたのね  
しかし鷹野の言葉は。」

ダアンという小此木の発砲した銃声でかき消された。  
バギンという音とともに、圭一の構えていた刀がぱつぱつに折れる。

「チクシヨウ!!」

届かない手を伸ばしながら地上へと落下していく圭一。

それをただ見つめているしかできない鷹野と小此木は急いで中へと入る。

「危なかつたわね、鷹野に小此木」

「助かりました、野村さん」

野村という女性。

にやりと笑い、夜明けとともに上る太陽を見つめていた。

どっと疲れがからだを覆う。

圭一は重りを何個も持ったかのような体をひざを折って地面につく。

「圭ちゃん!!」

向かってくるは圭一の妻である園崎詩音。

彼女もまた、ここ雛身沢村出身である。

しかし当時は置き飲み屋にあるお嬢様学校に通い、そこに下宿していたために災害には巻き込まれなかった、

しかしそれによって大切な仲間と家族を失ったのだ。

そしてそのとき唯一そばにいてくれたのが葛西だった。

そして数カ月後、雛身沢の唯一の生き残りがいると聞き、その人物が入院している病院へといった。

そこにいたのは彼女の姉が恋心を抱いていた少年だった。

最初に会ったのは確か置き飲み屋で不良にたかられていたときだっただろうか。

まるで初恋の人みたいに現れて、そのときは違うやり方で追い払ってくれたのだ。

彼もそのときのことを覚えていたらしく、すぐに気があった。

それから彼は自分が最後に見てきた不振なことを解明したいということ、葛西に対して土下座をしてまで鍛えて欲しいといったのだ。それから死に物狂いだからだを鍛え、勉強し、一流の大学を卒業して名実ともに園崎組のボスとなった。

それ方はとんとん拍子である。

詩音との結婚を果たし、裏社会を統括し、表社会でも園崎の当主を支えている。

今はないが、あの赤い瞳はいつからか夢に出てきた巫女服の少女から受け取ったものだ。

あれが一体何かは分からないが、あの瞳になっているときは恐ろしいほどの力が出た。

しかし今の状態のように反動が大きい。

これを使うのはきつと敵を討つときだと思っていた。

そして京、その使うときが来たというのに、最後の最後でとり逃してしまった。

これで彼女を捕まえるチャンスがなくなったわけではないが、成形などをされてしまえば色々と洗いなおさなければいけない。

「大石さんたちに謝らなきゃな・・・」

せつかくここまでお膳立てしてもらったというのに失敗してしまったことを悔やんでいた。

大丈夫だといいかける詩音。

ぐつたりと詩音にからだを預けている圭一。

そんな圭一に唯は尋ねる。

「圭一さん、圭一さんは今までずっとどこにいたんですか??」

危険が去った今だから聞けること。

ずっと一人行方が分からなかった圭一。

「いなくなっていた2人・・・君たちの友達を探しに行っていた」

達哉と奈々・・・行方が分からなくなっている唯たちの親友。

しかしそういう圭一は喰らい表情だ。

そしてゆっくりとした口調で言う。

「もういいんじゃないか??出てきなよ」

周りがえ???と言う表情になる。

そこに現れたのは行方不明になっていた……。

「達哉!!!」

そこには斉藤達哉がいたのだ。

その姿はあの時と打って変わってきている服はぼろぼろ、顔はやせこけ、目の下は隈ができていた。

そして何よりひどかったのは首筋にできているひっかき傷だった。ずたずたになつた首筋の皮膚。

そこからどくどくと流れ出ている血。

「今までどこに行つてたんだよ!!!心配したんだぞ」

そういう唯だが、達哉から帰つてきた答えは驚きのものだった。

「お前もか……??お前も俺達の仲をぶつ壊したのか!？」

そう言つていきなり掴みかかってきた。

ものすごい力で首を絞められる。

苦しむ唯、バタバタともがくもまったく解ける様子はない。

「何してんのよ!?葛西早く」

詩音の言葉に反応して、葛西は怪力で何とか達哉を引き剥がす。

唯の首筋には紫色の手形がくつきりとできていた。

ハ―ハ―と呼吸を整える唯。

いきなり親友に殺されかけたということ顔が真っ青だ。

とうの達哉もまた、俺達の仲を壊しにきたのかと叫んでいるばかり。言っていることが判らないという周りの者たち。

「落ち着いたところでそろそろこの成り行きを話そうかな……」  
よっこらせと詩音に預けていた体を起こす。

「彼は今ここにいない佐々木奈々さんを殺したよ」

「え!!!」

「そ……そんな」

驚く唯と、愕然とする柊子。

圭一が最初に行ったのは入江診療所後だった。

診療室にはつい最近使われたあとが残っており、まさかと思って飛び出し、まっすぐ森の中へと入った。

奥へと進むとぐったりと倒れた奈々と呆然と立っている達哉がいた。それぞれの手には鉄の棒らしきものが握られており、奈々の頭はすでに大きく陥没していた。

ぼりぼりと首筋をかく達哉。

「かゆいかゆい・・・」

首筋からは血が流れ出る。

何をしているんだと叫ぶとはつとこちらを見て、恐怖に取り付かれたような顔になって逃げ出したのだ。

後で気がついたことだが、そのとき圭一はその赤い瞳になっていたようだ。

それが一体どういうことでできたのは分からないが。

「彼らはどうやら恋人同士だったらしいね」

それを聞いた唯はコクリと頷く。

しかしそれはほんの短い期間であった。

すぐに達哉を捨てて、また別の男のところに行ったのだ。

とはいえ奈々が1人の男の元にいるなど、ほとんどなかった。

「達哉君は奈々さんの前に付き合っていた子がいるようだ」

それを聞いてびくつとする達哉とそれを知っているのか柊子もこちらを見る。

「志保ちゃん・・・」

結いもその名前を聞いて思い出したようだ。

「志保っていったら・・・下級生の??」

進藤志保・・・唯たちと同じ大学へと通っていた女性だ。

「その志保という女性とずっと付き合っていた達哉君が突然奈々さんと付き合いだした。それについて何か不思議に思わなかったのかい??」

確かにあんなに楽しそうに話している二人が突然分かれただなんて

答辞は信じられなかった。

しかし達也は気にしていないといっているがどこことなく悲しそうな顔をしていたのを二人は覚えている。

それから達哉と付き合いだしたのは同じサークルの奈々だった。

しかしそれも1ヶ月持たずに解消となった。

そのときはかなり達哉が切れていたが奈々は平然としていた。

たぶんそのことから彼らの仲が悪くなったのだらう。

「あいつが・・・」

すると達哉が口を開いた。

その瞳には先ほどのような虚ろなものではなく、ちゃんと光があった。

「あいつが俺と志保の仲を引き裂いたんだ!!」

ものすごい怒りの形相である。

あんな顔は始めてみる唯。

「どういうことだ?」

「俺がまだ志保と付き合っているときだ、奈々のやつは俺が結構金稼いでいることを知って志保のやつに嘘言いやがったんだ・・・」

「金稼いでるってお前・・・それ」

「ああそうだ・・・、志保が卒業したら結婚するための金だ。だが七那のやつはそれがほしくて志保のやつに俺が自分と体をあわせたとか志保のことを悪く言ってるとかお遊びだとかと嘘ばっか言いやがって・・・」

それ以上なにもいえなかった。

つまり四歩と達哉の仲を奈々が引き裂き、それを知った達哉が殺す計画をずっと立てていたということだ。

そして都合よく雛身沢という田舎、それも誰もいないところに来た。そして来た日があのだ連続事件の日だった。

犯人をいまだ見つからない犯人にしようとした達哉だが、そこで誤算が出た。

田無・・・鷹野三四によって彼らになんらかの異常が出たのだ。

「雛身沢症候群・・・その首のかゆみもすべてそれが原因だ。早く隔離施設に連れて行かなきゃな」  
そういう圭一、再び瞳が真っ赤になっていた。  
のどかな旧雛身沢村を舞台に悲しい事件と終わらない戦いの幕が下りた。

それからどれくらいの日がたっただろうか。

園崎圭一は夢を見ていた。

そこは古手神社にある祭具殿。

何故こんなところに立っているのだろうかと思う。

周りには誰もいない。

あの子はいないのだろうか・・・。

木々がさわさわと風になびく。

ひぐらしが控えめな合奏を奏でる。

無意識に祭具殿を開ける。

仲には何もなく、ただちよこんと座る巫女服を着た少女がいるだけだった。

『あうあう圭一が入ってきたのです。ここはだめなのです。早く帰るのです』

「何で俺のこと知ってるの??」

『あう??圭一が返事をしたのです。それはありえないことなので』

「どうして??」

『だって圭一は僕が見えませんのです。だって僕はオヤシロさまなのですから』

「でも君は見えるよ??だから俺ははなしかけている」

『あう!?!?そうでした、圭一に』

しかしそこで会話は途切れる。

激しい痛みが目に入った。

翌日病院に行ったが異常はないらしい。

しかしそれ以降あの赤い瞳には一度もならなかった。

圭一自身は鍛えていたためにあれに頼ることももともと少なかったために気にしていなかった。

あの時見た少女はあの瞳を貰ったときに見た少女と同じだった。

そしてあの瞳は一体どこにいたのだろうか。

「圭ちゃん・・・どうしたのそんなにぼうつとして」

「ん??あの瞳はどこに行ったのかなって。なんとなく考えていた」

「それで何か考え付いたの??」

「別の世界・・・」

「え??」

ポツリと言った圭一の言葉に疑問を浮かべる詩音。

「別の世界にいったんじゃないかって・・・あの瞳はこの世界にはもう用はなくなつたんだよ」

「どうしてそう言えるの??」

聞き返した詩音。

圭一はそんな詩音に向き直って言う。

「だってあれは」

だからだよ、そついうと詩音は。

「そつね、きつとそれが雛身沢を見守ってくれている」

「ああ、きつと祭囃子の世界で・・・」

(完)

時変わり編 7 (後書き)

海斗「長い……」

圭「長いな……」

海斗「本当はA410枚程度で終わるつもりだったんだけど、最後のほうでなぜかこんなにもなっちゃいました」

圭「増えすぎたる!? まあ、でも詳しく書こうとするとこうなるのは仕方がないのか」

海斗「仕方がないんです……。読者さんに分かりやすく呼んでいただきたいもので……」

圭「それよりも、解のほうを投稿したが……」

海斗「はい、第1章は崇殺し編です。すでに出題編で原作と似たように書いてしまったものがありますが、私のオリジナル崇殺しを投稿しちやいます。暗いのにカップリングだなんていいのか分かりませんが……。皆さんはご想像できますか?」

圭「誰だろうな……。??でもこの俺Kにかかればメイド・ナス・生徒に教師。なんでもこいつてんだ」

海斗「相手は子供です。年上はないですよ」

海斗「それではここまで読んでくれた皆さん。ありがとうございます。こんな駄作者ですが、回答編の解のほうも引き続きお付き合い願えれば幸いです。それではまた明日!!」

K「サンキュー!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6172m/>

---

ひぐらしのなく頃に

2010年12月4日11時50分発行